新潟県埋蔵文化財調査報告書　第257集

一般国道８号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅹ

横マクリ遺跡Ⅱ

２０１５

新　潟　県　教　育　委　員　会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅹ

横（よこ）マクリ遺跡Ⅱ

２０１５

新　潟　県　教　育　委　員　会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育員会は、道路建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。

一般国道８号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断して京都市に至る幹線道路で、北陸地方と京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の発展に大きな役割を果たしています。しかし、国道８号のうち糸魚川市間脇から押上地区では、道路幅員が狭く人家連坦部を通過するため、交通事故や渋滞・騒音等の交通環境の悪化が深刻な社会問題となっていました。糸魚川東バイパスはこのような問題を解決し、地域の幹線道路としての役割を強化するとともに、現道を地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

本書は国道８号糸魚川東バイパス建設に先立ち、2007 年に実施した糸魚川市横マクリ遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、平安時代には小河川が平行して流れていたこと、古墳時代前期には玉作が行われていたことが明らかになりました。

今回の報告書が、糸魚川地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただきました糸魚川市教育委員会ならびに地元住民の方々、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただきました北陸地方整備局高田河川国道事務所に対し厚くお礼申し上げます。

2015 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本報告書は、新潟県糸魚川市大字田伏字横マクリ 749-1 ほかに所在する遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は 2006 年度・2007 年度の 2 か年にわたって実施されているが、本書は 2007 年度の調査記録である。

2　本調査は、一般国道 8 号糸魚川東バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は県教委が調査主体となり、公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し実施した。

3　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の注記は、「ヨコマ」とし、調査年度・出土地点・層位などを続けて記した。

4　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

5　遺物番号は遺物の種類に関係なく通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

6　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章については各分析の文末に掲載した。

7　各種図版作成・編集は、有限会社 不二出版に委託した。

8　調査成果の一部は現地説明会、埋文事業団年報、埋文にいがた、遺跡発掘調査報告会などで公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。

9　自然科学分野に関わる各種分析は以下の機関に委託した。

　　樹種同定……株式会社 パリノ・サーヴェイ（高橋　敦）・株式会社 パレオ・ラボ（黒沼保子）

　　放射性炭素年代測定…株式会社 加速器分析研究所

10　本書の執筆・編集は、坂上有紀（埋文事業団　専門嘱託員）がこれにあたった。なお、第Ⅲ章 2・第Ⅳ章については、松永篤知の原稿に加筆・修正したもの、第Ⅰ章 1・第Ⅲ章 1 については既刊の横マクリ遺跡報文に加筆・修正したものである。また、第Ⅱ章については、既刊の糸魚川東バイパス・北陸新幹線関係報告書を参照した。

11　弥生時代後期～古墳時代前期の土器については、滝沢規朗（文化行政課埋蔵文化財係　専門調査員）、古代～中世の土器については春日真実（埋文事業団　課長代理）、石器・石製品については加藤　学（同　班長）・高橋保雄（同　専門嘱託員）の指導を受けた。ただし文責は坂上にある。

12　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。

　　国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所　　糸魚川市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 2

A　試掘確認調査 …… 2

B　本発掘調査 …… 3

C　整 理 作 業 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

1　地理的環境 …… 5

2　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要 …… 10

1　グリッドの設定 …… 10

2　基 本 層 序 …… 10

第Ⅳ章　遺　　構 …… 13

1　概　　要 …… 13

2　古代～中世（上層） …… 13

3　古 墳 時 代（下層） …… 15

第Ⅴ章　遺　　物 …… 17

1　土器・土製品 …… 17

A　古　　代 …… 17

B　中　　世 …… 18

C　弥生時代～古墳時代 …… 19

D　土　　錘 …… 21

2　石器・石製品 …… 21

3　木　製　品 …… 24

A　記載の方針 …… 24

B　各　　説 …… 25

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 29

1　樹 種 同 定 …… 29

A　2007 年度分析 …… 29

B　2014 年度分析 …… 31

2　放射性炭素年代測定 …… 36

第Ⅶ章　ま　と　め …… 40
1　土　　器 …… 40
A　古代の土器 …… 40
B　弥生時代～古墳時代の土器 …… 41
2　玉作について …… 43
≪引用・参考文献≫ …… 46
≪観　察　表≫ …… 48
遺　　構 …… 48
土器・陶磁器 …… 49
土　　錘 …… 53
石器・石製品 …… 53
木　製　品 …… 53

挿図目次

第 1 図　国道 8 号糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置 …… 1
第 2 図　1T ピット検出状況 …… 2
第 3 図　試掘確認調査トレンチ位置図 …… 2
第 4 図　横マクリ遺跡周辺の主な遺跡 …… 7
第 5 図　グリッド設定図 …… 11
第 6 図　土層柱状図 …… 12
第 7 図　遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類 …… 13
第 8 図　田伏山崎遺跡との位置関係 …… 14
第 9 図　甕の口縁部形態 …… 19
第 10 図　木製品の部位名称と計測部位 …… 24
第 11 図　挽物・曲物の部位名称と計測部位 …… 24
第 12 図　木取りの分類 …… 24
第 13 図　木製品の光学顕微鏡写真 (1) …… 30
第 14 図　木製品の光学顕微鏡写真 (2) …… 35
第 15 図　木製品の光学顕微鏡写真 (3) …… 36
第 16 図　暦年較正年代グラフ …… 39
第 17 図　土師器無台椀の法量 …… 40
第 18 図　弥生時代～古墳時代の土器 …… 42
第 19 図　棗玉の製作工程 …… 44

挿表目次

第 1 表　石器・石製品の石材別集計 …… 22
第 2 表　2007 年度分析　樹種同定結果 …… 29
第 3 表　遺構別の樹種構成 …… 33
第 4 表　器種別の樹種構成 …… 33
第 5 表　放射性炭素年代測定結果 …… 38
第 6 表　暦年較正年代 …… 38
第 7 表　古代の土器　器種構成比率 …… 41
第 8 表　古墳時代の土器　器種構成比率 …… 41
第 9 表　甕の口縁部形態比率 …… 41
第 10 表　玉作関連遺物の集計 …… 43

図版目次

【図面図版】
図版 1　全体図 (1)
図版 2　上層　分割図 (1)
図版 3　上層　個別図 (1)　河川 1 ～ 4、SD10、杭 43・46・50・51
図版 4　上層　分割図 (2)
図版 5　上層　個別図 (2)　河川 4・5、SX2、杭 24 ～ 42・44・45
図版 6　上層　分割図 (3)
図版 7　上層　個別図 (3)　河川 6、SX4・102、P9、杭 11 ～ 23、47 ～ 49
図版 8　下層　分割図 (1)
図版 9　下層　個別図 (1)　SK130、P、SX119・120・152
図版 10　下層　分割図 (2)

図版 11　下層　個別図（2）　河川 7、P108、SD151、SX101 ～ 103・105 ～ 107
図版 12　全体図（2）　下層
図版 13　古代の土器（1）
図版 14　古代の土器（2）、中世の陶磁器、土製品
図版 15　弥生時代～古墳時代の土器（1）　下層の遺構
図版 16　弥生時代～古墳時代の土器（2）　上層の遺構、Ⅴ層（1）
図版 17　弥生時代～古墳時代の土器（3）　Ⅴ層（2）
図版 18　弥生時代～古墳時代の土器（4）　Ⅴ層（3）、Ⅳ層・Ⅳｂ層、試掘確認調査
図版 19　石器・石製品（1）
図版 20　石器・石製品（2）
図版 21　石器・石製品（3）、木製品（1）　河川 1
図版 22　木製品（2）　河川 2・5・6、杭
図版 23　木製品（3）　杭、Ⅳｂ層
図版 24　木製品（4）　Ⅳ層（1）
図版 25　木製品（5）　Ⅳ層（2）・Ⅳａ層・Ⅲ層
【写真図版】
図版 26　遺跡遠景、河川 2・6、基本層序
図版 27　上層・下層完掘、杭 46、遺物出土状況
図版 28　古墳時代の土器、古代の土器、墨書土器、玉類未成品、棗玉未成品の穿孔部断面
図版 29　上層　遺構（1）　P、SD、SX、河川 1・2
図版 30　上層　遺構（2）　河川 1 ～ 3
図版 31　上層　遺構（3）　河川 4 ～ 6
図版 32　上層　遺構（4）　河川 6、SX、杭
図版 33　上層　遺構（5）　杭、遺物出土状況、完掘
下層　遺構（1）　SK、SD、P
図版 34　下層　遺構（2）　P、SX
図版 35　下層　遺構（3）　SX、河川 7
図版 36　下層　遺構（4）　遺物出土状況
図版 37　下層　遺構（5）　遺物出土状況、完掘、全景
図版 38　古代の土器（1）
図版 39　古代の土器（2）、中世の陶磁器、土製品
弥生時代～古墳時代の土器（1）
図版 40　弥生時代～古墳時代の土器（2）
図版 41　弥生時代～古墳時代の土器（3）
図版 42　弥生時代～古墳時代の土器（4）
図版 43　弥生時代～古墳時代の土器（5）、石器・石製品（1）
図版 44　石器・石製品（2）、木製品（1）
図版 45　木製品（2）
図版 46　木製品（3）
図版 47　木製品（4）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

一般国道８号は、北陸自動車道とともに関西・北陸方面と新潟県域を結ぶ主要幹線道路である。また、地元においては、山地と海岸を結んで、南北に延びる道路を東西方向に連結・連絡する重要な生活道路としての役割を担ってきた。しかし、近年の交通量の増加は通勤・通学時間帯を中心に糸魚川市域で慢性的な渋滞を引き起こし、地元からは渋滞の解消や交通安全の確保を含めた交通環境の改善を求められていた。建設省（現国土交通省、以下、国交省）はそのような状況を踏まえて、糸魚川東地区の交通混雑の解消と幹線ネットワークの充実・強化を目的に、国道８号糸魚川東バイパス（糸魚川市間脇～同市押上に至る 6.9km）の建設を 1989（平成元）年に事業化した。これを受けて、国交省と新潟県教育委員会（以下、県教委）は、計画用地内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。

国交省から依頼を受けて県教委は財団法人埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に当該地区の分布調査を委託した。埋文事業団は、早川左岸の梶屋敷地区から海川左岸の押上地区にわたる予定法線内を対象として、1999（平成 11）年 10 月 13･14 日に分布調査を実施した。その結果、調査範囲の約半分が山林・宅地・盛土であったため、採集された遺物はわずかであった。しかし、遺跡の存在が予想される地形的特徴などを加味しながら５か所の遺跡推定地が存在することを県教委へ報告した。

第１図　国道８号糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置

（国土地理院発行「糸魚川」1：50,000 原図　平成８年発行）

2　調査と整理作業

A　試掘確認調査

調査の経過

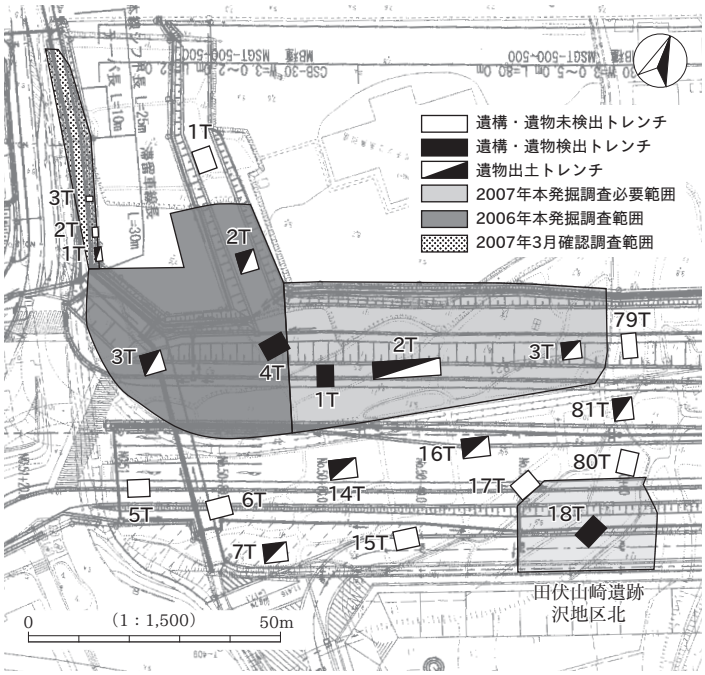
2006（平成18）年、糸魚川市田伏地区において、国道8号糸魚川東バイパスにともなう工事用進入路ならびに水路ボックスの建設工事が進められることになった。国交省から依頼を受けた県教委は、埋文事業団に当該地区の試掘確認調査を委託し、同年6月に試掘確認調査を実施した。その結果、1,340m^{2}の本発掘調査が必要と判断され、新発見の遺跡として、小字名から「横マクリ遺跡」と命名された。本発掘調査は同年8月から12月にかけて行われ、発掘調査報告書が刊行されている（第188集　横マクリ遺跡、以下、この調査区を06年調査区と呼ぶ）。

2007（平成19）年、本発掘調査実施範囲隣接地で市道拡幅と河川切り替えの計画が国交省から示されたことから、3月6・7日に確認調査を実施した。用地内に試掘坑（トレンチ、以下T）を任意に3か所設定し、重機（バックフォー）及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

調査対象範囲は250m^2、実質調査面積は8m^{2}で確認率は3.2%である。隣接地の本発掘調査の結果から、遺物包含層は地表下約2.5mにあると予想されたため法面を設けて掘削し、最終的に掘削深度は約3mにおよんだ。調査の結果、1Tでは古墳時代包含層中で確認された自然流路から土器が多量に出土した。遺物は流路以外からは出土しておらず、廃棄された出土状況を示さないため、流れ込んだ遺物と考えられた。そこで、流路が存在すると推定される範囲では工事立会いを実施し、工事中に遺構・遺物を発見した場合には別途協議するという判断となった。

また、2006年に行った調査の結果、遺跡は東側に広がると予想できたことから、2007（平成19）年5月21・22日、06年調査区の東側1,480m^{2}について確認調査を実施した。調査は、バイパス用地内にトレンチを任意に3か所設定し、重機（バックフォー）及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。実質調査面積は64.0m^{2}で確認率は4.3%である。その結果、1・2Tでは古墳時代の遺物包含層が確認

第2図　1T　ピット検出状況（西から）



第3図　試掘確認調査トレンチ位置図

でき、古墳時代前期とみられる土器などが多く出土した。また、1Tではピットも検出され、木が出土した（第2図）。これは本発掘調査でSX102cとして調査を行ったが、木は自然木（275）と判明した。2Tでは古墳時代包含層より上の層から珠洲焼が1点出土し、トレンチの西側では古墳時代よりも新しい自然流路とみられる落ち込みが検出された（河川6）。3Tでは平安時代の遺物包含層が確認でき、土師器椀や製塩土器が出土した。なお、このトレンチからは古墳時代の包含層は検出されなかった。3か所のトレンチすべてから遺物が出土したことから、調査対象範囲全面について本発掘調査が必要と判断された。

調査の体制

期　　間	2007年（平成19）年3月6・7日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己） 財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	齋藤　栄　（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課　班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（調査課　本発掘調査担当課長代理）
調査担当	渡邊　裕之（調査課　班長）
調査職員	澤田　敦　（新潟県教育庁文化行政課　主任調査員）

期　　間	2007年（平成19）年5月21・22日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	齋藤　栄　（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課　班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
調査担当	田海　義正（調査課　試掘確認調査担当課長代理）
調査職員	田中　一穂（調査課　専門嘱託員）

B　本発掘調査

調査の経過

2007（平成19）年7月30日から事前準備と並行して表土除去を開始した。表土は、調査員立会いのもと重機により掘削し、夏季の作業休止を経て8月23日に完了した。8月2日から6日まで開渠掘削を行い、続いてトレンチ掘削により遺跡の内容を確認した。8月27日からは古代の包含層であるⅣ層を人力で掘削したが、古代よりも古墳時代の土器が多い状況であった。9月11日からは一部遺構精査に着手したが、9月19日からは同時並行で発掘調査を進めていた伝極楽寺跡の空撮準備のため、一旦作業を中断した。9月25日に集中豪雨に見舞われ空撮が延期されてしまったこともあり、10月2日にようやく作業を再開し、遺構掘削を開始した。10月16日に上層（古代）の西側を完堀し写真撮影を行った。17日からは上層東側の河川1～3の調査と並行して古墳時代の包含層であるⅤ層の掘削を開始した。上層で検出した河川1～3・6はⅤ層を掘り込んでいる。Ⅴ層は河川3以東では薄くなり平面的には不明瞭で、遺構・遺物は希薄であった。下層（古墳時代）の遺構は疎らであったが、土器片が集中する箇所がいくつか認められた。それにともなう平面プランが検出されなかったことから、1点ずつ番号を付して出土位置を記録しながら取り上げを行うこととした。11月30日から遺構精査・掘削・遺物の取り上げを順次行った。

12 月 8 日には地域の住民を対象に調査速報会を実施し、53 名の参加があった。調査終盤になってから玉類未成品が出土し始めたことから、一部の周辺の土については土壌水洗を行い微細遺物の収集に努めた。12 月 18 日に空撮を行い、21 日にすべての調査を終了した。調査面積は上層 1,240m²、下層 800m² で延べ 2,040m² である。

調 査 の 体 制

期　　間	2007 年（平成 19）年 8 月 1 日～ 12 月 21 日
調 査 主 体	新潟県教育委員会（教育長 武藤　克己）
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤　克己）
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	齋藤　栄　（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課　班長）
調 査 総 括	藤巻　正信（調査課長）
調 査 指 導	寺﨑　裕助（調査課　本発掘調査担当課長代理）
調 査 担 当	石川　智紀（調査課　班長）
調 査 職 員	樋口　重正（調査課　主任調査員）
支　　援	株式会社 古田組　　現場代理人 竹内　一喜　　調査員 松永　篤知

C　整　理　作　業

整理作業の経過

遺物の水洗などの基礎的な作業は、2007（平成 19）年度の本発掘調査と並行しながら進め、本発掘調査終了後 1 月～ 3 月は上越市柿崎区に所在する古田組遺跡調査研究室で遺物の注記・一部の遺物実測・原稿執筆を行った。本格的な整理作業は 2014（平成 26）年 4 月から開始し、印刷・刊行まで行った。

自然科学分析については、2007 年に放射性炭素年代測定・樹種同定を委託したが、分析点数が 10 点のみであったため、2014 年では木製品の掲載個体全点について樹種同定を追加して行った。

なお、報告書の編集作業（本文･レイアウトをふくむすべての編集）は、埋文事業団の報告書作成基準書により、有限会社不二出版に委託し、デジタルデータ（DTP）で納品を受けた。不二出版には以下の資料を支給した。

本文・挿図：ワード形式、エクセル形式データ。挿図原図、図案。

遺構図面図版：原図、レイアウト図案、文字データ。

遺物図面図版：原図（石器・石製品）、トレース図（土器、土製品、木製品）、拓影、レイアウト図案、文字データ。

遺構・遺物写真図版：データ（CD）、レイアウト図案

整理作業の体制

期　　間	2014 年（平成 26）年 4 月 1 日～ 2015（平成 27）年 3 月 31 日
整 理 主 体	新潟県教育委員会（教育長 高井　盛雄）
整　　理	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 高井　盛雄）
総　　括	土肥　茂　（事務局長）
管　　理	熊倉　宏二（総務課長）
庶　　務	仲川　国博（総務課　班長）
整 理 総 括	高橋　保　（調査課長）
整 理 指 導	春日　真実（調査課　整理担当課長代理）
整 理 担 当	坂上　有紀（調査課　専門嘱託員）
作　　業	小熊　紀子　　小出　有紀（調査課　嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

横マクリ遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川市は、古くから史跡松本街道の日本海側起点として知られている。「塩の道」とも呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ 30 里（120km）におよぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る道として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県へ通じる国道 148 号線と JR 大糸線、海岸沿いを通過する北陸自動車道・国道 8 号線・JR 北陸本線の交点にあたる交通の要所である。

糸魚川市は、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にあたる「糸魚川 - 静岡構造線」が分布する。この構造線を境界として、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ペルム紀に至る青海－蓮華変成岩帯など、古生代･中生代の堆積岩･火成岩より成り立っている。青海－蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、「ひすい輝石岩」は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉産地」･「青海川の硬玉産地及び硬玉岩塊」が天然記念物に指定されている。一方、この構造線以東の地質は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩より成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる［鈴木 2000・小林 2000］。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして 2,000m 級の山々が連なる。その主稜は北に進むにしたがい高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」である。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域にはここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積岩が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には焼山（2,400m）が位置する。標高 400m 以下の小起伏山地域は、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには崩落･地すべりが発生する［鈴木 2000］。地滑り等防止法制定のきっかけとなった柵口（ませぐち）地滑り（1947 年発生）など、著名な地滑りが多い地域でもある。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。その中でも姫川はこの地域最長の一級河川であり、全長約 60km におよぶ。長野県青木湖北部の湿地を源流として、長野県小谷村を経て糸魚川市で日本海に注いでいる。これらの河川沿いには河岸段丘が見られるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで 6 段に細分されている［鈴木 1982］。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下るにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている［寺﨑 1988］。

これらの河川はいずれも急流で、かつ改定が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東－南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅 300m、最大高 11.5m を測る［鈴木 1982］。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く展開している。

2 歴 史 的 環 境

糸魚川市における弥生時代～中世の主な遺跡分布は、第 4 図の通りである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高 100m 以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高 50m 前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、横マクリ遺跡に関連する弥生時代～中世の遺跡について概観する。

弥 生 時 代

現在確認されている弥生時代の遺跡は、大塚遺跡（12）・原山遺跡（46）・一の宮遺跡（18）・後生山遺跡（20）・笛吹田遺跡（22）・本遺跡（29）などがあるが、数は少ない。遠賀川系土器が出土した大塚遺跡は前期末であるが、一の宮遺跡・後生山遺跡・笛吹田遺跡など後期～古墳時代前期の遺跡が多くを占める。また、すべての遺跡で玉作関連資料が確認されていることが特徴的である。沖積地を見下ろす段丘所に立地するのは後生山遺跡と大塚遺跡に限られ、多くの遺跡が沖積地に立地する。

後生山遺跡は後期を中心とする遺跡で、竪穴建物 4 棟・土坑・溝などが検出され、北方に広がる平野部との比高差は約 30m であり、いわゆる高地性集落と考えられる。ヒスイ・緑色凝灰岩の原石や筋砥石などが出土しており、集落内では玉作が行われていた［木島ほか 1986］。また、3 号住居跡から出土した土器群は北陸系土器を主体とし、後期初頭に位置づけられるもので、新潟県内における弥生時代後期の基準資料となっている［滝沢 2005 など］。笛吹田遺跡は後生山遺跡の北方に広がる平野上に立地する遺跡であり、弥生時代後期の方形周溝墓と推測される溝が検出されている。

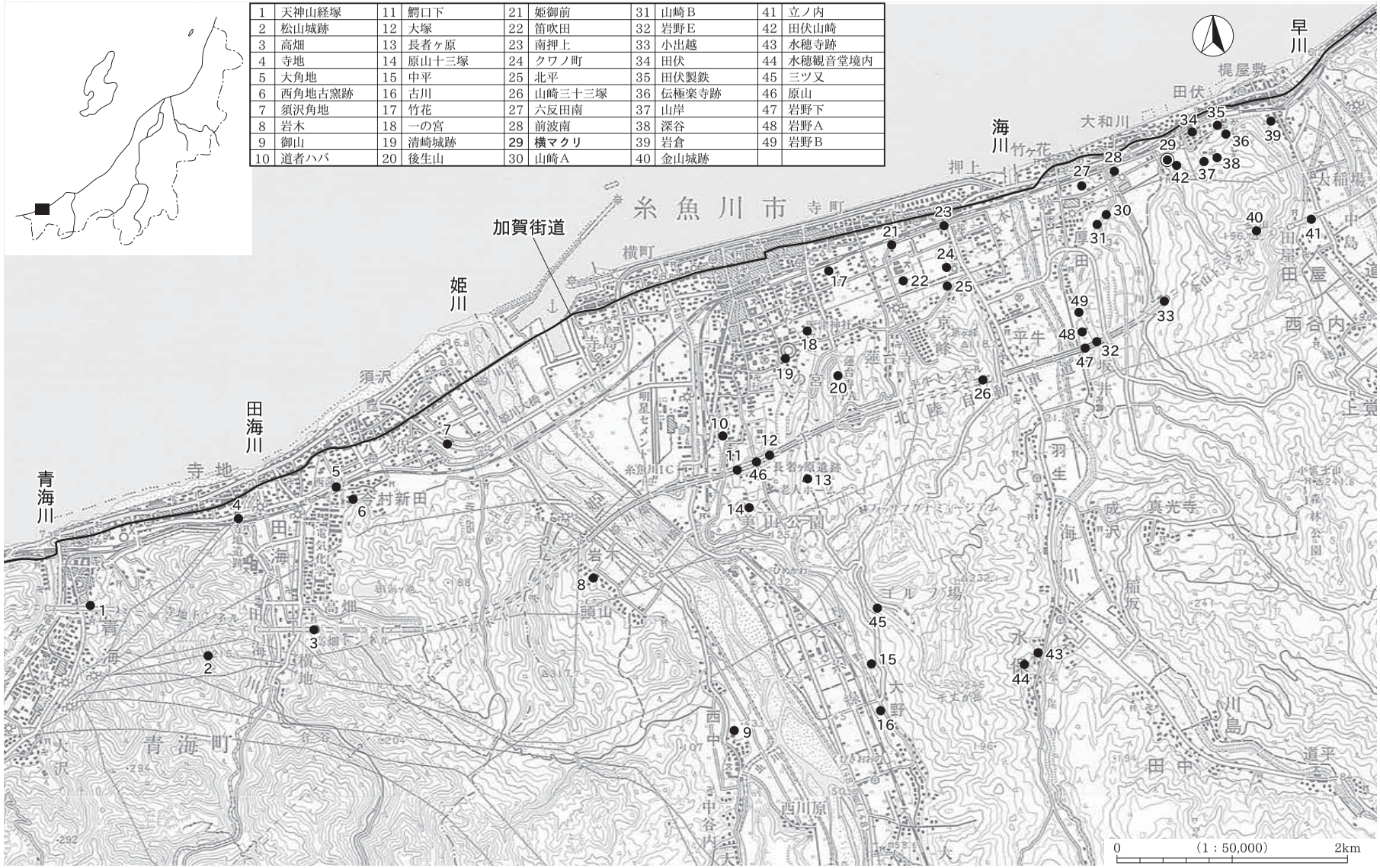
本遺跡と同時に発見され、発掘調査された田伏山崎遺跡（42）［佐藤ほか 2009］は、狭い谷の中に立地する弥生時代後期～中世におよぶ複合遺跡であるが、低地を志向した当該期の遺跡の様子をよく示しているように思われる。なお、本遺跡から出土した遺物の大半は、田伏山崎遺跡に由来するものと推測できる。

古 墳 時 代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が多いのが特徴的である。

笛吹田遺跡は弥生時代後期から続く遺跡であるが、前期から中期を中心とする玉作遺跡で、臼玉･勾玉･管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ピットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている［安藤ほか 1978］。また、近年都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴建物や木製釣瓶を伴う井戸の検出、琴柱状石製品の出土など注目されている［山岸 2005・2006］。なお、笛吹田遺跡と姫御前遺跡は、昭和 50（1975）年に別個の遺跡とされるまでは、「姫御前遺跡」という名称で同一の遺跡としてとらえられてきた経緯がある［土田 1978］。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから無関係とは考えられない。

大角地遺跡（5）は、昭和 10（1935）年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町



1	天神山経塚	11	鰐口下	21	姫御前	31	山崎Ｂ	41	立ノ内
2	松山城跡	12	大塚	22	笛吹田	32	岩野Ｅ	42	田伏山崎
3	高畑	13	長者ヶ原	23	南押上	33	小出越	43	水穂寺跡
4	寺地	14	原山十三塚	24	クワノ町	34	田伏	44	水穂観音堂境内
5	大角地	15	中平	25	北平	35	田伏製鉄	45	三ツ又
6	西角地古窯跡	16	古川	26	山崎三十三塚	36	伝極楽寺跡	46	原山
7	須沢角地	17	竹花	27	六反田南	37	山岸	47	岩野下
8	岩木	18	一の宮	28	前波南	38	深谷	48	岩野Ａ
9	御山	19	清崎城跡	29	横マクリ	39	岩倉	49	岩野Ｂ
10	道者ハバ	20	後生山	30	山崎Ａ	40	金山城跡		

第４図　横マクリ遺跡周辺の主な遺跡（加賀街道の位置は「土田 1991」による。）〔国土地理院発行「糸魚川」「小滝」 1：50,000原図　平成８年発行〕

で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」［寺村 1966］の標識資料としても知られるようになった。昭和 45・48（1970・1973）年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ピットをもつ玉作工房跡が検出され［寺村・安藤ほか 1979］、中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成 17（2005）年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・臼玉の製作関連資料が出土した［加藤ほか 2006］。

田伏遺跡（34）は、中期～後期の遺跡である。昭和 45（1970）年に行われた発掘調査では、滑石製の臼玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている［関 1972］。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている［糸魚川市史編さん委員会 1986］。

一の宮遺跡（18）は、天津神社境内に所在する。大正 8（1919）年に高橋健自氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円板・勾玉・臼玉等の祭祀遺物が多数出土した［糸魚川市史編さん委員会 1986］。椙山林継は一の宮遺跡を祭祀遺跡としており［椙山 1972］、一の宮遺跡から出土した玉類は笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性を指摘されている［関 1972］。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に記載される「奴奈川神社」に比定されると考えられており、奴奈川姫が祀られている。

さらに、北陸新幹線・糸魚川バイパス建設に伴い発掘調査された南押上遺跡（23）［小池ほか 2011］・姫御前遺跡（21）［加藤ほか 2008・2011］・竹花遺跡（17）［加藤ほか 2011］・六反田南遺跡（27）［春日ほか 2008 など］・本遺跡（29）［渡邊ほか 2008・本書］においても玉作の存在が確認されている。小規模な集落においても、数は多くないものの、未成品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作が盛んに行われていたと言える。

古　　代

古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統 6（692）年 9 月の条に、「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたとみられている。このころの越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝 2（702）年 3 月の条に、越中国の 4 郡を越後国に分割したことが記されている。この 4 郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられている。さらに和銅元（708）年に越後国に設置された出羽郡が、和銅 5（712）年に出羽国として分立され、これにより佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられる。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の最南西端に位置し、天平勝宝 4（752）年 10 月、造東大寺司牒（正倉院文書）に頸城郡の郡名が初めて見えるが、『和名抄』（東急本）には「久比支」の訓を付している。天平勝宝年間（749～756）の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久疋郡」と記されている。頸城郡の郷は 10 郷が記されており、本遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。沼川郷は、『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』（1907 年）では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼川保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海 8 疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各 5 疋、伊神 2 疋、渡戸船 2 艘、伝馬頸城・古志郡 8 疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道

越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海駅８疋」とある。他の駅が５疋に対して、越中国佐味駅と並んで８疋と多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われていたと推測される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が発見されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡（7）は、昭和 62（1987）年・平成 17（2005）年に発掘調査が実施され、7 世紀～ 10 世紀の集落跡であることが明らかにされている［土田ほか 1988・加藤ほか 2011］。また、須沢角地遺跡の西南西 1km の丘陵裾には西角地古窯跡（6）が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており［寺村・安藤ほか 1979］、8 世紀末～ 9 世紀初頭の窯跡と考えられている［春日 1998］。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）の姫川右岸に位置する道者ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器･土師器のほか、灰釉陶器･緑釉陶器が出土した。当地方の中心的役割を担った遺跡と推測されている。このほかに、8 世紀末～ 9 世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡（33）［鈴木ほか 1988］、多数の製塩土器が出土した立ノ内遺跡（41）［高橋 1988］、数百点におよぶ土師器を廃棄した土坑が注目される山崎 A・B 遺跡［木島 2007］などの調査事例がある。

中　　世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高 328m の勝山山頂に築かれている。天正年間（1573 ～ 1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている［平野・渡辺 1968］。寺地の南方、松山の尾根上に南北 500m にわたって築城された松山城跡（2）は、標高 170m の地点に本丸跡があり、空堀や帯曲輪・裾曲輪で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚(1)は、大正 8(1919)年に調査され、仁安 2(1167)年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている［金子 1975］。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）･中平遺跡（15）･古川遺跡（16）･水穂観音堂境内（44）･北平遺跡（25）･クワノ町遺跡（24）･竹花遺跡（17）･山崎 A･B 遺跡（30･31）等が知られており、観音菩薩立像（重要文化財）を安置する水穂観音堂境内からは中世陶磁器類が出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられる［山岸･田村 2004］。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）や山崎三十三塚（26）［木島 1989］が分布する。

当地域における中世の集落については、北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数存在することが明らかになってきた。特に、山岸遺跡（37）においては、鎌倉時代（13 世紀）の大型の掘立柱建物や庭園が検出され注目されている。出土した銅製品には傘紋が施してあり、鎌倉北条氏一族の名越氏を示す家紋であると推測されている。文献資料によれば、13 世紀末頃に越後国沼河郷の地頭として「備前々司殿」と記述があり、この「備前々司殿」は能登・安芸の守護などを兼任した名越宗長と推定される。これらのことから、山岸遺跡は沼河郷地頭の名越氏と深く関係のある、中心的な屋敷と考えられている［春日ほか 2012］。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドの設定

横マクリ遺跡の周辺では、4 遺跡の発掘調査が同時並行で進められた。一般国道 8 号糸魚川東バイパス事業では本遺跡と山岸遺跡・田伏山崎遺跡の 3 遺跡、北陸新幹線事業では山岸遺跡・深谷遺跡・田伏山崎遺跡の 3 遺跡である。これらの遺跡は、樹枝状に入り組む谷底と尾根上に位置し、今後この地区の試掘確認・本発掘調査が進むに従い、さらに多くの遺跡が発見されると予想されたことから、遺跡間の位置関係を正確に把握することが肝要であると判断された。そこで、田伏地区で最も早く調査を開始した山岸遺跡の基準線を活用して、本遺跡を含めた周辺の遺跡をカバーするようにグリッドを設定した。北陸新幹線のセンター杭 210K000 杭（第 5 図、X=116927.489、Y=－53071.157）と 210K140 杭（世界測地系 X=116906.032、Y=－53209.497）を結んだラインを主軸として、それに直交するように南北方向のグリッド線を設定した。主軸は真北から 7°30′西偏している。

グリッドには大小 2 種類があり、大グリッドは 10m 四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 分割したものである。大グリッドは西から 1・2・3・4、南から A・B・C・D と呼称し、両者の組み合わせにより表示した。小グリッドは 1 ～ 25 の算用数字で示し、南東隅が 1、北西隅が 25 となるよう番号を付し、「35N12」等と表した。玉類が出土した一部のグリッドについては、さらに小グリッドを 4 分割し、ア・イ・ウ・エとした。

なお、グリッドの基準点である 210K000 杭は 9D1 グリッド、210K140 杭は 23D1 グリッドとなる。横マクリ遺跡は 33 ～ 43・M ～ P グリッドの範囲に位置し、34O1 グリッドは世界測地系 X=116997.877、Y=－53335.049、38N1 グリッドは世界測地系 X=116981.863、Y=－53373.044 となる。

2　基　本　層　序

調査区内は南東から北西に向かって傾斜する微地形を示し、2007 年度調査区（以下、07 年調査区とする）内の比高差は 1.1m で、本遺跡全体（06 年調査区を含む）では 2.0m におよぶ。遺跡からは傾斜と垂直方向に小河川が並列して検出されており、土石流が流れた痕跡も認められることから、水の影響を受けやすい場所であったことがわかる。いずれの土質も砂またはシルトからなる。

基本層序はⅠ～Ⅵ層の 6 層に大別できる（第 6 図）。ただし、同一の地層でも土質に多少の差異があり、層によってはさらに 2 ～ 3 層に細別される。このうち、Ⅳ層が古代～中世の遺物包含層、Ⅴ層が古墳時代の遺物包含層および古代の遺構確認面、Ⅵ層が古墳時代の遺構確認面である。06 年調査区との対比は、本報告Ⅳ層が 06 年調査区Ⅵ層に、同じくⅤ層がⅥ層に相当する。以下に、各層の詳細を述べる。

Ⅰ　層：盛土および水田耕作土。上から順に、Ⅰａ層（盛土）、Ⅰｂ層（水田耕作土）、Ⅰb' 層（水田の床土）に細別できる。

Ⅱ　層：2.5Y6/2 灰黄色～ 10YR5/2 灰黄褐色シルト。地点によって層厚が大きく異なるが、土質はほぼ均一である。ただし上位・中位・下位で色調や混入物に若干の差があり、上から順に、

Ⅱａ層（2.5Y6/2 灰黄色シルト）、Ⅱｂ層（2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、砂が混じったり鉄分が著しく沈着したりする）、Ⅱｃ層（10YR5/2 灰黄褐色シルト）に細別できる。

細砂層：5Y6/2 灰オリーブ色細砂。Ⅱ層とⅢ層の間で局地的に介在する間層である。

Ⅲ　層：10YR5/1 褐灰色～ 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトまたはシルト。砂礫を極少量含み、わずか

第５図　グリッド設定図

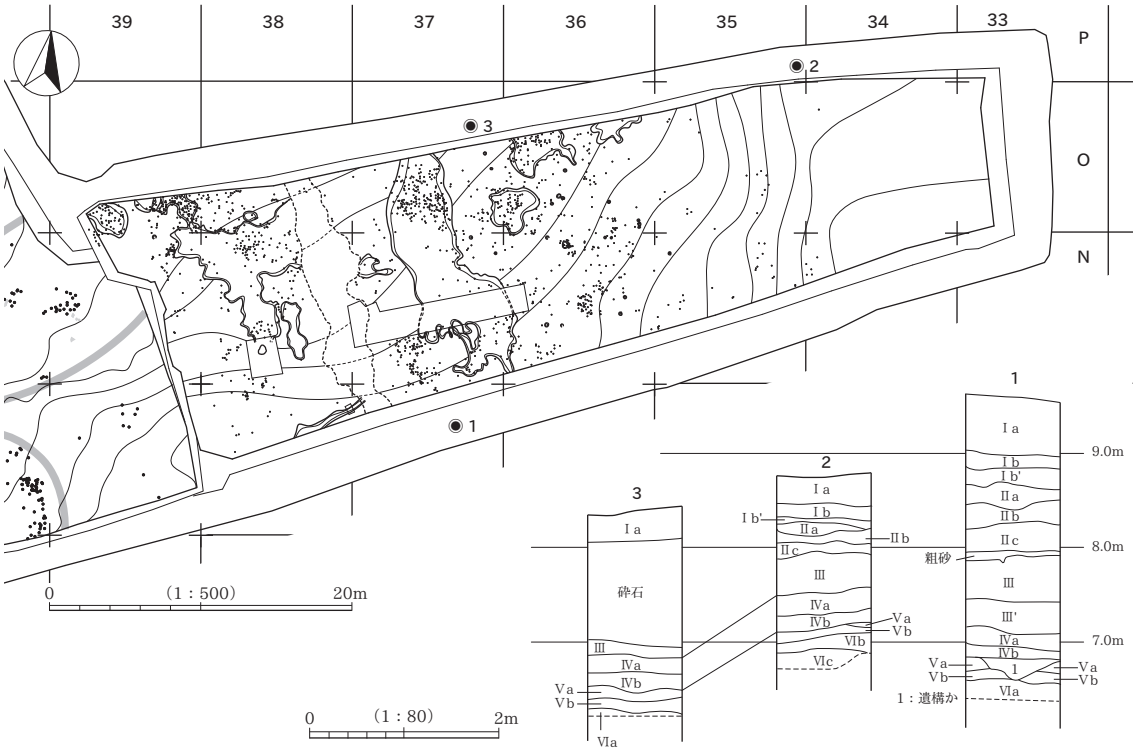
に鉄分の沈着が認められる。Ⅱ層同様、地点によって層厚が大きく異なるが、土質はほぼ均一である。

Ⅲ' 層：5Y4/1 灰色粘質シルト。Ⅲ層の堆積が厚い調査区南側に認められる。Ⅲ層とほとんど同質だが、色調が明らかに異なり区別される。

Ⅳ 層：10YR3/1 黒褐色～ 10YR4/1 褐灰色シルト。地点によって量の多寡があるが、粗砂・炭化物粒子・腐植物などが混じる。古代～中世の遺物包含層である。上位のⅣ a 層（10YR3/1 黒褐色シルト）と下位のⅣ b 層（10YR4/1 褐灰色シルト）に細別でき、前者は古代～中世の遺物を、後者は古代の遺物のみを含む。

Ⅴ 層：5Y5/1 灰色～ 5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルトまたはシルト。古墳時代の遺物包含層および古代の遺構確認面である。色調などはⅥ層に似るが、時間が経つと若干暗色気味に変化するため区別できる。また層の上下で土質に違いがあり、上位のⅤ a 層（5Y5/1 灰色～ 5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルトまたは砂混じりシルト）と下位のⅤ b 層（5GY6/1 オリーブ灰色～ 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルトまたはシルト）に細別できる。

Ⅵ 層：5GY5/1 オリーブ灰色～ 5G5/1 緑灰色シルトまたは砂礫層。古墳時代の遺構確認面であるが、地点によって土質の違いが大きい。全体として下位に向かうにつれ砂質が強くなり、Ⅵ a 層（5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルト）、Ⅵ b 層（5G5/1 緑灰色シルト～細砂）、Ⅵ c 層（5Y5/1 灰色～ 5G5/1 緑灰色砂礫）に細別できる。なお、場所によってはⅥ b 層より下位でも粘質シルト等が認められ、それらはⅥ b' 層（5GY5/1 オリーブ灰色～ 5G5/1 緑灰色粘質シルト）、Ⅵ c' 層（5G6/1 緑灰色砂質シルト）として区別した。



第６図　土層柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

本報告で扱う調査区（07 年調査区）では遺構確認面が 2 面あり、上層からは古代～中世の遺構が、下層からは古墳時代の遺構が検出された。上層の遺構は古墳時代の遺物包含層であるⅤ層を確認面とし、下層の遺構はⅥ層を確認面とする。Ⅴ層では自然流路 6 条、溝 1 条、ピット 1 基、杭 41 か所、性格不明遺構 3 基が検出され、Ⅵ層においては自然流路 1 条、溝 1 条、ピット 21 基、土坑 1 基、性格不明遺構 9 基が検出された。いずれも建物や井戸といった遺構はなく、生活の痕跡は乏しい。

遺構種別の略号は、土坑＝ SK、溝＝ SD、ピット＝ P、性格不明遺構＝ SX とした。本文・観察表における平面形・断面形の分類は［加藤 1999］を、覆土堆積状況の分類は［荒川 2004］に準拠する。遺構の切り合い関係は、「新 > 旧」のように示した。

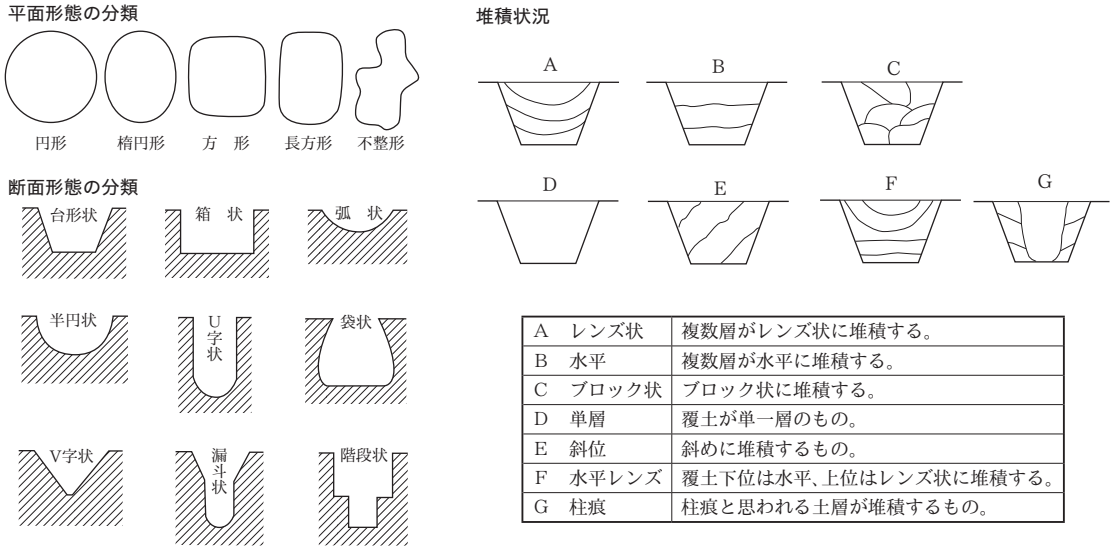
2　古 代 ～ 中 世（上層）

ピ　ッ　ト（図版 6・7・29）

1 基のみである。P9 は調査区の端で検出された。埋土中からは古墳時代の土器片が 1 点出土しているが混入の可能性が高く、覆土の特徴や検出状況から判断して、古代に属するものと考えたい。なお、P9 周辺にはピットが一切認められず、掘立柱建物や柵列のような組み合わせを復元することはできなかった。

性格不明遺構（図版 4 ～ 7・29・32）

3 基検出された（SX2・3・4）。3 基とも近接する河川 6 に連なる遺構である可能性も考えられる。いずれの遺構も良好な遺物は出土しておらず、不整形で掘り込みもごく浅い。それらを考え合わせると人為的



A　レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B　水平	複数層が水平に堆積する。
C　ブロック状	ブロック状に堆積する。
D　単層	覆土が単一層のもの。
E　斜位	斜めに堆積するもの。
F　水平レンズ	覆土下位は水平、上位はレンズ状に堆積する。
G　柱痕	柱痕と思われる土層が堆積するもの。

第 7 図　遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類（加藤 1999・荒川 2004 を改変）

な遺構ではなく、自然地形上の落ち込みであった可能性も否定できない。

河 川 跡 ・ 溝（図版２～７・26・29～32）

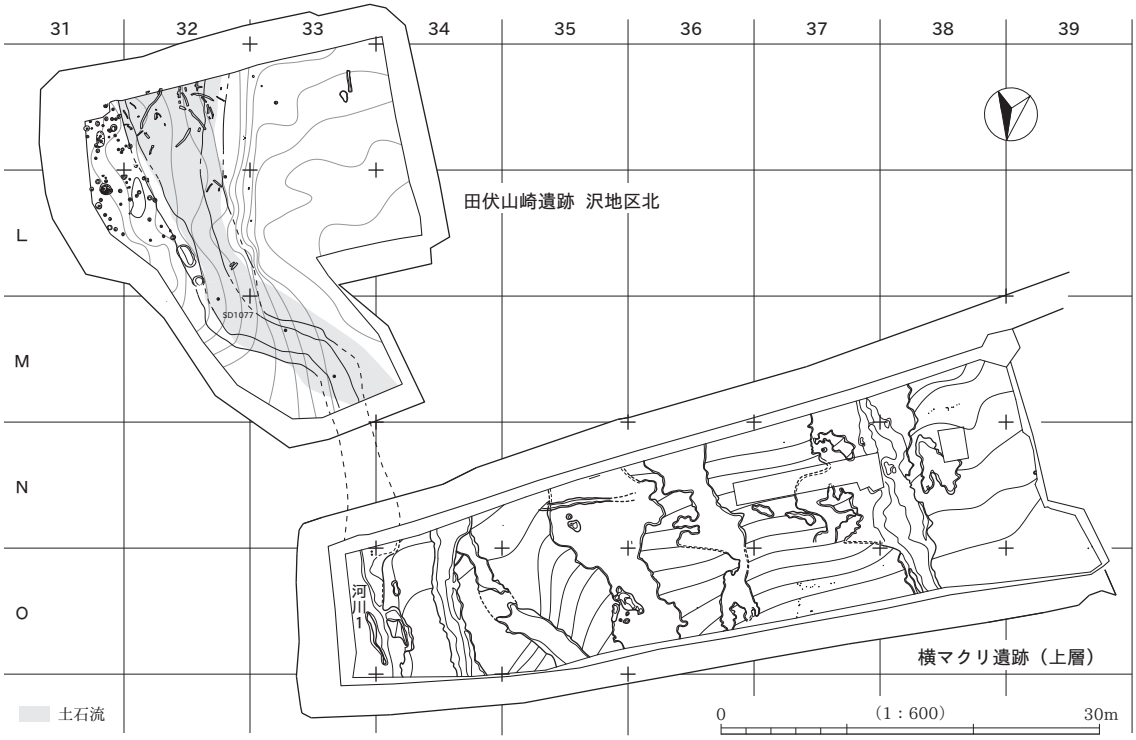
古代に属すると考えられる自然流路が６条検出された（河川１～６）。幅や深さには差があるが、いずれも方向は近似しており、自然地形の傾斜によって流れが定まったものと推測できる。

河川１は33・34ラインに位置し、調査区外へのびている。下層には拳大ほどの礫を含む砂礫層が認められ、ある程度の流れがあったと推測される。遺物は、土師器無台椀・製塩土器が多く出土した。特に製塩土器は下流側（北側）に多く分布している。

また、河川１と２を覆う礫層には人頭大ほどの大きな礫が多数認められることから、河川１・２が埋没した後に土石流が流れたことがわかる。この土石流は田伏山崎遺跡沢地区北で検出された土石流と同一であろう。さらに、同遺跡SD1077と河川１は同一の河川跡である可能性が高い（第８図）。SD1077の最深部は砂礫層であり、出土遺物の主体は製塩土器であることも、このことを裏付ける。

河川２は河川１と約3m間隔でほぼ同一方向に流れる川で、ほかの河川と異なり幅がほぼ一定である。河川２は河川３を切っており、河川２のほうが新しい。34Oグリッドでは河川の流れと直交して板杭が３点、川底から10cmあるいは40cm程度打ち込まれていた。遺物は少なく、土師器無台椀と古墳時代の甕が少量、製塩土器の破片がわずかに出土したのみである。**河川３**は上流部で河川２に切られ、河川１・２とはやや方向を変え北西に向かって流れる。中央付近から北側にかけては非常に浅く、確認面では途切れて検出された。遺物は古墳時代の壺・甕、製塩土器の破片がわずかに出土したのみである。

河川４はさらに浅く、一見不整形の落ち込みとも言えるような形状であるが、主軸や幅の共通性から河川４として調査を行った。右岸北側には深さ70cmほどの土坑状の落ち込みが認められ、覆土は単層



第８図　田伏山崎遺跡との位置関係

であることから人工的に埋められた可能性がある。埋土上部からは自然木が絡まった状態で出土した。なお、覆土はSD10を挟んで上下に二分できるが、（図版5-11　上層：砂礫層および1層、下層：2～5層）、SD10河川4の埋没過程で機能していたものか、あるいは河川4よりも古い別の遺構である可能性がある。なお、北側では局所的に深い落ち込みが検出されたが、中には倒木と考えられる自然木が残っており、年代測定したところ8世紀後半～9世紀後半頃という結果となった。よってこの倒木よりも上にある砂礫層および1層は、古代以降に堆積したものであると言える。

河川5も河川4同様、不整形の浅い落ち込みに見えるような形状である。古墳時代の蛇紋岩製棗玉、滑石製臼玉の未成品などが出土しているが、図版31に見える古墳時代の土器は、河川5ではなくⅤ層から出土したものである。覆土が非常に浅いことから、これらの玉類はⅤ層から出土したものを誤認したか、混入したものと考えられる。

河川6の底部では拳大～人頭大の礫が認められ、ある程度の流れがあったことがうかがえるが、上層は砂とシルトの互層が主体で、流れが緩やかになったことを示している。38Nグリッドでは、墨書土器が2点、完形に近い状態で出土した（図版31、13-29・30）。いずれも2層からの出土である。この2個体の帰属時期は、29が8世紀末、30は9世紀前半と判断される。遺物はほかに、古墳時代の甕・高杯・小壺が少量出土している。東側は浅い落ち込み状となり、単層で底面に凹凸が認められる。

杭（図版2～7・27・32・33）

杭11～杭51は、杭状または棒状の木が地面に突き刺されたものである。37Oグリッドで21点・38Mグリッドで11点集中しているが、それ以外の地点でも疎らながら8か所で確認された。その多くが古墳時代の遺物包含層であるⅤ層の直上～上位で検出されたが、上部を大きく欠損しⅤ層に短く刺さったものが多く、本来はより長い杭・棒が突き刺されていたものと推測される。さらに古代の遺物包含層であるⅣ層の発掘調査時からすでに検出していたものもあることから、古代よりも新しい時代に属するものと判断した。特に杭50・51は、河川1が土石流で埋没した後に打ち込まれており、後出のものであることは明らかである。これら41本の杭のうち、比較的遺存状態が良くⅤ層に深く刺さった杭39に対して炭素14年代測定を実施したところ、13世紀末～14世紀末という数値が示された（第Ⅵ章2参照）。残りの40本も形態や素材に共通点が多いことから、同時期のものである可能性がある。なお、中世にこれらの杭が構築された理由については、明確な手掛かりがなく不明である。

3　古　墳　時　代（下層）

遺構は調査区西側（36ライン以西）に偏って分布している。上層で検出された河川1～3・6はⅤ層を掘りこんでおり、下層においてもその痕跡をとどめる。

土　　坑（図版8・9・33）

平面形が円形で直径40cm以上のものを土坑とし、1基を確認した。SK130の底面からの立ち上がりはほぼ直角であるが、掘り込みは比較的浅い。土坑の周囲からは古墳時代の土器が出土しているが、覆土中から遺物は一切出土しなかった。

溝（図版 10・11・33）

1 条のみ検出された。SD151 は調査区南西隅を北東方向に走るもので、規模は小さい。遺物は出土していないが、東端が古代の自然流路（河川 6）によって切られていることや覆土の特徴から判断して、古墳時代に位置づけられる。

ピ　ッ　ト（図版 8 ～ 11・33・34）

21 基検出された（遺構番号は図版・観察表参照）。直径はほとんどが 20cm 前後で斉一的であるが、深さは 11 ～ 45cm とばらつきがある。断面はＵ字状、覆土は単層のものが最も多く、地山土に炭化物がわずかに入るような土質で判別が難しい。遺物は、P110・115 から土師器の甕の破片がそれぞれ 1 点出土したのみで、柱痕なども検出されなかった。なお、これらのピットの多くは調査区中央に分布するが、平面配置が不規則で掘立柱建物などは確認できなかった。

性格不明遺構（図版 8 ～ 11・34・35）

9 基検出された。いずれも平面形が不整形で掘り込みが浅く、底面には凹凸が認められる。さらに調査区北西側の標高が低いところに位置することから、自然地形上の落ち込みであった可能性がある。SX102 の北側はごく浅く、深さ 15cm 程度であるが、38N13･14 グリッドで徐々に深くなる（SX102b）。その南側は試掘トレンチのため堆積は不明である。試掘確認調査の際、トレンチの底面からピットらしき遺構が検出され、本調査で SX102c としたが、自然木であった。年代測定を行ったところ、1 世紀前半という結果が出ている。近辺にも腐植物や炭化物を多く含んだ土層が認められる。また、断面図をみると SX102b の下はⅥa・Ⅵb 層が堆積しているが、SX102b 覆土同様に落ち込んでいることからも、古墳時代以前の撹乱である可能性が高い。SX106 は調査区西隅で検出され、調査区境界付近で土器片が多く出土した。（図版 35）。深さは最大 19cm と浅い。底面付近から出土しているものは一部で、多くは層の上部から出土している。

河　川　跡（図版 10・11・35・36）

1 条検出された。**河川 7** は、上層で検出された河川 4・5 などと同様に不整形の浅い落ち込み状を呈するもので、方向も上層同様に北西方向である。遺物は北側を中心に古墳時代前期～中期の土器が多く出土しており、該期に位置づけられる。

第Ⅴ章　遺　　物

07 年調査区から出土した遺物はテンバコ（内法 54 × 34 × 10cm）57 箱で、内訳は弥生時代～中世の土器・陶磁器 29 箱、石器・石製品 11 箱、木製品 17 箱である。上層の遺構・Ⅳ層からは主に古代～中世の遺物が、下層の遺構・Ⅴ層からは弥生時代後期～古墳時代中期の遺物が出土した。しかし間層が存在しないことから、上層の川跡やⅣ層からも弥生時代～古墳時代の遺物が定量出土している。

1　土器・土製品

弥生時代～古墳時代、古代～中世のものが出土しているが、主体時期が明確に区別できることから、時代ごとに述べる。その中で遺構出土、包含層出土の順に述べることとする。土製品については、土錘のみの出土であることから、本項で一括する。

A　古　　代（図版 13・14・38・39）

1）概　　要

古代の土器には土師器・須恵器・灰釉陶器・製塩土器がある。帰属時期は幅広く 8 世紀末～ 11 世紀前半で、主体は 10 世紀前葉～ 11 世紀前半、春日編年Ⅶ・Ⅷ期［春日 1999］である。河川 1 から出土した土師器無台椀のほとんどがこの時期に属する。記載にあたっては［春日 1999］の分類・年代観に従った。

2）分　　類

食 膳 具　土師器無台椀で口径 12 ～ 14cm のものが大多数を占め、口径 16cm 程度のものが少量見られる。その他、土師器有台椀・柱状高台皿・皿、黒色土器有台椀、須恵器無台杯・有台杯、灰釉陶器椀がわずかに認められる。

煮 炊 具　土師器小甕の底部 2 点を確認できたのみである。

貯 蔵 具　須恵器甕・長頸瓶と壺または瓶が数点出土している。

製塩土器　定量出土しているが、すべて小破片で接合せず法量は不明である。口縁部は様々な形態が認められるが、分類できるほどまとまらないことから、細分は行わない。底面にハケ調整が施されるものがある。

3）各　　説

河川 1（1 ～ 28）　1 ～ 10 は中層あるいは中～下層出土、11 ～ 28 は下層から出土したものである。1 ～ 6 の土師器無台椀は口径 11.1 ～ 12.9cm で、比較的小ぶりなものが多い。深身のものとやや浅身のものがある。3 は歪みが著しく、器高の差は 1.2cm にもおよぶ。内外面にススやタールらしき付着物が確認できる。付着物は器高が低いほうに偏っており、灯明皿として使用したものと推測される。7 は黒色土器有台椀で、台の部分が欠損している。8 ～ 10 は製塩土器である。8 の口縁端部は指でつまみ薄く作出するが、9 の端部は面を作り出す。10 はハケ状工具の調整痕がわずかに認められる。

時期は概ねⅦ 1 ～ 2 期で、一部Ⅷ期に下るものが存在する。

11 ～ 22 は土師器無台椀で、口径が大きく浅身の 11･12 はⅤ期、その他はⅦ期に帰属すると考えられる。14 は横位で出土した（図版 29）。外面 3 分の 1 ほどススが付着しており、器面は荒れている。20 は逆位で出土した（図版 30）。全体的に厚手で、口縁端部もぽってりした印象である。見込みには黒色付着物が認められる。何らかの液体状のものを入れていた可能性がある。22 は口縁部内面の一部にススが付着している。

23 ～ 27 は須恵器である。23 の甕は口縁部のみで、逆位で出土した（図版 27）。写真に写っている以外の破片は接合せず、また同一個体と思われる体部破片は出土していない。23・24 はⅤ期と考えられる。26 はいわゆる「壺 G」と言われているものである。胎土により搬入品と判断できる。底部内面には出ベソ状に粘土塊が残る。底部は回転糸切りによって切り離すが、その後周縁を打ち欠いており、調整は粗雑な印象である。外面の大半は降灰が認められる。Ⅳ 3 期の所産と考える。27 は壺または瓶の底部で、高台は外端接地である。Ⅵ～Ⅶ期に位置付けられよう。

28 は製塩土器の底部片である。底部は垂直に立ち上がるが、体部は開く器形となる。

河川 6（29・30）　29 は河川 6 の中央付近から逆位で、30 は左岸側から正位で出土している。いずれも 2 層からの出土で、底面に墨書が認められる。29 は精良な胎土で白色を呈する。Ⅳ 3 期に属するものと考える。墨書は「○」に「十」が接しているように見えるが、一文字の可能性もある。30 は口径 10.8cm と小ぶりな有台杯で、高台は内端接地である。高台内側に墨書が見えるが、褐色の付着物が除去できないことから全容は不明である。右側に「十」、左側に「□久太」の四文字が書かれている。Ⅴ期の所産である。23・29・30 は胎土の特徴から高田平野の西側に点在する窯で焼かれたものと推測できる。

河川 1 の上　土石流（31 ～ 36）　31 は須恵器の壺または瓶である。この層からは須恵器の出土は 1 点のみである。32 は土師器で柱状高台を持つ皿で、出土はごくわずかである。33 は灰釉陶器の椀である。破片資料のため断定はできないが、高台の周縁を打ち欠きしている可能性がある。Ⅶ 1 ～ 2 期に帰属すると考える。34 ～ 36 は製塩土器である。34 の口縁端部は面取りされる。35 の底部は垂直に立ち上がる。外面にはハケ目が見られる。

Ⅳb・Ⅳa・Ⅳ層（37 ～ 54）　37 ～ 45 はⅣ b 層出土である。37 は口径 16.3cm、底径 7.4cm と大きく、Ⅴ期に帰属するものと考えられる。38 は有台椀で高台の高さは 1cm、体部は比較的急角度で立ち上がる。39 ～ 45 は製塩土器である。口縁端部の形態はそれぞれ異なり、41 は端部をわずかにつまみ出したもので、このような形態は 1 点のみである。43 の底部は薄い粘土盤を重ねて成形したことがうかがえる。45 は底部と体部の境が比較的明瞭で、粘土紐巻き上げ痕が観察できる。46 ～ 52 はⅣ層から出土したものである。46 は小甕であるが、小甕自体、本遺跡では底部が 2 個体出土したのみである。47 は黒色土器、48 は土師器の有台椀である。48 は見込み中心部が出ベソ状に盛り上がっている。49 ～ 51 は小皿で、49・50 はやや小さく厚手、51 はやや薄手で口縁部が開く器形であるが、時期はいずれもⅧ期と推測できる。52 は器壁が薄く、胎土の特徴から小泊産と考える。

53・54 はⅣ a 層から出土した。53 は内面黒色土器であるが、口縁部外面も黒化している。口縁部と底部は接合しないが図上復元した。Ⅴ期に属すると考えられる。

B　中　　世（図版 14・39）

数は少ないが、遺物の年代は 12 世紀～ 16 世紀と幅があり、遺跡は断続的に続いていたことがわかる。掲載個体数も少ないことから、種類ごとに述べる。白磁については山本［2000］・森田［1982］、青磁は

山本［2000］・上田［1982］、珠洲焼は吉岡［1994］、土師質土器は水澤［2005］の分類・年代観を参考にした。

55 は四耳壺である。口縁部が内傾する器形で、頸部には細い突帯がめぐり、耳の下には横沈線が入る。沈線は直線ではなく、わずかに弧状を描く。器壁は薄く、調整が粗雑でないことから、中国製の褐釉四耳壺の可能性がある。外面は二次焼成を受けている可能性がある。56 は瀬戸・美濃焼の天目椀である。高台と体部の境は稜が鋭い。15 世紀後半頃と考えられる。58 ～ 60 は青磁である。58 は龍泉窯系の盤または杯と考えられ、13 世紀中頃～ 14 世紀初頭の所産である。59 は稜花皿で口縁内面に片切彫りの文様が描かれる。60 は端反りの椀で文様は認められない。14 世紀末～ 15 世紀前半と推測される。57・61 ～ 64 は白磁である。57 は椀であるが小片のため分類等は不明である。61 はやや肉厚な玉縁状口縁を有する椀Ⅳ類である。57・61 は 11 世紀後半～ 12 世紀前半の所産であろう。62 は椀で、体部下半に縦方向のケズリを施す。外面下部のわずかな部分は無釉であることから、高台も無釉であると推測できる。14 世紀後半頃と考えられる。63 は椀の高台周縁を打ち欠き、平面形を略円形に仕上げる、いわゆる「加工円盤」であるが、高台も一部欠損している。高台部分は無釉である。64 は全面施釉するもので、底部外面にも釉が厚く残る。63 同様、底面周縁を打ち欠いている。帰属時期は 13 世紀後半～ 14 世紀初頭と判断できる。

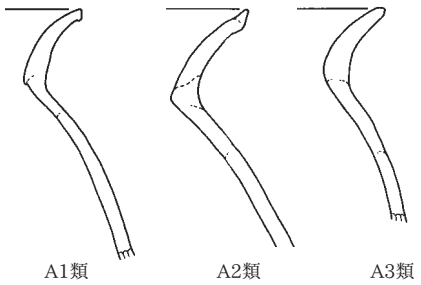
65 ～ 70 は珠洲焼である。65 は壺 R 種で、広口の口縁がつくと推測される。66 は甕である。外面は平行タタキ、内面は頸部のみハケ目のような調整痕が認められる。13 世紀後半～ 14 世紀前半頃と考える。67 ～ 70 は片口鉢である。67 ～ 69 は口縁端部が内傾しており、67・69 は波状文が施される。14 世紀前半～中頃と推測される。70 は他と若干器形が異なり、口縁端面は水平でロクロナデの凸凹が目立つ。12 世紀後半～ 13 世紀頃と考える。71・72 は土師質土器の皿で、手づくね成形である。口縁部下に段を持つ形態で、16 世紀に位置付けられる。いずれも口縁外面～内面にかけてススやタールと思われる黒色付着物が認められ、灯明皿として使用したものと推測できる。73 は瓷器系陶器の甕で体部下半と考えられ、押印が施されている。

C　弥生時代～古墳時代（図版 15 ～ 18・39 ～ 43）

1）分　　類

器種ごとの概要を述べる。甕以外はまとまった量ではないことから、甕以外は細分類を行わない。

甕　　06 年調査区の分類に従った。A1 類：口縁端部が面取りされるもの。A2 類：口縁内外面を強くナデ調整した結果、つまみ上げられたような端部を持つもので、端部内面は緩い凹線状を呈する。A3 類：端部が丸いもの、面取りが顕著でないもの。B 類は有段口縁を持つものである。口縁外面が無文のものと擬凹線を有するものがあるが、いずれも弥生時代後期に帰属するものと考える。このほかに頸部の屈曲が弱い小型品が 1 点出土している。



第 9 図　甕の口縁部形態（［渡邊ほか 2008］を転載）

壺　　大型品は明瞭な稜を有する二重口縁壺のみである。中型品では二重口縁でも口縁が内湾するもの、広口壺、内湾口縁でなで肩気味の球胴を呈するものなどがある。小型品では、短頸で口縁部があまり開かない丸底のものが目立つ（126 など）。この形態は法量が 2 種類認められる（124・126 など）。その他、

口縁部が開き球胴のもの（96）や、細頸の装飾壺（128 など）がわずかに認められる。

鉢　　4 点出土したがすべて異なる器形であり、さらに 06 年調査区と同じ器形は認められない。

高　　杯　全形が明らかなものは 1 点のみであり、口縁部または脚部のみの例が多い。脚部はこの時期に特徴的な、いわゆる「畿内系屈折脚」を有するものがほとんどである。杯部については、口縁部の外傾度が比較的弱く身の深いもの（80）、口縁部の外傾度が強く身の浅いもの（98・110）とそれらの中間程度のもの（109）が認められる。

器　　台　受部が内湾して立ち上がるもの（06 年調査区の A2 類）のみである。

甑　　1 点のみの出土である（146）。口縁部はほとんど開かず、なだらかにすぼまる器形で、把手の位置は体部下半である。

3）各　　説

SX102・105・106・120（79 ～ 88）　調査区北側に点在する SX から出土した遺物は甕が主体で、少量の壺・高杯が認められる。接合しない小片が多い。甕は 79・81・87・88 が A2 類である。遺跡全体では A3 類が多数を占めるのに対し、SX では A2 類の比率が高い（A2 類 55%、A3 類 40%）。80 は全形のわかる高杯である。口縁部の外傾度は弱く、比較的身が深い。屈折脚を有するが、脚部が膨らまない形態である。83 甕の口縁部外面には、鋭い線状痕が斜方向に平行する。ハケ目を意識したものであろうか。86 は頸部の屈曲が弱く、なだらかに体部へ至る器形である。摩耗が著しくハケ目は不明瞭である。

河川 7（89 ～ 98）　89 が A2 類、90・92 が A3 類である。90 は肩部が張らず、体部最大径が中位となる長胴形を呈する。器壁は厚く、底部内面の調整は粗雑で凹凸が著しい。内面調整は図化できなかったが、体部下位に斜方向のハケ目が認められる。91 は口径 13cm を測る小型の甕で、頸部のくびれがほとんど認められず、体部も張らない器形である。口縁外面のみヨコナデが施される。92 は口縁部から体部の部分と、体部のみの破片を復元実測している。体部上位の横方向ハケ目が目立つが、体部すべて縦方向ハケ目の部分が多く、横方向ハケ目は一部に施されたものと判断できる。93 は歪みがあり左右対称にならないが、部分的に底部境が明瞭である。95・96 はいずれも小型で丸底を呈する壺であるが、形態は異なる。95 は口縁部の開きが弱く、肩部は張らないが、96 は頸部がややすぼまり、肩部の張る形態である。97 はしっかりした底部を持ち、ハの字形に開く鉢である。器壁は比較的薄い。体部外面はミガキが施されるが、口縁部に明瞭なハケ目が残る。そのハケ目を施した後、口縁部に沈線を描いている。98 は高杯の杯部である。口縁部は大きく開き身は浅い。

河川 2 ～ 6・SX4（99 ～ 112）　上層の遺構を一括した。99 ～ 101 は甕 A3 類である。厚手で口縁は「く」字状となる。102 は口縁が内湾し球胴を呈する壺である。肩部の把手は剥落している。土器本体と把手が強く接合するように、接合部分に凹凸を作出していることがうかがえる。103･104 は高杯の裾部で、おそらく屈折脚であると推測されるが不明である。105・108 は口縁部があまり開かない小型の丸底壺である。105 体部は斜方向のハケ目が認められるが、体部最大径付近でハケ目の方向を変えており、綾杉状を呈する。106 は平底であるが、薄手で外面全面にススが付着していることから甕の可能性が高い。

109・110 は高杯の杯部で、109 はやや身が深いタイプ、110 は口縁部が大きく開き、身が浅いタイプである。いずれも稜を有するが、109 は鋭い。111・112 高杯の脚部は膨らみをもつ屈折脚である。形態が非常に近似している。いずれも内面には接合痕が明瞭に残る。111 は杯部との接合面で欠損している。112 は脚部と杯部を接合する粘土塊が単独で出土し、整理作業段階で接合した。

Ⅴ層（113 ～ 146）　113 ～ 119 は甕である。113 は A1 類で、07 年調査区では少ない形態である。

115a・b は接合しないが、出土位置が同じであることと胎土の特徴から同一個体と判断した。全体的に器壁が薄く、口縁端部も厚 2.5mm と非常に薄い。117 は B 類で口縁無文である。弥生時代後期の所産であろう。118 は丸底で、底部は 2cm 近くの厚みを持つ。球胴を呈し、最大径はほぼ体部中位となる。120 は平底であるが底面の厚さが 3mm しかなく、非常に薄い。

121 ～ 133 は壺である。121・122 は二重口縁壺で、外面、内面ともに稜を有する。いずれも口径 29cm の大型品で、07 年調査区ではこの 2 点のみの出土である。123 は二重口縁壺であるが内面に稜を持たず内湾する形態である。体部外面のハケ目は条痕のような粗いものを使用しており、部分的にミガキが認められる。124 ～ 126 は小型で丸底を呈するものである。126 は口縁下部から体部上半にかけて流れるようなハケ目が明瞭である。その後口縁上部はヨコナデされハケ目を消す。127･130 は広口壺である。130 外面はミガキが施される。体部中位から底部にかけてススが付着している。128・129 は細頸の壺で、台が付くものも多い形態である。体部は扁平な楕円形あるいは菱形を呈し、頸部と体部中位に突帯を有する。突帯には擬凹線が施され、129 は棒状浮文も認められる。128 は赤彩される。131 底面には圧痕ではなく粗いハケ目が施されている。

134 ～ 136 は鉢である。134 は透かしのある脚を持ち、ミガキが施される精製品である。135 は丸底に近い底部を有する。調整は粗雑である。136 口縁部は内湾する器形で、比較的丁寧に調整される。137 ～ 141 は高杯である。高杯は脚部の出土例が多い。139 は脚部中位の膨らみが顕著である。142 ～ 145 は器台である。すべて受口状を呈するが、142 は受部径が大きいなど若干の形態差が認められる。146 は甑で、本遺跡で唯一の出土である。現状は破片の状態であり、口縁部と把手付近の部分を図上復元した。

Ⅳb・Ⅳ層（147 ～ 150）　147 は甕 B 類で口縁部には擬凹線が施される。148 の高杯は杯部と脚部を接合した際の出ベソ状粘土塊が認められるが、杯部内面にも粘土塊の接合痕が残る。149 は口縁部がやや長く、球胴を呈する壺と推測される。150 は短頸の小型壺で、体部最大径が下半にくる下膨れの形態である。

試掘確認調査（151・152）　06 年調査区の試掘確認調査で出土した土器である。報告書（188 集）に掲載されなかったことから、今回掲載する。なお、07 年調査区の試掘確認調査では良好な資料は出土しなかった。151 は小型の壺である。口縁部の形態から畿内系小型坩の可能性もある。152 は有段口縁を持つ甕で、弥生後期に属するものである。器壁は薄く、底部はドーナツ状を呈する。調整は不明瞭で、胎土中の混入物が目立つほど器面は摩耗している。

D　土　　錘（図版 14・39）

7 点出土し、うち 4 点が完形品である。やや胴が張り短いもの（74・75）と、胴が張らずやや細身のもの（76）、胴張りで直径 3cm 程度の小型品（77・78）の 3 種類が認められる。小型でも孔径はそれほど変わらず 1.3 ～ 1.6cm を測る。指頭痕が残るものと、磨耗が進み調整が不明瞭なものがある。

2　石器・石製品（図版 19 ～ 21・43・44）

出土位置・層位は様々であるが、概ね下層から出土した古墳時代の土器に伴うものと推測できることから、出土層位などは一括し器種ごとに述べる。

横刃形石器（153 ～ 157）　片面に円礫面を有する剥片を素材とする石器である。「貝殻状剥片」「内磨砥石」などとも呼ばれるものであるが、姫御前遺跡［加藤ほか 2011］では「横刃形石器」の名称を採用しており、本書もそれに倣い「横刃形石器」と呼称する。なお、06 年調査区の報告書では、「内磨砥石」としている。153･154 については内磨砥石に相当すると思われるが、中には、磨痕が中央付近にあるもの、あるいは磨痕の認められないものがあり、それらについては勾玉の「内磨」が行われていないことは明らかであることからも、総称として「横刃形石器」が相応しいと考える。

	砂岩	硬砂岩	凝灰岩	安山岩	ヒン岩	石英斑岩	流紋岩	蛇紋岩	曹長岩	不明	計
横刃形石器	6	6				1	1				14
石核		2									2
打製石斧							1				1
石錘	3			2							5
磨石類	3	2		3	2		2				12
砥石	4	1	1								6
台石		1									1
原石など				1				1	6		8
剥片	1						1	1	2	1	6
不明		1									1
計	17	13	1	6	2	1	5	2	8	1	56

第 1 表　石器・石製品の石材別集計
（玉類除く）

前述した通り、153・154 は刃部を持ち、幅 3 ～ 4mm ほどの面を有する。刃部のみならず、正面の一定の範囲でも磨痕が確認できる。155 ～ 157 は刃部を持たず、周縁に細かい二次加工が施される。155・157 の背面に磨痕が認められるが、この部分が最も厚みを有し凸状になっていることから、全面を研磨した結果、盛り上がった部分のみ磨面が形成されたと推測できる。

石　核（158）　横刃形石器を 1 点採取した石核である。158 から得られた横刃形石器は長さ 112.5mm、幅 139.0mm である。厚さは 15mm 程と推測される。石材は硬砂岩である。

石　錘（159 ～ 161）　159・160 は縄文時代以来の形態で、左右を打ち欠くものである。161 は中央付近に抉りをめぐらせ、上部には表裏左右から垂直方向の溝を入れる。この 4 つの溝は頂部には到達せず､それぞれが独立している。このように四方からの溝を入れる例は､「有頭石錘」あるいは「中部型石錘」などと呼ばれ、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて盛行する［和田 1985］とのことで、本遺跡の時期と一致する。しかし 161 のようにずんぐりした形態ではなく、幅に対して長さの比が大きい。石材は安山岩で、触れるだけで崩れてくるほど脆い。

磨石類（162 ～ 164）　磨面のみで構成されるものは認められず、敲痕のみ観察されるものが 5 点、敲痕 + 磨痕のものが 7 点ある。このうち、磨面のある表裏面に敲痕が見られるものが 2 点（163）、そのほかは上下または側面への敲打である。磨り潰し痕は認められなかった。163 は下半が欠損しているが、一部剥離よりも新しい磨痕が認められ、欠損した後も使用したことが推測される。164 は下端にわずかながら敲痕が認められ、表裏の剥離は敲打によるものと判断できる。石材は、敲痕のみのものが硬砂岩 3 点・砂岩 2 点、敲痕 + 磨痕のものは流紋岩 2 点・安山岩 3 点・ヒン岩 2 点と明確に区別される。

砥石・台石（165 ～ 167）　165・167 は砥石である。165 の砥面は縁部分まで一様に滑らかである。河川 3 底面から出土した（図版 29）。167 は表裏面と右側面に砥面を持ち、表面には線状痕が見られる。166 は台石である。表面中央に磨痕と敲打痕が認められる。

玉類の各説の前に、玉類に使用された石材のうちヒスイ以外の石材について説明する。分類にあたっては南押上遺跡［水落 2011］に準じた。南押上遺跡では A・B・C と多いものでは 3 種に分けられるが、本遺跡では基本的にそのうちの 1 種類しか認められない。蛇紋岩は、南押上遺跡の「蛇紋岩 A」（やや軟質で透緑閃石を含むもの）のみで、最も多く出土している。滑石は南押上遺跡の「滑石 B」（黒褐色でやや硬質なもの）のみである。緑色凝灰岩は出土しなかったが、06 年調査区で緑色凝灰岩 A･B が出土しており、A は石核・剥片に、B は管玉に使用されている。

ここで、06 年調査区の管玉未成品について訂正しておきたい。報告書刊行後、近接する南押上遺跡の

調査により、この形態のものが棗玉未成品であることが判明した。実見したところ石材も全く同じであることから、06年調査区で滑石製管玉未成品とされているものは、報告番号261以外、「蛇紋岩製棗玉未成品」と訂正する。なお、261の石材は滑石Bである。

棗玉未成品（168～181）　40点出土した。すべて多角柱状で研磨・穿孔段階のものである。長さ：幅は1：1から2：1程度まで認められる。中央付近がやや膨らむ樽形を呈するものが多い。研磨は長軸方向に沿うものが大多数であるが、稀に垂直方向も見られる（177）。なお、長さ：幅が2：1程度の171・179・180などは、管玉未成品との区別が困難であるが、明確に管玉未成品とわかる個体がないことから、棗玉として一括した。

168・169・171～177は穿孔前、170・178～181は穿孔途中のものであるが、前者、後者のサイズに違いは認められない。孔径は1.6～2.0mmである。170は穿孔痕が認められるが、その深さはわずか0.1mm程度で、直径は1.3mmと小さい。穿孔具の先端が触れた程度、いわゆるアタリをつけた段階で放棄されたものと推測できる。穿孔は両面から行われている（図版28）。石材は蛇紋岩が38点、滑石が2点と、蛇紋岩が圧倒的に多い。なお、次に述べる臼玉に蛇紋岩が使用されており、棗玉との区別が困難なものもある。ここでは便宜的に、長さと幅が同等程度までのものを棗玉、幅が大きいものを臼玉とした。ただし、177は長さを幅が若干上回るが、樽形を呈することから棗玉に分類した。

臼玉・臼玉未成品（182～189）　16点出土した。182～185は蛇紋岩製で、研磨・穿孔段階のものである。183は多角柱に研磨する段階、182は穿孔途中、184・185は穿孔後の整形段階のものであるが、184は約半分が欠損している。断面から両面穿孔されたことがわかる。185は両面穿孔であることが確認できる。186～189は滑石製である。186～188は研磨した扁平素材の周縁に二次加工を施し、穿孔している。3点とも片面穿孔である。この後さらに周縁を研磨して円形に仕上げていくが、その段階のものは出土していない。189は完成品である。なお、同じ滑石であるが186～188は黒に近い灰色、189は黄色を呈する。

勾玉未成品（190～194）　5点出土した。半月形に成形する段階（190～192）と、抉りを作出し逆C字形に成形する段階（193・194）のものがある。完成品の形態は、190～193は断面板状の扁平なもの、194は丸みを持つと判断出来る。190は半月形に成形していく段階のものと考える。厳密には191・192と区別すべきであるが、数が少ないため一括した。191は背面を丸く整形する前の段階であり、稜が残る。193は背面にやや稜を残すものの、腹面に抉りを入れる。194は研磨が進んだ段階で、完成形に近い形態と思われる。190～192が蛇紋岩、193が滑石、194がヒスイである。

原石など（195）　玉作に関連するのものとして、ヒスイ原石・分割・剥片が15点で356.5g、蛇紋岩は剥片・砕片が236.9g出土した。ヒスイの原石は小指ほどの大きさのものと一辺3～4cmのものがある。蛇紋岩砕片は棗玉製作によって生じたものとも考えられるが、原石や荒割といった段階の資料は全く出土していない。

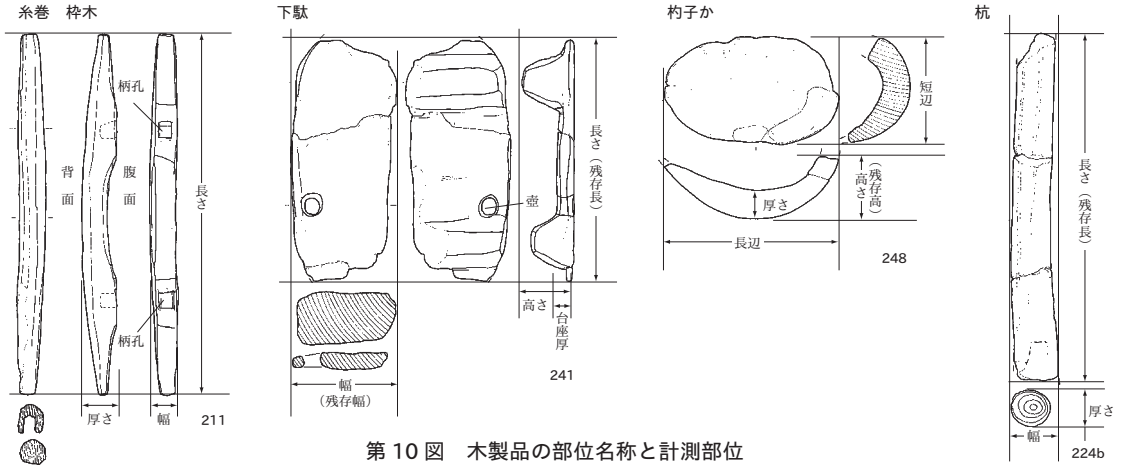
なお、玉類未成品は主に34O25、36N8・13グリッドの2か所から出土している。34O25では滑石が1点のみで、36Nグリッドに集中する傾向が認められた。ただし玉作に関連する遺構は検出されなかった。

3 木　製　品

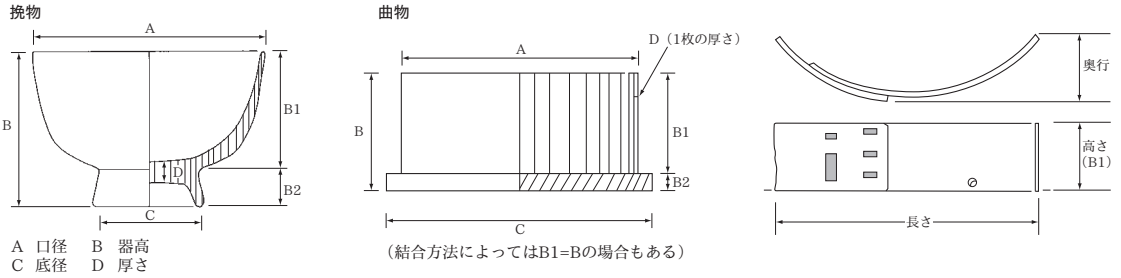
全体の出土量は、テンバコ（内法 54 × 34 × 10cm）17 箱で総数 572 点である。小型の棒状材、板材が多く、器種の判断ができるものはわずかである。集計したところ出土層位はⅣ b 層が 167 点と最も多く、次いでⅣ層 146 点、Ⅲ層 62 点である。河川では河川 1 が 57 点、河川 6 が 40 点と、包含層よりも少ない結果となった。木製品については帰属時期が不明なものが多いことから遺構・層位ごとに説明する。

A 記 載 の 方 針

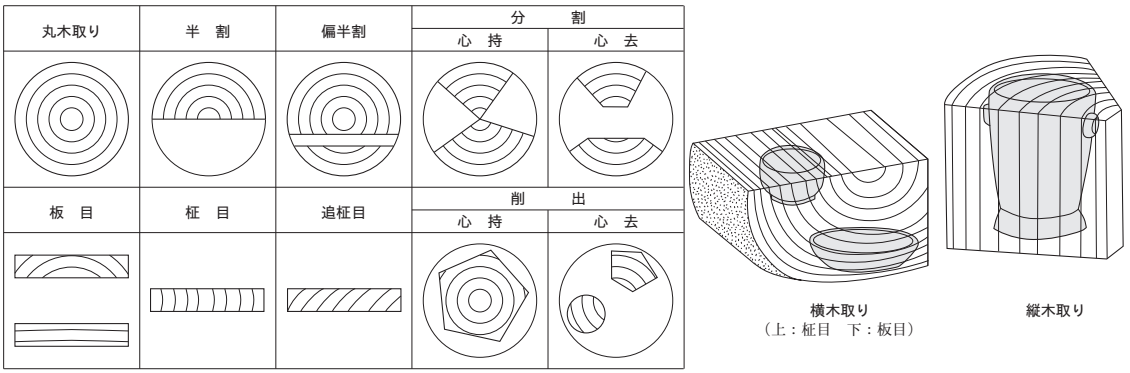
分類・呼称　器種が明らかなもの、推測できるものについては『木の考古学　出土木製品用材データベース』［伊東・山田編 2012］・『木器集成図録　近畿原始篇』『木器集成図録　近畿古代篇』［奈良国立文化財研究所（以下、奈文研とする）1993・1985］に従ったが、特定できないものも多く、『木の考古学』に



第 10 図　木製品の部位名称と計測部位



第 11 図　挽物・曲物の部位名称と計測部位（挽物は［春日 2012］より転載・改変）



第 12 図　木取りの分類

おける木製品分類のような器種の細分までは行っていない。曲物底板については、木釘孔の認められるものを底板とし、認められないものは円形板とした。そのため、本来は底板であってもその個体の残存率が低いために木釘孔がなく、円形板としたものもあろう。

それ以外の用途不明のものについては、形状･断面形から、便宜的に以下のように分類した。棒状（円）：断面形が円形の棒状のもの。ただし、断面が多角形でも、円形を志向したと思われるものは、ここに分類した。棒状（角）：断面形が多角形で、幅と厚さの比率が概ね２：１未満の棒状のもの。棒状（平）：断面形が多角形あるいは楕円形で、幅と厚さの比率が概ね２：１程度の扁平なもの。棒状としたものの幅は小型品であれば4cm 程度におさまる。板状：幅と厚さの比率が概ね３：１程度以上のもの。短冊状：板状のうち、厚さ５～6mm までの薄いもので、幅は3cm 程度までのもの。加工材：棒状にも板状にも該当しない不定形なもの。ただしこれは記述する際の便宜的なもので厳密な分類ではない。

器種の特定できないものは、遺物の天地の判断も困難な場合が多い。天地が不明なものについては、レイアウト上、長い面を縦方向とした。上下とも欠損している棒状や板状のものについては、図化あるいは写真撮影での設置の容易さから決定している場合があり、本来の天地とは異なる可能性があることを予め了承いただきたい。

部位名称と木取り　部位名称と計測位置は第 10・11 図のとおり、木取りについては第 12 図のとおりである。なお、断面図の木目は、木取りを示したものであり実際の年輪幅とは異なるが、幅の広いもの、狭いものがわかるような表現となるよう努めた。

B　各　　説（図版 21 ～ 25・44 ～ 47）

遺構・包含層の順に述べ、さらに分類ごとに述べていく。分類の順序は『木の考古学』に従った。

河川１　中層（196 ～ 200）　196・197 は曲物側板の一部である。196 はケビキが一部のみに施され、綴じ部に近接して木釘孔が見られる。197 も木釘孔が１か所見られる。198 の斎串は下端が欠損している。上からの切込みが３～４か所認められるが、劣化が進み不明瞭である。199 は片端が斜めに加工された棒状の材で、同一個体と判断したが上下左右とも接合せず、個別に図化した。左右側面も割り裂いた面（以下、割裂面とする）であることから、もとの形状は棒状ではなく板状であった可能性もある。200 は棒状で先端を細める。上部の刃物痕は新しいキズである。

河川１　下層（201 ～ 207）・**層位不明**（208）　201・202 は挽物無台盤でケヤキ製である。底径は 201 が 11.8cm、202 が 11.0cm と小ぶりである。201 は内面に刃物痕が少々認められる。202 底部外面は一部炭化している。203 は曲物側板で一部にケビキが施される。片端のみ残存しており器高は不明である。204 の斎串は 198 同様、頭部を山形に作出し側面には上からの切込みを入れる。左側面は細かく切込み、左右非対称となっている。205 は左側が欠損しており、円形板であった可能性が高い。206 は左側縁に抉りを入れているように見える。左側は欠損しているため、あるいは孔であった可能性も否定できない。下部には刃物痕が認められ、うち１か所はうまく切れずささくれが生じている。207 は下端をＶ字状に作り出した棒状材である。３片が接合するが、この状態でほぼ完形と考える。208 は箸状木製品で上端が欠損している。断面を六角形に作出している。

河川２（209・210）　河川２の底面からは板杭が３点出土しており（図版３・30）、うち２点を図化した。209 は長さ 52.6cm を測り、左右側面での連続加工の痕跡が明瞭に残る。210 は劣化が著しく加工痕は不明瞭である。209・210 の長さは、土に埋まっていた深さを示しており、打ち込まれた深さに差があっ

たことがわかる。なお、209 の年代測定を行ったところ、4 世紀後半～ 5 世紀中頃という数値が示された。

河川 5（211）　糸巻の枠木であるが、1 点のみの出土である。背面は丸く作出し、上下を緩やかに細めている。横木が結合される枘孔は 2 か所あり、孔の大きさは長幅 1cm 程である。年代測定では 7 世紀後半～ 8 世紀後半との値が示され、古代のものと判断できる。

河川 6（212 ～ 214）　212・213 は片端を斜めに加工した棒状材である。断面形を見ると、いずれも整っておらず割裂面のままであることから加工は丁寧ではない。212 は中央付近に刃物痕が少し認められる。214 も片端を斜めに加工したものであるが、板状の材である。下部は劣化が進み薄くなっている。

ピット・杭（215 ～ 225）　215 は P145 から出土した。角棒状材の先端を斜めに切り落としたのみの、簡易的な杭と思われる。心去の分割材を使用している。劣化が進み加工痕は不明瞭である。216 は上部がやや扁平で、下部に向かって細める棒状材である。下部表面は剥落してつぶれており、上部は欠損していることから全形は不明である。217 は下端が欠損しているが、その他の面はすべて丁寧な加工がなされている。断面は隅丸方形で、上面は丸く作り出し細かい加工痕も認められる。218･219 は 38M グリッドの杭集中範囲、220･223･224 は 37O グリッドの杭集中範囲、222･225 は単独で出土した杭である。218・219 は直径 2cm 前後とかなり小さく、杭として機能していたのか疑問が残るものである。218 は表面 1 面、219 は表面と右側面の 2 面のみの加工である。218 の樹種はトネリコ属、219 はツブラジイである。220・221 は節が多く見られ、樹種はタラノキである。表皮直下の面が残っていると推測されるが、いずれも劣化が進んでいる。223 は表面と左側面の 2 面、224 は表面 1 面のみの加工である。これらも表皮直下の面が残っていると考える。樹種は 223 がクリ、224 がスダジイである。222 の杭は河川 1 の覆土に打ち込まれたものである。上半は乾燥が進み収縮している。木取りは削出で、年輪の弧が比較的直線的であることから、原木はかなりの大木と推測される。樹種はクリである。225 は上下とも欠損しているが、遺存状態が良好で加工痕は明瞭である。樹皮が残る。他の個体と比較して年輪幅が広い。

Ⅳb 層（226 ～ 240）　226 は箆杓子である。右側縁が欠損している。加工は丁寧で、表面に削り痕が残る。下端から 2cm 程の部分から両側縁をわずかに削って細めている。227 は左右が欠損しているが、円形板と推測される。周縁の幅 1cm 程を斜めに加工し厚みを減じている。加工は丁寧である。劣化が進み、厚みがほとんどなくなっている部分もある。228 は何らかの製品または部材の一部であろう。左右を欠損しているため全形は不明である。上下とも弧状を呈するがそれぞれの弧の中心は一致しない。裏面は全面炭化している。230 は平棒状材の下部を弧状に細めるもので、252 と近似する。上下を欠損しており全形は不明である。231 は曲物側板の小片で、231a は綴じ孔が 1 か所、231b は左右に 2 か所認められる。232 は円形板の表面に樺皮綴じが 2 列、左右それぞれ孔が 2 か所認められるものである。中央には同心円状の孔が存在する可能性がある。しかしその孔？の弧は滑らかな弧状ではないことから、円形ではない可能性もある。裏面は一部が炭化し刃物痕も認められ、転用されたとも推測される。233 は曲物底板で直径は約 13cm である。木釘孔が 4 か所あり、そのうち木釘が 2 か所残る。木釘孔の深さは 7mm 程である。

234 は略半円形を呈する板材である。裏面には加工痕が見える。上端に炭化部分がわずかな範囲で認められる。235 は杭の先端部分と考える。劣化が進み加工痕は不明瞭であるが、断面は略正方形に整えている。樹種はクリである。236 ～ 238 は棒状の材である。236 は先端をわずかに細く加工する。237 は丁寧な加工で断面を円形に作り出し、先端は丸く仕上げる。炭化は見られない。238 も断面を整った円形に仕上げている。下部をわずかに細めるが、下端を欠損しているため形態は不明である。上部には水

平方向の擦痕があり、部分的にやや細くなっていることから、紐等で縛った痕跡と推測できる。239 は右側縁下部に小さい抉りがあり、部材と判断できる。240 は表面以外の 3 面を削り出し棒状材を作り出す。表面のカーブに年輪が平行しており、表面は原木の表皮近くの面が残っていると判断できる。下端は 4 面を加工する。表面から左側面にかけて全面に炭化している。

Ⅳ層（241 ～ 263）　241 は連歯下駄、242 は無歯下駄、243 は差歯下駄の歯である。241 は上下と右側が欠損し緒孔が 1 か所しか残っていない。緒孔の直径は 1.3 ～ 1.5cm、高さは 3.5cm であるが、底面の劣化が進んでいるため、これよりも高い可能性がある。樹種はモクレン属である。242 裏面は、平坦ではなく木目に沿った凹凸が生じているが、劣化によるものであろう。緒孔の形は扁平で長さ 0.7 ～ 1.0cm、幅 0.8 ～ 0.9cm である。244 は黒漆塗りの椀で、高台部分が剥落していると推測される。体部上半は面取りされる。245 は円形板と推測される。中央に直径 1.5cm の円孔を有し、蓋板の可能性がある。周縁の幅 1cm 程を斜めに加工し厚みを減じている。裏面は乾燥と劣化により凹凸が著しい。246 は曲物底板で表面は一部炭化している。木釘孔は 2 か所認められるが釘は残存していない。劣化が進んでいることから、木釘孔周辺も崩れており、表面下部も剥落している。248 は杓子の底部である可能性が高い。形状は楕円形でおそらく図面右側に柄がつくものと推測する。口縁部は残っておらず全形は不明である。器壁は接地部分が最も厚く 1.9cm で、口縁部に近づくにつれ薄くなる。木取りは横木取りの柾目で樹種はフサザクラである。

249･250 は錘と判断した。249 は丸木の一面のみ平らに加工し、その面に接して抉りを 1 か所入れる。劣化により上下端部の加工は不明瞭である。250 は上下端を丸く作り出し、中央付近の両側（対面）2 か所に抉りを入れる。249・250 はどちらも直径 3.6cm である。樹種は 249 がヤナギ属、250 がノリウツギである。251 は把手の未成品であろうか。あるいは紡織機の一部かもしれない。断面形は台形で上下対称形をなす。表面の上部と下部は劣化が進む。253 は左側面下部を抉り、ほかは角を落とすように斜めに加工する。表面にも加工痕が認められ、下部をより薄く加工している。裏面は劣化しており加工痕は不明瞭である。254 は下端を斜めに加工し、上端は平坦に作り出す。何らかの部品であろうか。255 は肩部を水平になるよう抉り、頭部を山形に作り出す。下部は右側面のみ斜めに加工する。製品の一部と考えられるが種類は不明である。256 は半円形または円形を呈する部材である。孔が左側に 2 か所、右側に並んで 2 か所見られる。厚さは 3mm と薄い。左側縁の上部は劣化が進み、側面がつぶれている。裏面は様々な方向の刃物痕が多数認められる。257 も半円形あるいは円形の部材であろう。方形の孔にはめ込まれた材が孔の幅半分ほど残る。材は板厚の 2 倍ほどの長さである。表面下部は炭化している。258 は断面円形を呈する棒状材で、上下と中心近くの 3 か所に孔がある。孔は柔らかく開けやすい早材の部分を貫通している。下部は劣化が進む。260 ～ 263 は棒状材で、261 は断面方形、その他は断面円形を志向する。いずれも程度の差はあれど片端を細めるものである。263 は杭とも言える形状で、加工痕は明瞭である。

Ⅳa 層（264・265）　264 は上下の両側面に「く」字状の抉りを入れた部材である。抉り部分には擦痕等の使用痕は認められない。265 は片端を枘状に作り出す。枘は端面中央ではなく端から作り出されている。下部は欠損しており、わずかに残る下端は炭化している。

Ⅲ層（266 ～ 273）　266・267 は漆器椀である。266 は内外面黒漆塗りで見込みに赤漆文様を描く。267 は外面黒漆、内面赤漆が施される。内面は赤漆が一部剥落し、下地の黒色が見える。口縁部のみであり文様は不明である。268 は弧状を呈する板状の材である。加工は丁寧であり何らかの製品の一部か

部材と考える。269 箸状木製品の先端は鋭く作出される。270 は接合しないが同一個体と判断できることから、図上復元した。方形を呈すると推測される。四隅を切り落とす際、側面のみを加工するのではなく、表裏それぞれの面から加工している。中心付近に孔が 1 か所見られる。271 は短冊状の部材である。表面のみ上下縁を斜めに加工する。中央付近に小さな孔を 2 か所穿ち、上端にわずかな切込みを入れる。樹種はヒノキである。272 は角棒状の部材で、上下に孔を穿つが、上部の孔は未貫通である。表裏面とも丁寧に加工しているが、本体は直線的ではなくわずかに曲がっている。意図的に成形したものかどうかは不明である。273 は板状の部材で、左側縁に孔が 2 か所見られる。下端を弧状に加工する。上端は欠損しているが、右側面も欠損している可能性がある。観察による欠損の判断ができず推定線を入れていない。表面に多数の刃物痕が認められる。

自然木（274・275）　写真のみの掲載である。274 は河川 4 の 1' 層から出土した自然木で、長さは約 16cm と 7cm、直径は 5cm 程である。樹種はクマノミズキ類で、年代測定の結果 8 世紀後半～ 9 世紀後半という数値が示された。遺構の調査所見とは一致する。275 は SX102c から出土した自然木で、主に節の部分である。樹種はスギで、年代は 1 世紀で弥生時代中期頃という結果が示された。もともとは確認調査で検出したピットであり、平面形や堆積状況は不明ではあるが、下層（古墳時代）の遺構検出面より 40cm 下で検出していることから、弥生時代の可能性は高い。測定結果と一致すると言えよう。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　樹　種　同　定

樹種同定については、発掘調査を行った 2007 年度に 11 点分析を行っていることから、2014 年度は掲載遺物のうち未同定の 72 点を分析した。以下、分析年度ごとに記載する。

A　2007 年度分析

1）試　　料

試料は、河川跡やピット、性格不明遺構、包含層等から出土した木製品 8 点と自然木 2 点の計 10 点（分析番号 Y1 ～ 10）である。このうち、部材（分析番号 Y4）は孔内に木釘が残存していたことから、板と組合せ材の 2 点より試料採取を行っている。したがって、分析対象とした試料は 11 点となる。

2）分　析　方　法

各試料の外観や保存状況、さらに、木取り等の観察を行った後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取し、サンプル瓶内に水とともに封入する。採取した切片を実体顕微鏡で観察し、各断面に相当する切片を拾い出してガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地･伊東［1982］、Wheeler 他［1998］、Richter 他［2006］を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林［1991］、伊東［1995, 1996, 1997, 1998, 1999］や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3）結　　果

結果は第 2 表に示す。木製品および自然木は、針葉樹 1 種類（スギ）と広葉樹 2 種類（スダジイ・クマノミズキ類）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

分析番号	報告番号	樹種	分類群	種類	木取り	出土位置		
						グリッド	遺構番号	層位
Y1	226	スギ	工具	箆杓子	柾目	35O1		Ⅳb
Y2	209	スギ	土木材	板杭	柾目	34O19	河川 2	
Y3	211	スギ	紡織具	糸巻の枠木	削出	36N23	河川 5	1
Y4	257	スギ		部材　板	板目	36N21		Ⅳ
		スギ		組合せ材	削出			
Y5	274	クマノミズキ類		自然木		35O15	河川 4	1’
Y6	275	スギ		自然木		38N3	SX102c	1
Y7	242	スギ	服飾具	無歯下駄	追柾目	35O21 ィ		Ⅳ
Y8	217	スギ		不明	削出	37N5	杭 23	
Y9	224b	スダジイ	土木材	杭	丸木	37O12	杭 39	
Y10	215	スギ	土木材	杭か	分割（心去）	36N9	P145	

第 2 表　2007 年度分析　樹種同定結果

（1）スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

（2）スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*（Makino）Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は 1-3 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高。

（3）クマノミズキ類（*Cornus*）　ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は上下縁辺部が直立細胞となる異性、1-6 細胞幅、1-30 細胞高。

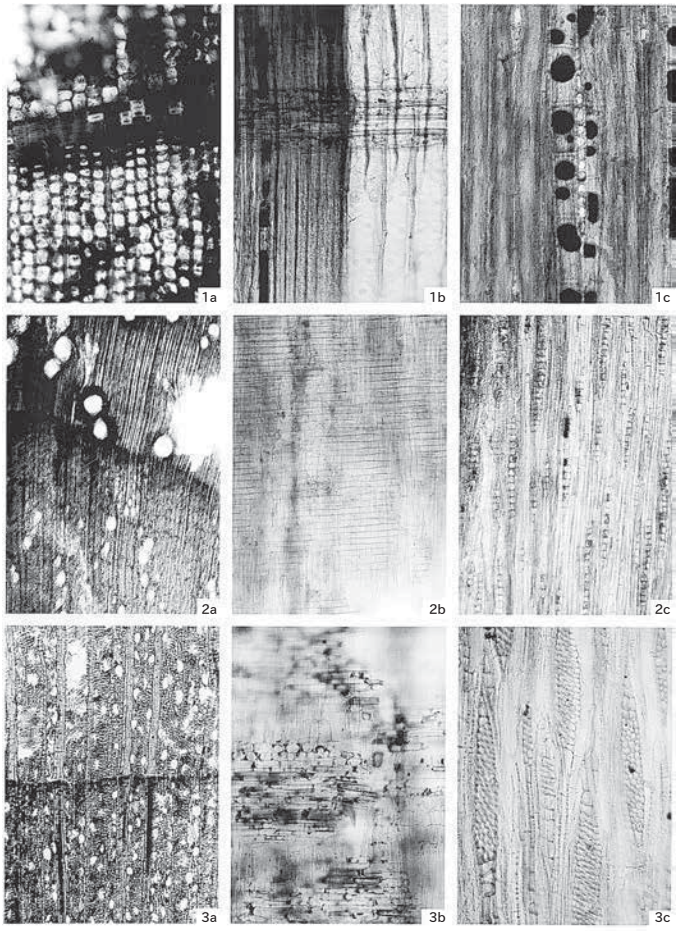
以上の特徴からミズキ属の中でもクマノミズキやヤマボウシと考えられる。

4）考　　察

木製品･杭材 9 点は､芯持丸木の杭 1 点(分析番号 Y9)を除く 8 点がスギであった。木製品の器種は､杓子、部材および組合せ材、糸巻の枠木、板杭、下駄、杭と多岐に渡り、様々な木製品にスギが利用されていたことが推定される。スギが多く利用される傾向は、糸魚川市内の山岸遺跡・前波南遺跡・六反田南遺跡の調査でも確認されている。なお、スギが多用された背景としては、スギ材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性を有するといった材質的特徴や、特に割裂性を利用した板状の加工が容易であることから、箆杓子、板杭、無歯下駄などの板状の製品を製作するのに適していたことなどが推定される。

一方、自然木 2 点は、スギとクマノミズキ類であった。スギは、水分の多い土地を好む樹木であり、周囲の低地にスギが生育していた可能性がある。したがって、上記したスギ材が多用された背景には、周囲にスギが生育し、入手が容易であったことなども考えられる。また、クマノミズキ類は、林縁部などに普通にみられる落葉広葉樹であり、周囲の山地斜面などに生育していた可能性がある。

芯持丸木の杭に認められたスダジイは、暖温帯性常緑広葉樹林を構成する常緑高木である。新潟県では、沿海地を中心に常緑広葉樹が分布していることから、スダジイも周囲に生育していた可能性がある。　　（2008 年 3 月）



1. スギ（分析番号 Y3）
2. スダジイ（分析番号 Y9）
3. クマノミズキ類（分析番号 Y5）

300 μm：2a・3a
200 μm：1a・2b, c・3b, c
100 μm：1b, c

a：木口，b：柾目，c：板目

第 13 図　木製品の光学顕微鏡写真（1）

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I.and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織 . 地球社，176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

B　2014 年度分析

1）試 料 と 方 法

試料は、河川跡などから出土した曲物や漆器椀、下駄、斎串、杭材などの木製品 72 点である。遺構の時期は、河川 1・2・6 が古代、杭 12・18・22・30・34・36・43・51 が中世、層位ではⅣ層が古代～中世、Ⅳb 層が古代主体、Ⅳa 層が中世主体、Ⅲ層が中世と推測されている。

これらの試料から、剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

2）結　　果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、アスナロの 4 分類群、広葉樹はヤナギ属、クリ、ツブラジイ、ブナ属、ケヤキ、モクレン属、フサザクラ、ノリウツギ、タラノキ、トネリコ属トネリコ節（以下、トネリコ節）の 10 分類群、計 14 分類群が確認された。遺構および層位別の樹種構成を第 3 表、結果の一覧は巻末の観察表に示した。全体ではスギが 51 点で最も多く、過半数を占めている。その他の樹種は、それぞれ 3 点以下である。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第 14・15 図に示す。

（1）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　第 14 図　1a-1c（No.225）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

（2）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　スギ科　第 14 図　2a-2c（No.269）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂

性は大きい。

（3）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第 14 図　3a-3c（No.271）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

（4）アスナロ　*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.　ヒノキ科　第 14 図　4a-4c（No.259）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1 分野に不揃いに 3 ～ 4 個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材の加工性や割裂性は中庸だが、耐朽性および保存性が高い。

（5）ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　第 14 図　5a-5c（No.249）

やや小型の道管が、単独もしくは数個複合してやや密に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一となる。放射組織は単列で、異性である。

ヤナギ属は暖帯、温帯、寒帯に広く生育する落葉高木または低木で、ケショウヤナギやコゴメヤナギ、シダレヤナギなど、日本では 90 種程がある。材は全般に軽軟で、強度は低いが靱性があり、切削加工は容易である。

（6）クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　第 14 図　6a-6c（No.222）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

（7）ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata*（Thunb.）Schottky　ブナ科　第 14 図　7a-7c（No.219）

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸であり、耐久性は著しく低い。

（8）ブナ属　*Fagus*　ブナ科　第 14 図　8a-8c（No.267）

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の 2 種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2 ～数列のもの、広放射組織の 3 種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬および緻密で、靱性があるが保存性は低い。

（9）ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　ニレ科　第 14 図　9a-9c（No.244）

大型の道管が年輪のはじめに 1 列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は 3 ～ 5 列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

（10）モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　第 14 図　10a-10c（No.243）

小型の道管が、単独もしくは３～４個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道管相互壁孔は対列～階段状、道管の穿孔は単一である。放射組織は１～２列幅で、上下端の１～２細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木および高木で、タイサンボクやホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度だが、緻密で狂いが少ない。

（11）フサザクラ　*Euptelea polyandra* Siebold et Zucc.　フサザクラ科　第 15 図　11a-11c（No.248）

小型の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材部でやや小型化する。道管の穿孔は 40 段以上の階段状である。放射組織は６～ 10 列幅程度の異性で、細胞高は 1mm 以上ある。

フサザクラは温帯から暖帯上部に分布する落葉高木である。材はやや重硬で割れにくいが脆い。

（12）ノリウツギ　*Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc.　ユキノシタ科　第 15 図　12a-12c（No.250）

小型でやや角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は 40 段程度の階段状である。放射組織は異性で、１～２列幅で単列部と多列部の幅が同じである。

ノリウツギは北海道から九州（屋久島まで）に分布する落葉小高木あるいは低木である。温帯林の先駆樹種で、伐採跡地に最初に出現する種の一つである。材は強靱である。

遺構名	河川１		河川２	河川６		杭 12	杭 18	杭 22	杭 30	杭 34	杭 36	杭 43	杭 51	－	－	－	－	計
層位	下	中	－	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ	Ⅳb	Ⅳa	Ⅲ	
樹種　時期	古代					中世か								古代～中世	古代主体	中世主体か	中世	
マツ属複維管束亜属												1						1
スギ	5	7	1	2	1			1						13	14	2	5	51
ヒノキ														1			1	2
アスナロ														1				1
ヤナギ属														1				1
クリ											1		1		1			3
ツブラジイ							1											1
ブナ属																	2	2
ケヤキ	2													1				3
モクレン属														1			1	2
フサザクラ														1				1
ノリウツギ														1				1
タラノキ									1	1								2
トネリコ属トネリコ節						1												1
計	7	7	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	20	15	2	9	72

第３表　遺構別の樹種構成

器種分類	紡織具	服飾具			容器							食事具	祭祀具	土木材		その他							計
樹種　器種名	錘か	差歯下駄歯	連歯下駄		曲物側板	曲物底板	漆器有台椀	漆器椀	漆器椀か	挽物無台盤	杓子か	箸状木製品	斎串	杭	板杭	円形板か	蓋板か	杭状	半円形板か	部材	部材？	不明	
マツ属複維管束亜属														1									1
スギ					5	2						4	2		1	2	1	2	1	7	1	23	51
ヒノキ																				2			2
アスナロ																						1	1
ヤナギ属	1																						1
クリ														3									3
ツブラジイ														1									1
ブナ属								1	1														2
ケヤキ							1			2													3
モクレン属		1	1																				2
フサザクラ											1												1
ノリウツギ	1																						1
タラノキ														2									2
トネリコ属トネリコ節																		1					1
計	2	1	1		5	2	1	1	1	2	1	4	2	7	1	2	1	3	1	9	1	24	72

第４表　器種別の樹種構成

（13）タラノキ　*Aralia elata* (*Miq.*) *Seem.*　ウコギ科　第 15 図　13a-13c（No.220）

年輪のはじめにやや大型の道管が数列並び、晩材部では小道管が単独もしくは数個複合して斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は 3 ～ 5 列幅の異性で、不完全な鞘細胞がみられる。

タラノキは温帯から暖帯に分布する落葉低木である。材の強度は中庸である。

（14）トネリコ属トネリコ節　*Fraxinus* sect. *Ornus*　モクセイ科　第 15 図　14a-14c（No.218）

年輪のはじめに大型の道管が 1 列程度並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に 2 ～ 3 個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で 1 ～ 3 列幅である。

トネリコ節は温帯に分布する落葉高木で、トネリコやアオダモなど 7 種がある。材は中庸～やや重硬で、切削加工は容易、保存性も中庸である。

3）考　　察

横マクリ遺跡から出土した木製品の樹種同定結果は、スギを中心とする樹種構成となった。なお、遺構ごとに分析点数が大きく異なるため、遺構や時期による樹種構成の違いまでは確認できていない（第 3 表）。

器種別の樹種構成を第 4 表に示す。錘や下駄、漆器類、杭材では広葉樹が用いられているが、それ以外では、板状の木製品を中心にスギが多用されている。スギは軽軟なため加工が容易であり、また木理直通で割裂性も大きく、製材しやすい材である。

紡績具の錘と思われる木製品では、ヤナギ属とノリウツギが各 1 点確認された。ヤナギ属は軽軟な材、ノリウツギは強靭な材である。

下駄は連歯下駄と、差歯下駄の歯が各 1 点で、ともにモクレン属であった。モクレン属の材は緻密だが加工容易で、下駄の素材としてよく用いられる。

容器では、曲物は底板、側板ともにすべてスギであった。一方、漆器椀や挽物では広葉樹のブナ属、ケヤキ、フサザクラが用いられていた。ブナ属とケヤキは、漆器の素材として一般的である。

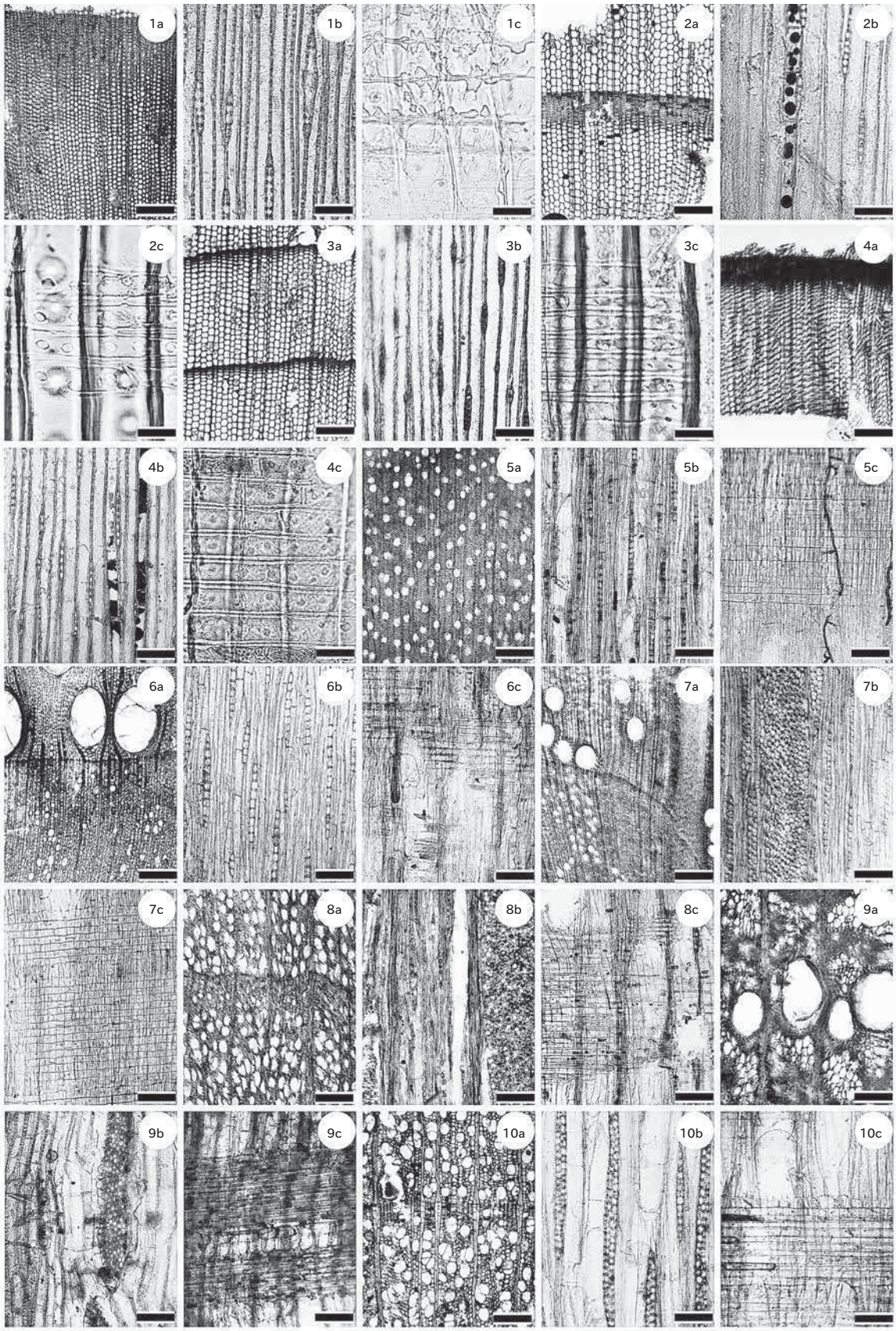
食事具や斎串、その他の用途不明木製品は、ほぼスギであった。短冊状の部材でヒノキ、不明木製品でアスナロも確認された。

杭材では、板杭でスギが 1 点みられたが、丸木や削出の試料ではスギは確認されず、マツ属複維管束亜属とクリ、ツブラジイ、タラノキであった。これらの材は二次林的要素の強い樹種である。杭材には遺跡周辺の植生が反映される傾向があるため、周辺は日当たりのよい開けた環境であったと推測される。

06 年の調査で行われた樹種同定でも、エブリや浮子など木製品の多くにスギが用いられ、漆塗椀ではケヤキ、自然木ではハンノキ亜属が確認されている［野村 2008］。今回の樹種同定結果も、以前の調査結果と類似した樹種構成を示している。北陸地方はスギを多用するスギ文化圏であり［鈴木 2002］、地域の木材利用傾向とも一致する。　（2014 年 12 月）

引用文献

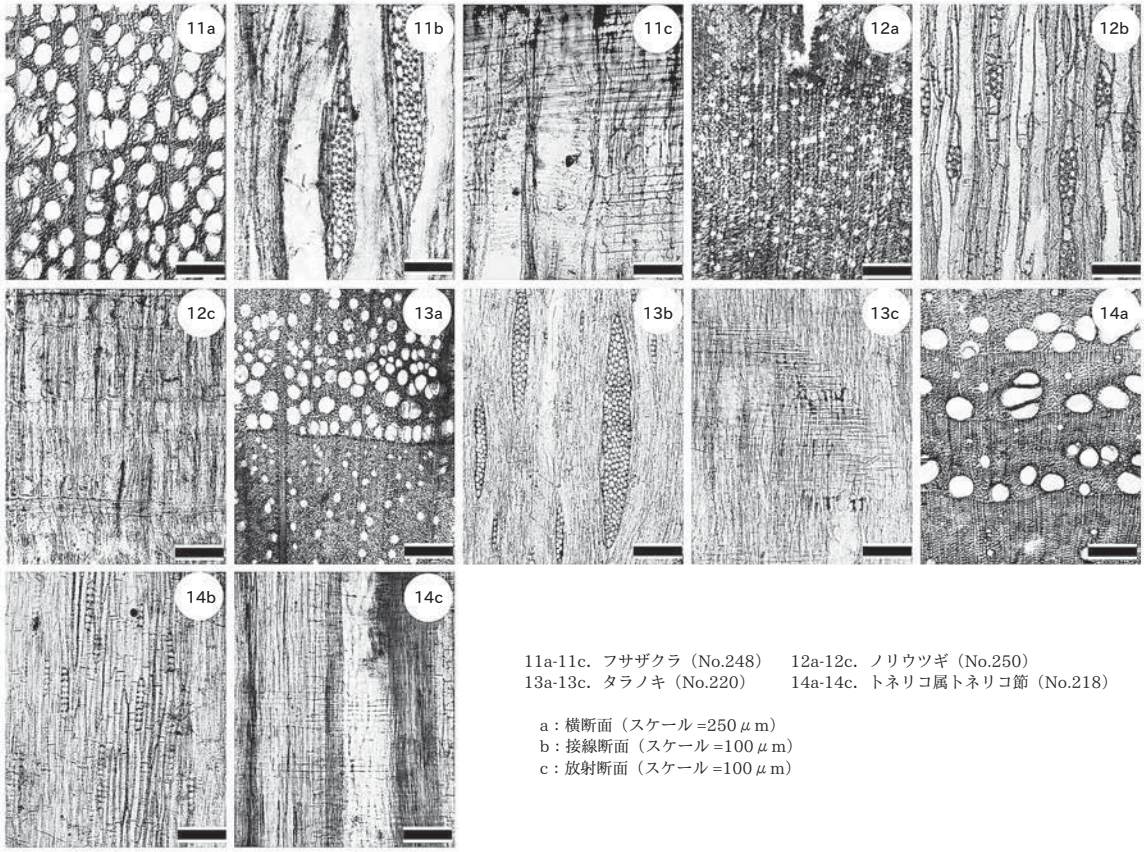
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．
野村敏江（2008）樹種同定．「横マクリ遺跡」：48-49，新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木三男（2002）日本人と木の文化．255p，八坂書房．



1a-1c．マツ属複維管束亜属（No.225）　2a-2c．スギ（No.269）　3a-3c．ヒノキ（No.271）　4a-4c．アスナロ（No.259）
5a-5c．ヤナギ属（No.249）　6a-6c．クリ（No.222）　7a-7c．ツブラジイ（No.219）　8a-8c．ブナ属（No.267）
9a-9c．ケヤキ（No.244）　10a-10c．モクレン属（No.243）

a：横断面（スケール =250 μm）　b：接線断面（スケール =100 μm）　c：放射断面（スケール =1-4：25 μm，5-8：100 μm）

第 14 図　木製品の光学顕微鏡写真（2）



第 15 図　木製品の光学顕微鏡写真（3）

2　放射性炭素年代測定

1）測定対象試料

測定対象試料は、河川 2(34O19 グリッド)から出土した加工材(試料⑦:IAAA-72558)、河川 5(36N23 グリッド）の 1 層から出土した糸巻の枠木（試料⑧：IAAA-72559)、杭 39（37D12 グリッド）（試料⑨：IAAA-72560)、河川 4（35O15 グリッド）から出土した自然木（試料⑩：IAAA-72561)、SX102c（38N3 グリッド）から出土した自然木（試料⑪：IAAA-72562)、合計 5 点である。

2）化学処理工程

1.　メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
2.　AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001 ～ 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
3.　試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。
4.　液体窒素とエタノール･ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。
5.　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

6. グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

3）測　定　方　法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により ^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

4）算　出　方　法

1. 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
2. ^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}C によって補正された値である。
3. 付記した誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定が行われ、測定値が 1 つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
4. δ^{13}C の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS 測定の場合に同時に測定されるδ^{13}C の値を用いることもある。δ^{13}C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

   同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰ ; パーミル）で表した。

   $\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$　　(1)

   $\delta^{13}C = [(13A_S - 13A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000$ (2)

   ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

   $^{14}A_R$：標準現代炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

   δ^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ^{13}C/^{12}C を測定し、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}C を用いることもある。この場合には表中に（加速器）と注記する。
5. Δ^{14}C は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1) 式の ^{14}C 濃度を、δ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算する。

   $^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$ として ^{14}C/^{12}C を使用するとき）

   または

   $= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$ として ^{14}C/^{13}C を使用するとき）

   $\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$（‰）
6. pMC（percent Modern Carbon）は、現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合を示す表記であり、Δ^{14}C との関係は次のようになる。

   $\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$（‰）

   $pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$（%）

   国際的な取り決めにより、このΔ^{14}C あるいは pMC により、^{14}C 年代が次のように計算される。

   $T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1] = -8033 \times \ln(pMC/100)$
7. ^{14}C 年代値と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。

8.　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ =68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ =95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10 較正プログラム（Bronk Ransey 1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

測定番号	試料番号	採取地点	種類	σ ^{13}C（‰）（AMS）	σ ^{13}C 補正あり	
					Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-72558	⑦	河川 2（34O19）	加工材	－25.14 ± 0.58	1,640 ± 30	81.58 ± 0.29
IAAA-72559	⑧	河川 5-1 層（36N23）	糸巻の枠木	－21.85 ± 0.76	1,250 ± 30	85.63 ± 0.30
IAAA-72560	⑨	杭 39（37O12）	杭	－24.48 ± 0.79	640 ± 30	92.29 ± 0.33
IAAA-72561	⑩	河川 4（35O15）	自然木	－27.82 ± 0.70	1,210 ± 30	86.03 ± 0.34
IAAA-72562	⑪	SX102c（38N3）	自然木	－24.77 ± 0.79	1,990 ± 30	78.07 ± 0.29

［＃ 2125］

第 5 表　放射性炭素年代測定結果

測定番号	σ ^{13}C 補正なし		暦年較正用
	Age（yrBP）	pMC（%）	（yrBP）
IAAA-72558	1,640 ± 30	81.55 ± 0.27	1635 ± 28
IAAA-72559	1,190 ± 30	86.19 ± 0.27	1245 ± 28
IAAA-72560	640 ± 30	92.39 ± 0.29	644 ± 28
IAAA-72561	1,250 ± 30	85.54 ± 0.31	1208 ± 31
IAAA-72562	1,980 ± 30	78.11 ± 0.26	1988 ± 30

［参考値］

第 6 表　暦年較正年代

5）測　定　結　果

^{14}C 年代は、河川 2 から出土した加工材（試料⑦：IAAA-72558）が 1640 ± 30yrBP、河川 5 の 1 層から出土した糸巻の枠木（試料⑧：IAAA-72559）が 1250 ± 30yrBP、杭 39（試料⑨：IAAA-72560）が 640 ± 30yrBP、河川 4 から出土した自然木（試料⑩：IAAA-72561）が 1210 ± 30yrBP、SX102c から出土した自然木（試料⑪：IAAA-72562）が 1990 ± 30yrBP である。

暦年較正年代（1 σ =68.2%）は、試料⑦が 380 ～ 440AD（55.8%）・490 ～ 530AD（12.4%）、試料⑧が 680 ～ 780AD（61.0%）・790 ～ 810AD（7.2%）、試料⑨が 1290 ～ 1315AD（28.2%）・1355 ～ 1390AD（40.0%）、試料⑩が 775 ～ 875AD、試料⑪が 40 ～ 25BC（6.7%）・20 ～ 10BC（9.3%）・5BC ～ 55AD（52.3%）である。試料の炭素含有率は 60% 程と十分であり、化学処理および測定内容に問題がないことから、妥当な年代と考えられる。　（2008 年 3 月）

参考文献

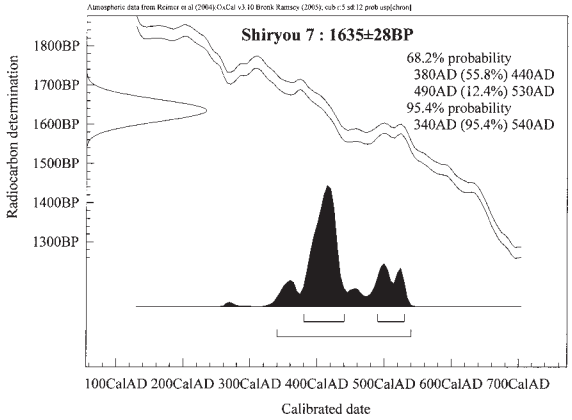
Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion：Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

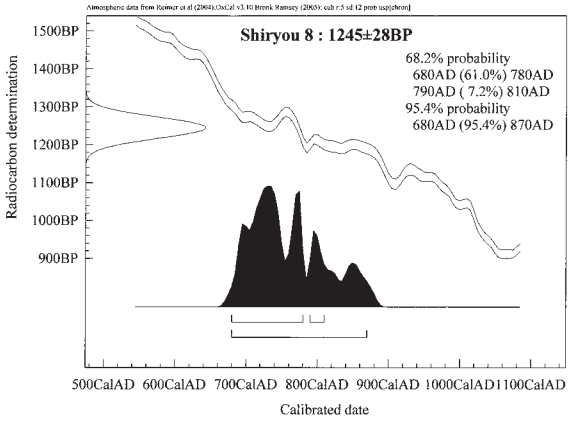
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy：the OxCal Program, *Radiocarbon* 37（2），425-430

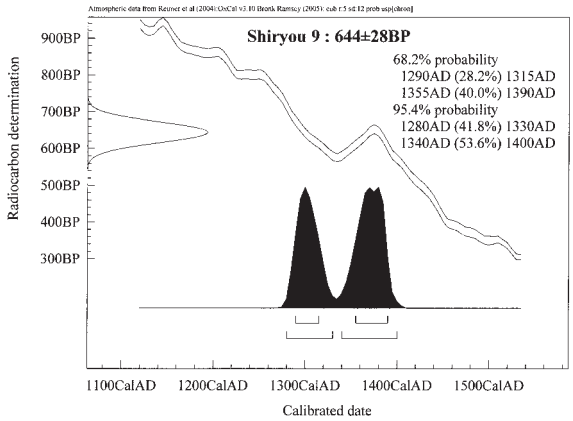
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43（2A），355-363

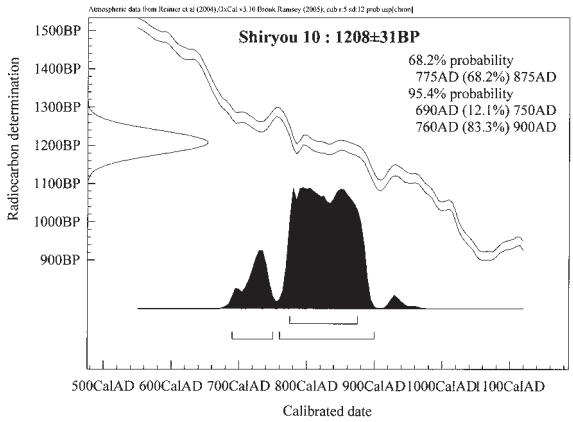
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43（2A），381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

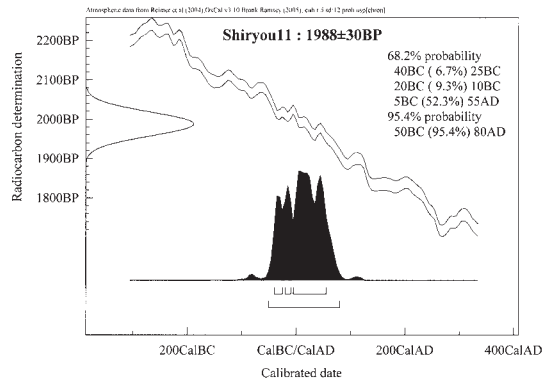








使用プログラム：Oxcal v 3.10



第 16 図　暦年較正年代グラフ

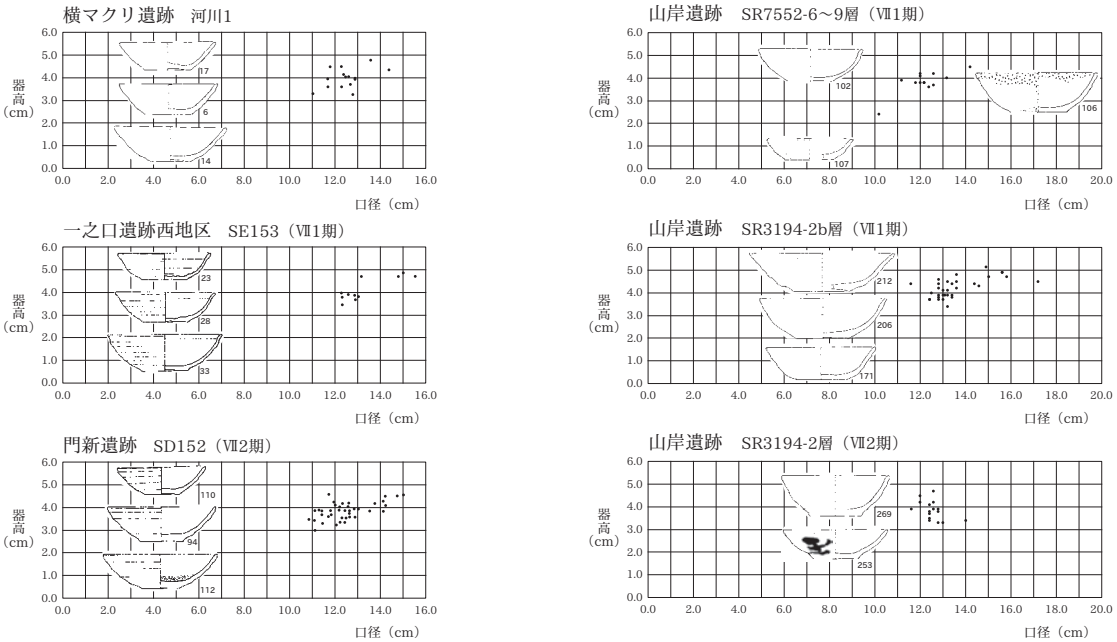
第Ⅶ章　ま　と　め

1　土　　器

A　古 代 の 土 器

07 年調査区では、土師器食膳具を主体とする土器・陶磁器が定量出土した。特に河川 1 からは遺存状態の良好なものがややまとまっている。これらの資料の編年的位置付けを考えてみたい。

河川 1 から出土した土師器無台椀は口径 11 ～ 14cm、器高 3 ～ 5cm 程度であり、第 17 図に図示した。口径 12.5cm、器高 4cm を中心にまとまり、一方、口径 14cm 前後に 2 点のみであるが分布する。法量の二分化が認められるようになるのはⅦ 1 期で、徐々に両者の差が広がると考えられている［春日 1997］。また、当該期に位置づけられている山岸遺跡 SR3194-2 層・2b 層、一之口遺跡西地区 SE153 等と傾向も一致することから（第 17 図）、Ⅶ 1 ～ 2 期に位置付けられる。



第 17 図　土師器無台椀の法量

（［春日ほか 2012］・［春日 1997］・［鈴木ほか 1994］より転載・改変）

器種構成比率を第 7 表に示す。遺跡全体の数値では時期の異なるものも含む。河川 1 において、製塩土器を除いた比率は、土師器食膳具 97.8%、黒色土器 1.3%、須恵器 0.9% であった。煮炊具は出土していない。土師器が圧倒的多数を占め、煮炊具がほとんど出土しないのはⅦ～Ⅷ期の特徴である。一括資料でないこと、Ⅴ期の資料もわずかながら含まれているため参考程度ではあるが、器種構成比率においても概ねの傾向は一致すると考えたい。

本遺跡から出土した土器の大半は、近接する田伏山崎遺跡から流れてきたものと考えられる。田伏山崎遺跡出土土器はⅦ～Ⅷ期と位置付けられており、今まで述べてきたことを実証する。ちなみに、田伏山崎遺跡では製塩土器が多数を占め、土師器の比率は 10 ～ 20%、須恵器は 10% に満たない［佐藤ほか

器　種		河川 1			遺跡全体					
		破片数	口縁残存率 /36	口縁部比率	破片数	口縁残存率 /36	口縁部比率	破片数	口縁残存率 /36	口縁部比率
土師器	無台椀	165	355.5	74.92%	447	1129	68.65%	308	1529.5	69.21%
	有台椀	1	2.5	0.53%	1	2.5	0.15%	2	18	0.81%
	椀				3	9	0.55%			
	有台皿							1	36	1.62%
	小皿	6	29.5	6.22%	30	94.5	5.75%	14	46	2.08%
黒色土器	無台椀	4	4	0.84%	3	5	0.30%	10	25	1.13%
	有台椀				2	12.5	0.76%	1	7	0.32%
	椀	2	1	0.21%	18	32	1.95%			
須恵器	無台杯	2	3.5	0.74%	6	43.5	2.64%	4	51	2.31%
	有台杯				1	32	1.95%	1	36	1.63%
	杯				1	2.5	0.15%			
灰釉陶器	椀							1	10	0.45%
食膳具　計		180	396	83.46%	512	1362.5	82.85%	342	1758.5	79.56%
土師器	小甕				2	3	0.18%	2	72	3.26%
煮炊具　計					2	3	0.18%	2	72	3.26%
須恵器	壺（壺 G）							1	6	0.27%
	瓶									
	壺または瓶				1	1.5	0.09%	1	7	0.32%
	瓶または甕				1	3	0.18%			
	甕				2	32.5	1.98%	−	−	
	壺または甕							2	7	0.32%
貯蔵具　計					4	37	2.25%	4	20	0.91%
製塩土器　計		73	78.5	16.54%	237	242	14.72%	119	359.5	16.27%
合　計		253	474.5	100.00%	755	1644.5	100.00%	467	2210	100.00%

第 7 表　古代の土器　器種構成比率

2009］とのことで、その様相は若干異なるようである。

B　弥生時代～古墳時代の土器

次に、弥生時代～古墳時代の土器の編年的位置付けについて見てみたい。包含層からの出土が多いことから、器種ごとに様相を述べる。時期区分については［滝沢 2005・2011・2014］を参考とし、呼び方については普遍的に使用されている漆町編年［田嶋 1986］□群併行 = □期とする。

甕で全形がわかるものは 4 個体のみである。口縁端部が丸く（A3 類）、球胴を呈する 116、長胴を呈し底部内面調整が粗雑な 90 は 12 期前後と判断できる。ほかの A3 類については口縁部のみであるため断定はできないが、同時期に属するものが多数を占めると推測される。ただし 92 は器形から 8 ～ 9 期と考えられる。A1 類、A2 類については 8 ～ 9 期の可能性が高い。B 類は弥生時代後期の 2 期と考えられる。小型甕については変遷が明確でないため時期の確定はできないが、91 は古墳時代前期（以下、前期とする）の可能性が高いと考える。

甕の口縁部形態について集計したものが第 9 表である。A3 類が圧倒的に多い。06 年調査区では A1 類が最も多く A2 類・A3 類とも比較的拮抗しており、様相が異なる [1)]。06 年調査区では 8 ～ 9 期が主体で古墳時代中期（以下、中期とする）に位置付けられる土器は認められない。A3 類自体は弥生時代から続く口縁部形態であるが、器形等の特徴から 07 年調査区の資料の大多数は 12 期前後と考えられ、新しい様相を示す。

器種	破片数	口縁残存率 /36	口縁部比率	破片数	底部残存率 /36	底部比率
甕	254	700	59.40%	54	1140	57.20%
壺	34	251	21.30%	14	380	19.07%
壺か甕	2	8	0.68%	13	205	10.29%
鉢	8	69	5.85%	4	71	3.56%
高杯	10	53.5	4.54%	17	110	5.52%
器台	7	94.5	8.02%	5	59.5	2.98%
高杯か器台				6	27.5	1.38%
甑	1	2.5	0.21%			
計	316	1178.5	100.00%	113	1993	100.00%

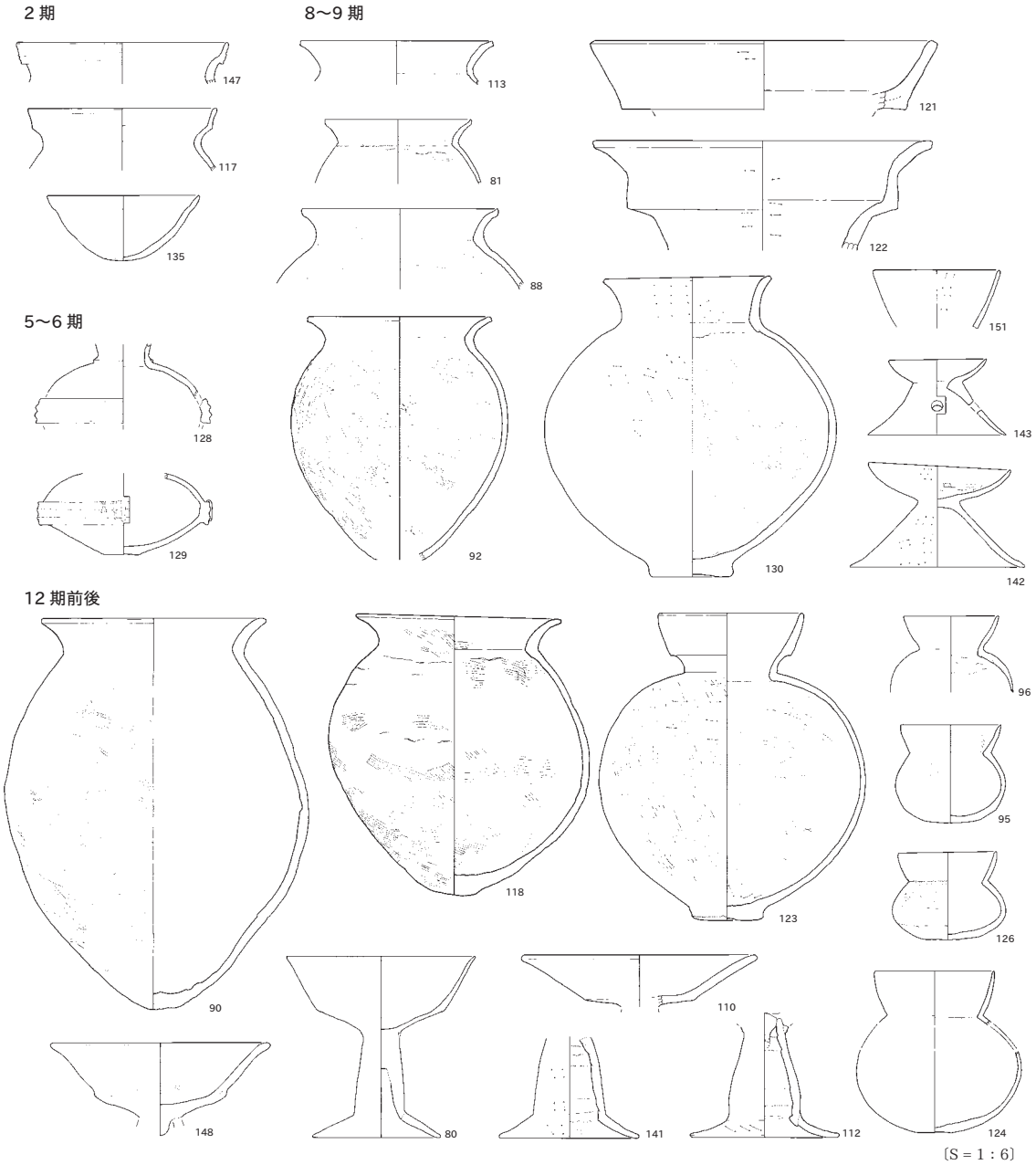
*No.151・152 は 06 年調査区出土となることからここには含まない。

第 8 表　古墳時代の土器　器種構成比率

分類	破片数	残存率 /36	比率
A1 類	29	78.5	11.2%
A2 類	35	122.0	17.4%
A3 類	180	478.5	68.4%
B 類	5	15.0	2.1%
分類不可	5	6.0	0.9%
計	254	700.0	100.0%

第 9 表　甕の口縁部形態比率

1）06 年調査区ではブロック（遺物集中区）ごとに比率を示しており、ブロックによって様相は異なるが、全体的に A1 類が優位という状況は変わらない。なお、06 年の比率の算出は破片数による。



第 18 図　弥生時代〜古墳時代の土器

壺で特徴的なのは小型丸底のものが目立つことである。胴部最大径 10cm 程度と 14cm、2 タイプの法量が認められる。形態は口縁部が内湾し直立気味のもの（95・126 など）（滝沢 2014 の I 類）と口縁部が開き球胴になると思われるもの（96）（同 H 類）、畿内系小型丸底坩の可能性があるもの（151）が存在する。151 は前期の可能性が高いが、それ以外のものは 12 期前後であろう。二重口縁壺のうち 136・137 は段が明瞭であることから、8 〜 9 期に位置づけられる。123 は段が不明瞭で内湾口縁を持つことから中期と判断できる。広口壺（127・130）や、長い口縁部を持ち、球胴を呈すると推測される 149 は前期の可能性が高い。また、前期でも 5 〜 6 期の資料として 128・129 の細頸装飾壺がある。102 は時期の特定が困難である。肩部に把手の痕跡があるが、把手を有する例は現在のところ認められない。

高杯は、脚部のうち器形が判断できるものは大多数が屈折脚で、ハの字形はわずかである。杯部は口縁部が大きく開き身の浅いもの（98・110）と、やや身の深いもの（109・120 等）が存在する。いずれも 12

期前後に位置づけられよう。その中でも 80 は脚部の膨らみが少なくやや古い様相を呈し、11 期[1] に属する可能性が高い。

鉢は出土数が少なく、判別できるものは可能な限り図化したが、掲載した 4 点ともそれぞれ器形が異なる。135 は口縁部にわずかな段を有し身が浅いものであるが、2 期に類例がある［滝沢 2010］。97 も同時期の可能性がある。134 は有段口縁を呈する鉢であるが、台が付くものは珍しい。鉢部分の器形から前期に属するものと推測できる。136 も 134 と同時期と考えられる。

器台も数が少ない。すべて前期に属するものと判断できる。そのなかでも受部径が大きめの 142 は古相を呈し、144 は 8 期、台部分が寸詰まり傾向の 143 はそれより新しく 9 ～ 10 期に位置付けられる。なお、透かしについてはほとんど認められず、図化した個体のほかに数点認められる程度である。

甑は 1 点のみの出土である。中期でも新しい段階になると見られるものであるが、最も古い例として胎内市天野遺跡例が 13 期に位置づけられている［滝沢 2014］。1 例のみであり位置付けにはやや不安を残すが、13 期以降としておきたい。ちなみに、07 年調査区からは古墳時代の杯･椀は全く出土していない。

これらをまとめると、2 期：有段口縁甕・鉢、5 ～ 6 期：細頸装飾壺・（甕）、8 ～ 9 期：甕・壺（二重口縁壺・広口壺・畿内系小型丸底坩か）・器台、12 期前後：甕・壺（二重口縁壺・小型丸底系）・高杯（屈折脚）があり、出土量は 12 期前後が最も多く、8 ～ 9 期が定量、2 期と 5 ～ 6 期はわずかという結果になった。なお、いずれの時期もすべての器種が揃うことはなく、器種構成が不明である。

以上のことから、06 年調査区では弥生時代後期と古墳時代前期（8 ～ 9 期）・後期の資料が出土していたが、07 年の調査により、8 ～ 9 期と 12 期前後を主体として弥生時代後期から古墳時代後期まで断続的に続くことが明らかになった。

2　玉作について

糸魚川地域では玉の素材となる石（ヒスイ・蛇紋岩・滑石など）が豊富にあることから、古来玉作が盛んであった。古墳時代においては、発掘された遺跡の多くから玉作に関連する遺物が出土していることが特徴的である。07 年調査区からは棗玉を主体として臼玉･勾玉の未成品･成品が出土した。

本遺跡の 2km ほど西に位置する南押上遺跡では玉作関連遺物が多量に出土し、勾玉・管玉・棗玉の成品・未成品については工程分類が行われている。なかでも、全国的にも希少といわれる棗玉の

	蛇紋岩		滑石		ヒスイ		合計		06 調査出土点数	備　考
	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）		
棗玉　多角柱研磨	19	17.46	2	3.34			21	20.80		
穿孔途中	15	13.99					15	13.99	3	うち 7+2 点割れ
穿孔後整形	4	2.07					4	2.07	2	うち全点割れ
小　計	38	33.52	2	3.34			40	36.86	5	
臼玉　多角柱研磨	1	0.38					1	0.38	1	
穿孔途中	1	0.58					1	0.58		
穿孔後整形	2	0.62	11	2.26			13	2.88		うち 10 点割れ
完成品			1	0.12			1	0.12		
小　計	4	1.58	12	2.38			16	3.96	1	
勾玉　調整剥離～研磨									2	
研磨（半月形）	3	4.83					3	4.83		
内磨（逆Ｃ字形）			1	0.65	1	3.51	2	4.16		
完成品									1	
小　計	3	4.83	1	0.65	1	3.51	5	8.99	3	
管玉　穿孔途中									1	
完成品									1	
小　計									2	
垂玉　穿孔後整形									1	
分割・剥片	6	82.04	2	62.32	8	137.66	16	282.02	363	
砕　片	－	234.54					－	234.54		
原　石					7	218.82	7	218.82	7	
合　計	51	356.51	17	68.69	16	359.99	84	785.19	382	

* 備考　例：3+2=07 年調査区 +06 年調査区の点数
分割・剥片：06 年調査区では剥片類とされているもので、砕片を含む可能性がある。

第 10 表　玉作関連遺物の集計

1）以前は12期から中期という考え方が主流であったが、近年、11期を大きな画期としてとらえる動きがあり［田嶋 2009 など］、最近は 11 期から中期とする論文が多いようである。本書でも滝沢［2011･2014］の分類と編年案に準じていることから、11 期で区分している。

製作工程品が100点近く出土している。第Ⅴ章で述べたように、本遺跡とはかなり様相が近似していることから、南押上分類［水落2011］を参考として本遺跡出土資料をみてみたい。

棗　　玉

第１工程：原石採集・素材の獲得段階　拳大程度の大型剥片が相当する。本遺跡では出土していない。

第２工程：荒割段階　大型の剥片から小型の剥片を剥離する。長さ4cm程度の剥片３点、2cm弱の剥片が２点出土しているのみである。

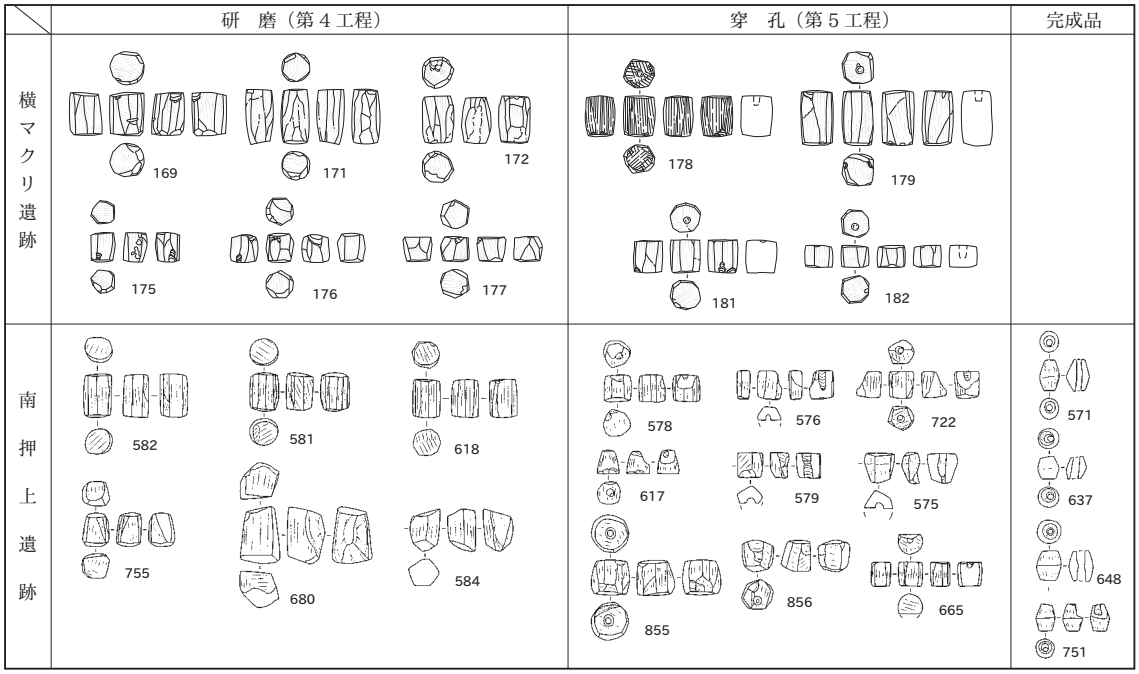
第３工程：調整剥離段階　手ごろな大きさの剥片に剥離を加えて寸胴な形に成形する段階。軟質な石材を利用しているため、管玉の側面調整のような剥離は認められないが、南押上遺跡では次工程の研磨段階に二次的な剥離痕を有する個体があり、この段階の存在を認めている。本遺跡では出土していない。

第４工程：多角柱研磨段階　寸胴に成形された剥片に研磨を施し、多角柱に整形する段階。中には、断面がほぼ円形になる程度に研磨し、稜が不明瞭なものもある（171など）。樽形を志向しているとわかる個体は多いが、その度合いはわずかで、明らかに胴部中央が張る形態のものは認められない。

第５工程：穿孔段階　すべて両面穿孔で行われている[1)]。本遺跡で出土しているのは、片面から穿孔が開始されたばかりでそれほど進んでいない段階のもの、穿孔途中で破損したものが多数である。

第６工程：仕上げ段階　穿孔された資料をさらに研磨して整形し、縦長の偏球状に仕上げる段階。５点出土したがすべて割れており、縦方向に、孔を中心として二分された状態である。本遺跡では成品に近い形態のものは出土しておらず、前段階と同じ形態であることから、穿孔後早い段階、あるいは穿孔直後に割れたと推測でき、厳密には第６工程とすべきではないかもしれない。

本遺跡では第１・３工程が出土しておらず、第２工程も剥片が数点認められるのみで、主に第４・５工程と砕片のみの出土である。完成品は遺跡外へ持ち出されたと考えられることから不自然ではない。また、



〔S＝1：2〕

第19図　棗玉の製作工程

1）06年調査区において１点両面穿孔とされているものがあるが(報告番号192)、実見したところ回転痕は不明瞭であった。片面穿孔とは断定できないため、両面穿孔である可能性もある。

砕片の出土量がある程度認められることから、第２工程以降の作業も遺跡内で行われていた可能性がある。第１工程の原石・大型剥片が全く出土しなかったのは、調査範囲外には存在しているがたまたま出土していないか、もしくは第２工程の剥片の状態で遺跡に持ち込まれたかという理由が考えられる。南押上遺跡では原石以外の種類、第１工程から完成品まで揃っている。想像を逞しくすれば、南押上遺跡が最初から最後までの工程を行う大規模な工房だとすれば、横マクリ遺跡は研磨・仕上げのみを行う小さな工房であったのかもしれない。

勾　　玉

半月形に成形して全体を研磨する段階（南押上第５工程）と、次段階の腹部に抉りを作出する段階（南押上第６工程）のものが計５点出土しているのみである。石材は蛇紋岩・ヒスイ・滑石の３種類がある。出土量の多い南押上遺跡でも、ヒスイ以外の石材については第１～第４工程は明らかになっていない。これについては「軟質素材の特徴を活かし、研磨作業に重きを置いている可能性が高い」とし、おそらくヒスイ同様に原石→荒割→形割（三角形状）→調整剥離、という工程を経ているのではないかと推測している。

臼　　玉

臼玉の未成品は南押上遺跡では出土しておらず、類例は近隣の姫御前遺跡で確認できる。棗玉同様、初段階の工程は不明である。滑石製のものについては、186 ～ 188 は扁平な素材を作出し剥離等により成形する段階のもので、平面形は不整形または正方形であるが、既に穿孔されている。姫御前遺跡では、周囲の形状を円形に仕上げてから穿孔する例が多いが、平面正方形の素材に穿孔する例も認められ、必ずしも画一的な製作過程をたどらない可能性があることが指摘されている[加藤ほか2008]。本遺跡においても、図化していない個体のうち、円形に近いと思われる未成品（破損のため全形は不明）が２点ほど存在することから、姫御前遺跡とほぼ同じ様相であると判断できる。蛇紋岩製のものについては姫御前遺跡でも出土しておらず、現在のところ本遺跡のみである。06 年調査区でも多角柱研磨段階のものが１点出土している（報告番号 219）。研磨・穿孔段階のみであることから工程は不明であるが、石材を同じくする棗玉と同様ではないかと推測している。なお、182 ～ 184 は便宜的に臼玉と分類したが厚みもあり、前出の姫御前遺跡で算盤玉や平玉が出土していることから、それらの未成品である可能性も否定できない。

管　　玉

07 年調査区では出土しなかったが、06 年調査区において穿孔途中の段階のものが１点（南押上分類の緑色凝灰岩 B）、完成品が１点（滑石製）出土している。南押上遺跡では管玉の石材は緑色凝灰岩に限定されており、06 年調査区でも緑色凝灰岩の石核・剥片が少数であるが認められることから、本遺跡でも管玉製作が行われていた可能性も考えられる。

最後に、玉の種類と石材との関係について少し触れておきたい。第 10 表で示されるように、種類ごとに主体となる石材が異なる。近隣の遺跡と合わせて見てみると、棗玉は蛇紋岩（主体）・滑石（少）、臼玉は滑石（主体）・蛇紋岩（僅か）、管玉は緑色凝灰岩（多）・滑石（少）という傾向がうかがえる。しかし勾玉については突出して使用される石材は認められず、滑石・蛇紋岩・ヒスイに加えてメノウ・石英岩など多様な石材が使用されているのが興味深いところである。時代・時期あるいは地域によって異なるものと思われるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

引用・参考文献

荒川隆史ほか 2004　『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

安藤文一ほか 1978　『笛吹田遺跡』 新潟県糸魚川市教育委員会

糸魚川市史編さん委員会　1986 『糸魚川市史 資料集１－考古編』 新潟県糸魚川市役所

伊東隆夫・山田昌久編　2012 『木の考古学－出土木製品用材データベース』 海青社

上田秀夫　1982　「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会

春日真実　1997　「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号　北陸古代土器研究会

春日真実　1998　「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』第 2 号　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999　「第 4 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編　高志書院

春日真実ほか 2008　『六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 202 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実ほか 2012　『山岸遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 228 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　1999　「第Ⅴ章 1 遺構」『和泉 A 遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学ほか 2006　『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 173 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学ほか 2008　『姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 184 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学ほか 2011　『姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 207 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男　1975　「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1　信濃史学会

木島　勉ほか 1986　『後生山遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告 13　新潟県糸魚川市教育委員会

木島　勉　1989　『立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市埋蔵文化財調査報告 16　新潟県糸魚川市教育委員会

木島　勉　2007　「山崎 A・B 遺跡」『第 14 回遺跡発掘調査報告会資料』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池勝典ほか 2011　『南押上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 220 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小林巖雄　2000　「Ⅰ 概説 2 地質概説」『新潟県地質説明書（2000 年度版）』 新潟県商工労働部商工振興課

坂井秀弥ほか 1986　『一之口遺跡西地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 40 集　新潟県教育委員会

佐藤友子ほか 2009　『田伏山崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 205 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

椙山林継　1972　「神坂峠」『神道考古学講座 5 祭祀遺跡特説』 雄山閣

鈴木郁夫　1982　「Ⅰ 地形分類図 1 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』 新潟県農地部総合整備課

鈴木郁夫　2000　「Ⅰ 概説 1 地形概説」『新潟県地質説明書（2000 年度版）』 新潟県商工労働部商工振興課

鈴木俊成ほか 1988　『小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 51 集　新潟県教育委員会

鈴木俊成ほか 1994　『一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 60 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

関　雅之　1972　『田伏玉作遺跡』 新潟県糸魚川市教育委員会

高橋　保　1988　『立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 49 集　新潟県教育委員会

滝沢規朗　2005　「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第 1 分冊　新潟県考古学会

滝沢規朗　2010　「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第８号　奥三面を考える会
滝沢規朗　2011　「阿賀北における古墳時代前期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面川流域の考古学』第９号　奥三面を考える会
滝沢規朗　2012　「阿賀北における古墳時代前期の土器について（下）－細別器種毎の変遷について－」『三面川流域の考古学』第 10 号　奥三面を考える会
滝沢規朗　2014　「新潟県における古墳時代中期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面川流域の考古学』第 12 号　奥三面を考える会
田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2008　「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その 1)」『石川県埋蔵文化財情報』第 20 号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2009a　「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その 2)」『石川県埋蔵文化財情報』第 21 号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2009b　「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その 3)」『石川県埋蔵文化財情報』第 22 号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
田中　靖　1995　『門新遺跡』和島村文化財調査報告書第４集　和島村（現長岡市）教育委員会
土田孝雄　1978　「第２章　調査の経過　1　発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』　新潟県糸魚川市教育委員会
土田孝雄ほか 1988　『須沢角地Ａ遺跡発掘調査報告書』　新潟県青海町教育委員会
土田孝雄　1991　「加賀街道　第Ⅱ章１・2」『加賀街道・松本街道』　新潟県歴史の道調査報告書第１集　新潟県教育委員会
寺﨑裕助ほか 1988　『原山遺跡　大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 50 集　新潟県教育委員会
寺村光晴　1966　『古代玉作の研究』　吉川弘文館
寺村光晴・安藤文一ほか　1979　『大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房址－』　新潟県青海町教育委員会
長澤展生ほか 2009　『角地田遺跡・平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 191 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
奈良国立文化財研究所　1985　『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所　史料第 27 冊
奈良国立文化財研究所　1993　『木器集成図録　近畿原始篇』　奈良国立文化財研究所　史料第 36 冊
平野団三・渡辺秀雄　1968　「西頸城郡」『日本歴史地名大系 15　新潟県の地名』　平凡社
水落雅明　2011　「第Ⅴ章 2D　石器・石製品」「第Ⅶ章２　南押上遺跡における古墳時代前期の玉作について」『南押上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 220 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
水澤幸一　2005　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
水澤幸一ほか 2009　『天野遺跡３次・４次』胎内市埋蔵文化財調査報告第 16 集　胎内市教育委員会
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会
山岸洋一・田村公一　2004　『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川文化財調査報告 47　新潟県糸魚川市教育委員会
山岸洋一　2005　『平成 16 年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書 49　新潟県糸魚川市教育委員会
山岸洋一　2006　『平成 17 年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書 53　新潟県糸魚川市教育委員会
山本信夫　2000　『大宰府坊城跡ⅩⅤ－陶磁器分類編』太宰府市の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
和田晴吾　1985　「7　漁猟具　1　土錘・石錘」『弥生文化の研究』第５巻　道具と技術Ⅰ　金関　恕・佐原　真編　雄山閣
渡邊裕之ほか 2008　『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 188 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

横マクリ遺跡　遺構観察表（1）

凡例：

断面形 … *は底面に凹凸が見られるもの
規模 …（　）は推定値
出土遺物 … 土：古代の土師器、黒：黒色土器、製塩：製塩土器、古墳：古墳時代の土器、木：木製品
多く出土したものから記載した。
切り合い関係 … 新＞旧

グリッド	遺構番号	検出層位	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係	備　考
33O/34O	河川1	V	－	弧状	－	252～456	104	7.10	レンズ状	古代	製塩・土無台椀・土有台椀・土小皿・黒無台椀・黒椀・土小甕２点、古墳甕、木		
34N, O	河川2	V	－	弧状	－	152～262	75	7.23	レンズ状	古代	古墳甕・壺・土無台椀・（製塩片）、木		板杭検出
34N, O/35O	河川3	V	－	弧状	－	82～238	43	7.09	レンズ状	古代	古墳甕・土無台椀・（製塩片）、木		
35N, O/36N, O	河川4	V	－	弧状、一部半円状	－	308～904	28	6.42	レンズ状	古代	古墳甕・高杯、（土無台椀片・製塩片）、木		落ち込み部分深さ71cm
36N, O	河川5	Va	－	弧状	－	70～584	13	6.84	単層	古代	古墳甕・高杯・壺		
37M, N/38M, N, O	河川6	Va	－	弧状	－	212～844	89	6.09	レンズ状	古代	古墳甕・高杯・壺、須有台杯・無台杯、土無台椀、木		
36N20/37N16	SX2	Va	不整形	弧状	185	68	7	6.93	単層	古代	古墳甕		
37N17, 18, 23	SX3	Va	不整形	弧状*	246	88	8	6.88	単層	古代			
38N2, 3, 7～9, 12～14	SX4	V	不整形	弧状*	340	539	12	6.75	単層	古代	古墳甕・高杯、土無台椀、木	>SX101	
39N7	P9	Va	楕円形か	U字状	（30）	23	（24）	6.48	水平	古代か	古墳甕1点		
35N17～20	SD10	Vb	－	弧状	－	13～58	（17）	7.25	単層	古代			河川4内
38M22	杭11	Va	－	－	－	－	（21）	6.40	－	中世か			
38M23	杭12	Va	－	－	－	－	（9）	6.97	－	中世か			
38M23	杭13	Va	－	－	－	－	（19）	6.87	－	中世か			
38M23	杭14	Va	－	－	－	－	（7）	7.00	－	中世か			
38M23	杭15	Va	－	－	－	－	（13）	6.92	－	中世か			
38M23	杭16	Va	－	－	－	－	（5）	7.02	－	中世か			
38M23	杭17	Va	－	－	－	－	（5）	7.00	－	中世か			
38M23	杭18	Va	－	－	－	－	（16）	6.90	－	中世か			
38M23	杭19	Va	－	－	－	－	（22）	6.83	－	中世か			
38M24	杭20	Va	－	－	－	－	（11）	6.94	－	中世か			
38M24	杭21	Va	－	－	－	－	（5）	6.99	－	中世か			
38N12	杭22	Vb	－	－	－	－	（26）	6.56	－	中世か			
37N5	杭23	VIa	－	－	－	－	（43）	6.45	－				
37O7	杭24	IVb	－	－	－	－	（23）	6.67	－	中世			
37O7	杭25	IVb	－	－	－	－	（5）	6.81	－	中世			
37O7	杭26	IVb	－	－	－	－	（17）	6.84	－	中世			
37O7	杭27	Va	－	－	－	－	（6）	6.87	－	中世か			
37O8	杭28	Va	－	－	－	－	（24）	6.63	－	中世か			
37O8	杭29	Va	－	－	－	－	（7）	6.81	－	中世か			
37O8	杭30	Va	－	－	－	－	（16）	6.71	－	中世か			
37O8	杭31	Va	－	－	－	－	（17）	6.71	－	中世か			
37O8	杭32	Va	－	－	－	－	（5）	6.82	－	中世か			
37O8	杭33	Va	－	－	－	－	（21）	6.69	－	中世か			
37O8	杭34	Va	－	－	－	－	（13）	6.72	－	中世か			
37O9	杭35	Va	－	－	－	－	（21）	6.62	－	中世か			
37O9	杭36	Va	－	－	－	－	（15）	6.69	－	中世か			
37O12	杭37	Va	－	－	－	－	（14）	6.69	－	中世か			
37O12	杭38	Va	－	－	－	－	（11）	6.72	－	中世か			
37O12	杭39	IVb	－	－	－	－	（33）	6.46	－	中世			
37O12	杭40	Va	－	－	－	－	（19）	6.59	－	中世か			
37O12	杭41	Va	－	－	－	－	（23）	6.56	－	中世か			
37O13	杭42	Va	－	－	－	－	（63）	6.14	－	中世か			
35N21	杭43	Va	－	－	－	－	（19）	7.40	－	中世か			
36O13	杭44	Va	－	－	－	－	（38）	6.54	－	中世か			
37N2	杭45	Va	－	－	－	－	（23）	6.94	－	中世か			
35N17	杭46	Va	－	－	－	－	（31）	7.12	－	中世か			
38O1	杭47	IVb	－	－	－	－	（8）	6.68	－	中世			
39N24/39O4	杭48	IVb	－	－	－	－	（25）	6.49	－	中世			
39N24	杭49	IVb	－	－	－	－	（29）	6.42	－	中世			
34N21	杭50	河川1	－	－	－	－	（53）	7.69	－	中世			河川1内
34N21	杭51	河川1	－	－	－	－	（63）	7.64	－	中世			河川1内
36N/37N, O	河川7	VIa	－	弧状	－	308	26	6.44	レンズ状	古墳	古墳甕・高杯・壺・鉢	>SX102・107、SD151	
38N2, 7, 8, 12, 13	SX101	VIa	不整形	弧状*	384	130	11	6.56	単層	古墳		<SX4	
38N, O/39N, O	SX102	VIa	不整形	弧状	－	348	16	6.45	レンズ状	古墳	古墳甕・高杯・壺・鉢・器台？		
38N8, 9, 12, 13	SX102b	VIa	不整形	弧状	264以上	257	44	6.31	レンズ状	古墳	古墳甕　1点		
38N8, 9	SX102c	VIa	不整形	台形状	59	53	35	5.94	単層	古墳			
38O4	SX103		楕円形	弧状	111	66	6	6.45	単層	古墳	古墳甕　1点		
39O2, 3, 7, 8	SX105	VIa	不整形	弧状*	140	90以上	21	6.30	単層	古墳	古墳甕		
39N23/39O3, 4	SX106	VIa	不整形	弧状*	256以上	210	19	6.26	単層	古墳	古墳甕・高杯か器台		
37N19, 20, 25	SX107	VIa	不整形	弧状	150	136	19	6.45	単層	古墳			

横マクリ遺跡　遺構観察表（2）

グリッド	遺構番号	検出層位	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係	備　考
37N22	P108	Ⅵa	円形	U字状	（22）	20	21	6.62	単層	古墳			
37O11	P109	Ⅵa	円形	U字状	19	19	25	6.45	斜位	古墳			
37O11	P110	Ⅵa	楕円形	半円状	18	14	11	6.64	単層	古墳	古墳甕1点		
37N21	P115	Ⅵa	円形	U字状	18	16	16	6.61	単層	古墳	古墳甕1点		
36N25/36O4, 5, 9, 10/37O1, 6	SX119	Ⅵa	不整形	弧状*	340	311	13	6.73	単層	古墳	古墳甕1点		
36O10, 13, 14, 15, 19, 20	SX120	Ⅵa	不整形	弧状	397	（189）	16	6.62	単層	古墳	古墳甕		
36O13, 14	P121	Ⅵa	円形	U字状	22	20	38	6.45	水平	古墳			
36O9	P123	Ⅵa	円形	U字状か	29	25	32	6.54	水平か	古墳			
36O9	P124	Ⅵa	楕円形	U字状	23	16	33	6.52	レンズ状	古墳			
36O4	P126	Ⅵa	円形	U字状	19	17	20	6.68	単層	古墳			
36N24	P128	Ⅵa	円形	U字状	（22）	20	20	6.77	単層	古墳			
36N23, 24	SK130		楕円形	台形状	60	45	14	6.70	単層	古墳			
36O2, 7	P133	Ⅵa	円形	U字状	22	20	23	6.66	単層	古墳			
36O1	P134	Ⅵa	円形	U字状	18	17	23	6.73	単層	古墳			
36O1	P135	Ⅵa	円形	U字状	23	20	22	6.76	レンズ状	古墳			
36O1	P136	Ⅵa	楕円形	U字状	18	12	19	6.81	単層	古墳			
36N22	P137	Ⅴb	円形	U字状	22	19	27	6.78	単層				
36N22	P138	Ⅵa	円形	U字状	（17）	15	15	6.75	単層	古墳			
36N12	P141	Ⅵa	円形	半円状	22	20	14	6.91	レンズ状	古墳			
36N12	P142	Ⅵa	円形	半円状	22	21	20	6.91	単層	古墳			
36N9	P145	Ⅵa	円形	U字状	26	24	45	6.56	柱痕	古墳			
36N9	P146	Ⅵa	円形	半円状	18	18	15	6.87	単層	古墳			
35N25	P149	Ⅵa	円形	U字状	20	18	19	6.91	水平	古墳			
37M25/ 38M16, 17, 21	SD151	Ⅵa	－	弧状	－	33～78	10	6.66	単層	古墳			
36O12, 16, 17, 18	SX152	Ⅵa	不整形	弧状*	（235）	131	13	6.77	単層	古墳			
39N22	P153	Ⅴbか	円形か	U字状	（25）	24	27	6.41	単層				

土器・陶磁器観察表（1）

凡例：
法量：*＝推定径、－＝残存するが径不明　　調整・文様・使用痕 , 付着物：外＝外面、内＝内面、口＝口縁部、体＝体部、底＝底部
混入物：多く含まれるものから記載した。礫＝礫・砂、長＝長石、石＝石英、白＝白色粒、金＝金雲母、黒＝黒雲母　（小）＝全体的に粒径が小さい（概ね径 1mm 程度）
（僅）／（少）／（多）＝全体的に量がわずか／少ない／多い

報告番号	分類		出土位置			法量（cm）				調整	文様	胎　土 上段：外面・釉 下段：内面・地	混入物	使用痕, 付着物	備考
	種別	器種	グリッド	遺構番号	層位	口径	器高	底径	体最大径						
1	土師器	無台椀	34P1	河川1	中～下層	11.1	3.3	5.2		ロクロナデ 底：回転糸切り		10YR5/3 にぶい黄褐 7.5YR5/4 にぶい褐	礫, 長, 石, 黒		Ⅶ1～2期
2	土師器	無台椀	34O11	河川1	中層	11.8	4.5	5.2		ロクロナデ 底：回転糸切り		5YR7/6 橙 5YR6/6 橙	礫, 白, 金		Ⅶ1～2期　器面摩耗
3	土師器	無台椀	34O17	河川1	中層	12.3	3.3～4.5	5.2		ロクロナデ 底：回転糸切り右		7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙	礫, 長(小, 少)	口：タール? 内外炭化物	Ⅶ1～2期　歪み著しい
4	土師器	無台椀	33O25	河川1	中～下層	12.7	3.7	5.4		ロクロナデ 摩耗著しい		7.5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	礫, 石		Ⅶ1～2期　器面摩耗
5	土師器	無台椀	33O25	河川1	中～下層	12.8	3.3	6.9		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/6 明黄褐	礫(多)		Ⅶ1～2期　器面摩耗
6	土師器	無台椀	33O25	河川1	中層	12.9	3.9	6.0		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長	内：黒斑	Ⅷ期
7	黒色土器	有台椀	33O25	河川1	中層	14.4		7.5*		外：ロクロナデ 内：ミガキ		10YR6/3 にぶい黄橙 2.5Y2/1 黒	礫(小)	口外, 内：黒化	Ⅶ1～2期
8	製塩土器		34O6	河川1	中層	－				内：ナデ		7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR6/4 にぶい橙	礫, 白		
9	製塩土器		34O6	河川1	中層	－				内：ナデ		10YR5/4 にぶい黄褐 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
10	製塩土器		33O20	河川1	中層			－		ナデ		5YR6/4 にぶい橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
11	土師器	無台椀	34P1 33O4	河川1 Ⅳ	下層	16.3	4.0	7.6		ロクロナデ 底：回転糸切り右		7.5YR7/4 にぶい橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長, 白		Ⅴ期
12	土師器	無台椀	33O5	河川1	下層	13.5	3.9	6.2		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR5/4 にぶい黄褐 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 金?		Ⅴ期
13	土師器	無台椀	33O15	河川1	下層	13.6	4.8	5.6		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 石, チャ?		Ⅶ1～2期
14	土師器	無台椀	34O11, 16 34O16	河川1 Ⅳb	下層	14.4	4.4	5.2		ロクロナデ 摩耗著しい		7.5YR4/3 褐 7.5YR4/4 褐	礫, 長, 石, 金	口外：スス	Ⅶ1～2期　器面剥落
15	土師器	無台椀	33O20	河川1	下層	11.7	3.6	5.7		ロクロナデ 底：回転糸切り		5YR6/4 にぶい橙 2.5YR6/4 にぶい橙	礫, 白, 金		Ⅶ1～2期
16	土師器	無台椀	33O5	河川1	下層	11.7	4.0	5.2		ロクロナデ 底：回転糸切り		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 白		Ⅶ1～2期
17	土師器	無台椀	34O17	河川1	下層	12.3	3.6	5.8		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/8 黄褐	礫, 長, 黒		Ⅶ1～2期
18	土師器	無台椀	33O5	河川1	下層	12.4	4.2	5.8		ロクロナデ 底：回転糸切り右?		7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	礫, 長		Ⅶ1～2期
19	土師器	無台椀	33O25	河川1	下層	12.5	4.1	5.7		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 白, 金		Ⅶ1～2期
20	土師器	無台椀	34O21・34P1	河川1	下層	12.6	4.1	6.2		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄褐	白, 礫, 長	内：黒色付着物	Ⅶ1～2期
21	土師器	無台椀	34O11ウ	河川1	下層	12.9	4.0	5.8		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR6/4 にぶい黄橙 10YR5/8 黄褐	礫, 長, 金		Ⅶ1～2期
22	土師器	無台椀	33O15, 20	河川1	下層	12.9	4.0	5.2		ロクロナデ 底：回転糸切り右		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄褐	礫, 石, 長, 白	口内：スス	Ⅶ1～2期

土器・陶磁器観察表（2）

報告番号	分類		出土位置			法量（cm）				調整	文様	胎　土 上段：外面・釉 下段：内面・地	混入物	使用痕，付着物	備考
	種別	器種	グリッド	遺構番号	層位	口径	器高	底径	体最大径						
23	須恵器	甕	33O20ィ・34O16	河川1	下層	20.7				口：ロクロナデ 体外：平行タタキ 体内：同心円タタキ		N6/0 灰 10Y6/1 灰	白		Ⅴ期
24	須恵器	甕か	33O20ィ	河川1	下層	24.4*				ロクロナデ		N5/0 灰 N7/0 灰	白		Ⅴ期
25	須恵器	瓶	34O16	河川1	下層					ロクロナデ		N4/0 灰 N6/0 灰	白		
26	須恵器	長頸瓶	33O20	河川1	下層			5.1	6.6	ロクロナデ 底：回転糸切り 内：凹凸顕著		N4/0 灰 N3/0 暗灰	白	降灰	Ⅳ3期　搬入品
27	須恵器	壺または瓶	34O16	河川1	下層			10.8		ロクロナデ		N3/0 暗灰 10Y7/1 灰白	礫(少)		Ⅵ～Ⅶ期
28	製塩土器		33O15	河川1	下層			－		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	礫, 長, 石, 金		
29	須恵器	無台杯	38N16ゥ	河川6	2層	12.3	3.8	7.5		ロクロナデ底：回転糸切り右		5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	長, 礫(小)	底外：墨書	Ⅳ3期
30	須恵器	有台杯	38N12ゥ	河川6	2層	10.8	3.8	6.2		ロクロナデ		5Y6/1 灰 7.5Y5/1 灰	礫, 白	底外：墨書	Ⅴ期
31	須恵器	壺または瓶	33O20		土石流	32.2*				ロクロナデ		N6/0 灰 N3/0 暗灰	石		
32	土師器	柱状高台皿	34O6		土石流			4.1		ロクロナデ		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長, 金		Ⅷ期
33	灰釉陶器	椀	34O12		土石流			7.0		ロクロナデ		2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	(緻密)		Ⅶ1～2期　底部打欠か
34	製塩土器		33O10		土石流	－				内：ナデ		7.5YR5/6 明褐 7.5YR6/6 橙	礫, 長, 金		
35	製塩土器		33O10		土石流			－		底外：ハケ 内：剥落により不明		7.5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	礫, 長		
36	製塩土器		33O15		土石流			－		外：ナデ 内：剥落により不明		10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
37	土師器	無台椀	34O2, 7		Ⅳb	16.3	4.7	7.4		ロクロナデ 底：回転糸切り右		7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	礫, 白		Ⅴ期
38	土師器	有台椀	34O7		Ⅳb			6.7		ロクロナデ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫(小)		Ⅷ期
39	製塩土器		34O22		Ⅳb	－				内：ナデ		2.5Y4/3 オリーブ褐 2.5Y6/4 にぶい黄	礫, 長, 金		
40	製塩土器		34O11		Ⅳb	－				内：ナデ		7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	礫, 長, 金		
41	製塩土器		34O12		Ⅳb	－				内：ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
42	製塩土器		34O18		Ⅳb			－		内：ナデ 底外：ハケ		10YR5/3 にぶい黄褐 2.5YR5/6 明赤褐	礫, 長		
43	製塩土器		34O7		Ⅳb			－		底外：ハケ		7.5YR5/3 にぶい褐 5YR6/3 にぶい橙	礫, 長, 金		
44	製塩土器		34O11		Ⅳb			－		ナデ		7.5YR7/3 にぶい橙 5YR6/3 にぶい橙	礫, 長		
45	製塩土器		35M19		Ⅳb			－		ナデ		10YR5/4 にぶい黄褐 5YR5/4 にぶい赤褐	礫, 長, 金		
46	土師器	小甕	34O23		Ⅳ			5.9		ロクロナデ 底：回転ヘラ切り右		10YR5/6 黄褐 10YR6/6 明黄褐	礫, 長	内外：一部スス, タール?	
47	黒色土器	有台椀	34O22		Ⅳ			7.0		ロクロナデ		10YR6/4 にぶい黄橙 2.5Y3/1 黒褐	礫, 長		Ⅶ1～2期
48	土師器	有台椀	34O18		Ⅳ			7.0		ロクロナデ		7.5YR7/6 橙 7.5YR5/4 にぶい褐	礫, 長(多)		Ⅷ期
49	土師器	小皿	34O22		Ⅳ	10.2	3.4	6.1		ロクロナデ 底：回転糸切り右		7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR5/4 にぶい褐	礫(小)	内：コゲ	Ⅷ期　灯明皿か
50	土師器	小皿	34O18		Ⅳ	10.0	2.5	6.3		ロクロナデ 底：回転糸切り		5YR6/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙	礫, 長		Ⅷ期
51	土師器	小皿	34O15		Ⅳ	11.2	2.5	6.0				7.5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	礫, 長		Ⅷ期
52	須恵器	杯	35N12		Ⅳ	12.1*				ロクロナデ		10Y5/1 灰 10Y5/1 灰	白		Ⅴ期
53	黒色土器	無台椀	34N22		Ⅳa	13.5		6.6		ロクロナデ 底：回転糸切り		10YR6/4 にぶい黄橙 2.5Y2/1 黒	礫, 白	口外：黒化	Ⅴ期
54	製塩土器		34O2		Ⅳa	－				内：ナデ		7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR6/4 にぶい橙	礫, 長, 金		
55	褐釉か	四耳壺	34N23		Ⅳa						頸：細突帯 体：弧状沈線	7.5Y6/1 灰 7.5Y6/1 灰	白		
56	瀬戸・美濃	天目椀	35O10		Ⅲ			4.7				5YR2/1 黒褐 2.5Y8/2 灰白	長(少)		
57	白磁	椀	36N22		Ⅲ	－						5Y7/3 浅黄 7.5Y8/1 灰白			
58	青磁	盤または杯	33O20		Ⅳa	－						2.5GY6/1 オリーブ灰 10Y8/1 灰白			龍泉窯系
59	青磁	稜花皿	35N19		Ⅲ	12.8					口内：文様	7.5GY6/1 緑灰 N7/0 灰白	長?		
60	青磁	椀	36N16		Ⅲ	14.0						7.5GY6/1 緑灰 N7/0 灰白			
61	白磁	椀	34O2		Ⅳ	16.4						5Y6/2 灰オリーブ 7.5Y8/1 灰白			椀Ⅳ類
62	白磁	椀	34O16		土石流	13.5				外下半ケズリ・無釉		5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	石(僅)		
63	白磁	椀	34N21		Ⅰb'			6.3				7.5Y6/2 灰オリーブ 7.5Y8/1 灰白			底部打欠　高台無釉
64	白磁	皿	39O1		Ⅳ			5.9				5Y6/2 灰オリーブ 7.5Y8/1 灰白			全面施釉　皿Ⅸ類
65	珠洲焼	壺R	34O19		Ⅱ				18.1	ロクロナデ		N6/0 灰 N6/0 灰	礫, 白		

土器・陶磁器観察表（3）

報告番号	分類		出土位置			法量（cm）				調整	文様	胎　土 上段：外面・釉 下段：内面・地	混入物	使用痕, 付着物	備考
	種別	器種	グリッド	遺構番号	層位	口径	器高	底径	体最大径						
66	珠洲焼	甕	33N24		Ⅲ	－				口：ロクロナデ 体外：タタキ		N6/0 灰 N5/0 灰	礫, 白, 長		
67	珠洲焼	片口鉢	39N24		Ⅳa	－				ロクロナデ	内：波状文	N5/0 灰 N5/0 灰	礫, 長		
68	珠洲焼	片口鉢	試掘16T		黒灰色粘土	36.0*				ロクロナデ	内：卸し目	N6/0 灰 N5/0 灰	礫, 長, 白		
69	珠洲焼	片口鉢	36N6		Ⅲ					ロクロナデ	口：波状文 内：卸し目	N5/0 灰 N3/0 暗灰	礫, 長		内：自然釉
70	珠洲焼	片口鉢	33O10		Ⅳa	20.0*				ロクロナデ		N3/0 暗灰 N4/0 灰	白		
71	土師質土器	皿	33O15		Ⅲ	12.1		－		手づくね		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長, 金, 黒	内：スス, タール?	灯明皿
72	土師質土器	皿	35N13		Ⅱ	11.8		－		手づくね		10YR5/3 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄橙	金（少）	スス, タール?	灯明皿
73	瓷器系陶器	甕	34N19		Ⅳa						押印	5YR5/1 褐灰 7.5YR5/1 褐灰	長, 石		
79	土師器	甕	39O1	SX102		16.5				ハケ（口上：ナデ上げ）		10YR6/2 灰黄褐 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長, 白	外：ススわずか	A2類
80	土師器	高杯	39O1 39O1	SX102 	 V	16.3		11.1		摩耗著しく不明		10YR8/4 浅黄橙 10YR6/1 褐灰	白（僅）		
81	土師器	甕	39O3, 4	SX106		12.5				ハケ 口端：ナデ		2.5Y7/3 浅黄 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長	口外：スス	A2類
82	土師器	甕	39O4	SX106	1層			2.8		ハケ		5YR6/4 にぶい橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
83	土師器	甕	39O4	SX106		19.6				口：ヨコナデ 体内：ハケ		10YR7/2 にぶい黄橙 10YR8/3 浅黄橙	礫, 長		A3類
84	土師器	甕	39O4	SX106	1層	19.1				摩耗著しく不明		10YR8/4 浅黄橙 10YR6/1 褐灰	礫, 長		A3類
85	土師器	甕	39O4	SX106		20.4				ハケ 口外：ヨコナデ		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長		A3類
86	土師器	甕	39O4	SX106		22.7				ハケ 摩耗著しい		2.5Y7/3 浅黄 2.5Y7/3 浅黄	礫, 長		A3類
87	土師器	甕	36O15	SX120	1層	18.0				外：ハケ→ヨコナデ　内：摩耗著しく不明		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長, 黒, 金		A2類
88	土師器	甕	39O3	SX105	1層	16.9				外, 体内：ハケ　摩耗　口内：ナデ		10YR8/4 浅黄橙 5YR7/4 にぶい橙	礫, 長, 黒, 金（多）		A2類
89	土師器	甕	37O8	河川7		18.4				口：ハケ→ヨコナデ　体：ハケ		10YR8/3 浅黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長		A2類
90	土師器	甕	37O3, 8	河川7		18.8	33.8	－	26.5	口：ヨコナデ 体：ハケ		10YR5/4 にぶい黄橙 10YR5/4 にぶい黄橙	礫, 白	外：スス	A3類
91	土師器	甕	37O3	河川7		13.0				口外：ヨコナデ 体外, 内：ハケ		2.5Y7/3 浅黄 , 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長		小型
92	土師器	甕	37O3, 4, 8 37O3, 4, 9	河川7 	 V	15.6	21.1	－	18.8	口：ハケ, ヨコナデ 体：ハケ, ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長	体外：スス	A3類
93	土師器	壺か	37O3	河川7				5.0		ハケ・ナデ		10YR3/1 黒褐 10YR7/4 にぶい黄橙 10YR3/1 黒褐	礫, 長		
94	土師器	甕	37O4, 8	河川7				1.6		外：ハケ 内：ナデ		2.5Y3/1 黒褐 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
95	土師器	壺	36N6	河川7		8.6		－	9.5	ハケ→ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長, 白	底：黒斑	
96	土師器	壺	36N6 36N7	河川7 	 V	8.2			10.5	ハケ・ナデ 内：接合痕残る		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/1 褐灰	礫, 長		
97	土師器	鉢	37O3	河川7		13.6		4.5		外：ハケ→ミガキ 内：ハケ		2.5Y4/1 黄灰 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 白	外：スス	
98	土師器	高杯	37O2	河川7		19.9				ハケ→ミガキ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/2 灰黄褐	礫, 白		
99	土師器	甕	34N23	河川2	下層	19.2				摩耗著しく不明		7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	礫		A3類
100	土師器	甕	33O17	河川3		15.8				口外：ヨコナデ 体外, 内：ハケ		10YR5/3 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄橙	礫, 長, 石		A3類
101	土師器	甕	35O18	河川3		－				体：ハケ 明瞭		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長	外：スス	A3類
102	土師器	壺	35O18	河川3	1層, 底面	11.8			23.0	口：ナデ　体外：ハケ　内：摩耗著しく不明		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	礫, 長		肩部に把手
103	土師器	高杯	36O11	河川4	1層			13.3		外：ミガキ 内：ナデ?		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 白, 長, 金		
104	土師器	高杯	36N23	河川5	1層			14.3		外：ミガキ? 内：ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長		
105	土師器	壺	36N23	河川5	1層	7.6		－	10.0	外：ハケ　綾杉状 内：ナデ		10YR6/2 灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐	礫, 長		
106	弥生土器か	甕か	38O2	河川6	2層			4.8		外：ハケ 内：ナデ		2.5YR2/1 赤黒 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長	外：スス	
107	土師器	壺か	38O7	河川6	2層			4.8		ナデ		5YR6/4 にぶい橙 2.5YR6/4 にぶい橙	礫, 長（少）		
108	土師器	壺	38O7	河川6	2層				9.1	ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙 2.5Y6/3 にぶい黄	礫, 長		
109	土師器	高杯	37M25 38O7	河川6 河川6	1・2層 2層	20.0				ナデ? 摩耗著しい		2.5Y6/3 にぶい黄 2.5Y7/3 浅黄	礫, 長, 石		
110	土師器	高杯	38N22・38O2	河川6	2層	20.0*				ナデ? 摩耗著しい		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
111	土師器	高杯	38O7	河川6				14.0		外：ミガキ? 内：ハケ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄褐	礫, 長		
112	土師器	高杯	38N13	SX4	1層			12.8		外：ミガキ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長		
113	土師器	甕	39N24		V	16.4				口：摩耗著しく不明　体内：ハケ		10YR7/6 明黄褐 10YR8/6 黄橙	礫, 長（密）		A1類

土器・陶磁器観察表（4）

報告番号	分類		出土位置			法量（cm）				調整	文様	胎　土 上段：外面・釉 下段：内面・地	混入物	使用痕, 付着物	備考
	種別	器種	グリッド	遺構番号	層位	口径	器高	底径	体最大径						
114	土師器	甕	36O15		V	18.3				体内：ハケ　摩耗 他：摩耗著しく不明		10YR8/4 浅黄橙 10YR6/1 褐灰	礫, 長, 黒（多）		A2類
115 a	土師器	甕	39O1		V	17.0				外：ヨコナデ 内：ハケ		10YR5/3 にぶい黄褐 10YR3/1 黒褐	礫, 白		A3類
115 b	土師器	甕	39O1		V			－	18.9	ハケ		10YR5/3 にぶい黄褐 10YR3/1 黒褐	礫, 白	外：一部スス	
116	土師器	甕	37M23		V	19.8				摩耗著しく不明		10YR8/4 浅黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長		A2類
117	弥生土器	甕	38N25		V	16.2				外：ヨコナデ 内：摩耗著しく不明		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長, 石	口外：スス	B類
118	土師器	甕	38M24・ 38N4		V	17.3	24.3	6.2	22.6	口：ヨコナデ 体外：ハケ→ミガキ 体内：ハケ		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	礫, 白, 長	体外：スス	A3類
119	土師器	甕	39O4		V			1.5		ハケ		5YR6/4 にぶい橙 10YR6/1 褐灰	礫, 長		
120	弥生土器か	甕または壺	37O9		V			4.2		外：ハケ　摩耗 内：ナデ?		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR3/1 黒褐	礫, 長	外：ススわずか	
121	土師器	壺	38M23・ 38N3		V	29.0				外：ミガキ　摩耗 内：ナデ?		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/6 明黄褐	礫, 長, 金（多）		
122	土師器	壺	38N9, 14		V	29.0				ミガキ		10YR5/2 灰黄褐 10YR4/1 褐灰	礫, 長, 白		
123	土師器	壺	39O1		V	12.4	26.6	6.3	23.2	口：ヨコナデ 体：ハケ・ミガキ		10YR6/6 明黄褐 10YR5/4 にぶい黄褐	礫, 長, 白	口外, 体外下：スス	
124	土師器	壺	39N6		Ⅳb, V	10.1	14.0	2.9	14.2	外：ミガキ? 摩耗著しく不明		2.5Y7/3 浅黄 2.5Y7/3 浅黄	礫, 長	外：赤彩	
125	土師器	壺	36O10		V	11.3				外：ミガキ 内：ナデ?		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR8/3 浅黄橙	礫, 長, 黒		
126	土師器	壺	34O25ァ, ィ		V	8.5	7.6	－	9.8	口：ヨコナデ 体外：ハケ 体内：ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 白, 長	底：黒斑	
127	土師器	壺	36O15		V	13.4				ハケ→ヨコナデ 剥落著しい		7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR8/4 浅黄橙	礫, 長, 白（多）		
128	土師器	壺	39N6, 17		V				15.3*	摩耗著しく不明	頸・体：突帯	10R5/6 赤 , 2.5Y8/2 灰白 10YR5/1 褐灰	礫, 長, 石	外：赤彩	
129	土師器	壺	39N17・ 39O4		Ⅳb			3.0	15.0	摩耗著しく不明	体：突帯に凹線文・棒状浮文	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR5/1 褐灰	礫, 長		
			39N11		V										
130	土師器	壺	34O25ァ		V	14.3	26.1	6.5	25.3	口：ヨコナデ→ミガキ　体外：ハケ→ミガキ 体内：ハケ		10YR6/4 にぶい黄橙 10YR3/2 黒褐	礫, 長, 白	体外下：スス	
131	土師器	壺	37O16		Va			6.8		摩耗著しく不明		5YR7/6 橙 , 2/1 黒褐 5YR6/6 橙	礫, 長（多）	底外：黒斑	
132	土師器	壺	36O5, 10		V				24.1	摩耗著しく不明		7.5YR6/4 にぶい橙 10YR4/4 褐	礫, 長	外：赤彩	
133	土師器	壺	34O25ァ, ィ		V			7.2	33.1	体：ハケ　明瞭		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 白, 長	底外：黒斑	
134	土師器	台付鉢	39O1		V	17.2	9.0	8.8		口：ヨコナデ→ミガキ　体, 脚：ハケ→ミガキ 脚内：ハケ・ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 金（小） （少）		
135	弥生土器	鉢	36O15		V	13.1	5.6	3.3		摩耗著しく不明		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長		
136	土師器	鉢	39N24		V	7.5	4.5	4.5	8.4	外：摩耗著しく不明　内：ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長		
137	土師器	高杯	37N6		V					外：ミガキ 内：ミガキ?		7.5YR6/4 にぶい橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 白, 長	外：ススわずか	
138	土師器	高杯	37O4, 9		V					外, 口内：ミガキ 脚内：ハケ		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 長		
139	土師器	高杯	36N17		V			15.6		外：ミガキ?摩耗 裾内：ナデ		7.5YR7/6 橙 7.5YR7/4 にぶい橙	白, 礫, 長		
140	土師器	高杯	38M24・ 38N24		V			9.1		摩耗著しく不明		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長, 白		裾部いびつ
141	土師器	高杯	37N20		V			11.9		外：ミガキ　摩耗 裾内：ハケ→ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	礫, 白, 長		
142	土師器	器台	36O10		V	12.2	9.1	15.0		外：ミガキ 受内：ハケ→ミガキ		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	礫, 長, 金		
143	土師器	器台	35O15		V	8.6	6.5	11.9		摩耗著しく不明		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 長（小）		
144	土師器	器台	37N1, 7		V	9.9				ミガキ? 摩耗著しい		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 長, 黒（小）		
145	土師器	器台か	36O10		V			10.1		摩耗著しく不明		10YR7/3 にぶい黄橙 10YR8/3 浅黄橙	礫, 長, 石		
146	土師器	甑か	38N5, 10		V	22.7				摩耗著しく不明		5YR5/6 明赤褐 5YR6/6 橙	礫, 長, 石		
147	弥生土器	甕	34O25		Ⅳ	18.2				ヨコナデ	口：擬凹線	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR5/6 黄褐	礫, 長, 金（少）	口外：スス	B類
148	土師器	高杯	34N21, 22, 23		Ⅳ	18.3				外：ミガキ?　摩耗 内：摩耗著しく不明		7.5YR7/4 にぶい橙 10YR7/3 にぶい黄橙	礫, 白, 長		
149	土師器	壺	36N17		Ⅳb	14.8				外：摩耗著しく不明　内：ミガキ? ハケ残		10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫, 石, 金, 黒 （小）		
150	土師器	壺	34P2		Ⅳb	8.9	7.0		10.0	頸～体外上：ハケ 体外下, 内：ナデ		7.5YR7/6 橙 10YR7/4 にぶい黄橙	礫		
151	土師器	壺	試掘7T		灰褐色粘土	10.9				ミガキ? 摩耗著しい		7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	礫, 長, 金（小）		
152	弥生土器	甕	試掘3T		青灰色粘土	13.8	23.7	5.1	17.4	体：ハケ残る 摩耗著しい		5YR4/6 赤褐 5YR6/6 橙	礫, 長		B類

土錘観察表

報告番号	出土位置		法　量（cm/g）					胎土	色調	備考
	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	孔径	重量			
74	35N22	Ⅳ	5.85	5.45	5.35	1.5	148.16	石・金(小)（少）	7.5YR7/4 にぶい橙	
75	34O18	Ⅳ	6.4	4.8	3.2	1.6	71.13	長・金(少)	7.5YR7/6 橙	約1/2欠損
76	37O7	Ⅲ	7.2	3.75	3.6	1.35	82.99	礫・長・金(小)(少)	10YR5/3 にぶい黄褐	指頭痕残る
77	33O19	Ⅲ	4.3	3.0	3.05	1.4	29.03	長(僅)	2.5Y8/4 淡黄	両端一部欠損、器面摩耗
78	試掘2T	埋戻し土	3.9	3.25	3.25	1.3	32.80	石・金(小)（少）	10YR6/3 にぶい黄橙	指頭痕わずかに残る

石器・石製品観察表

報告番号	種別	分類		石材	出　土　位　置			法量　（単位：mm/g）				備　　考
					グリッド	遺構番号	層位	長さ	幅	厚さ	重量	
153	横刃形石器			硬砂岩	35O17	河川3		96.0	136.2	25.5	322.46	磨痕：表裏下面
154	横刃形石器			硬砂岩	35O16		Ⅳb	87.0	121.6	16.9	222.07	磨痕：表下面
155	横刃形石器			ヒン岩	35N25		Ⅳ	85.7	123.0	18.7	221.03	磨痕：裏面
156	横刃形石器			硬砂岩	不明		不明	83.4	101.8	18.5	176.65	
157	横刃形石器			硬砂岩	34O8		Ⅳb	74.8	120.5	15.7	144.70	磨痕：裏面
158	石核			硬砂岩	37N20		Ⅴ	192.0	273.5	59.0	3880.00	
159	石錘			安山岩	38O7		Ⅲ	77.0	110.5	27.5	305.60	
160	石錘			砂岩	36O15		Ⅲ	64.0	88.0	26.0	166.40	
161	石錘			安山岩	試掘2T		青灰色粘土	102.0	80.0	76.0	635.74	風化進む
162	磨石類		磨+敲下	流紋岩	35O23	河川3	1層	178.5	62.5	58.0	980.83	
163	磨石類		磨+敲表上	ヒン岩	39O2	SX102		116.0	82.5	55.0	723.02	片端欠損
164	磨石類		磨+敲下	ヒン岩	36O5		Ⅴ	166.0	93.0	31.5	832.87	
165	砥石			砂岩	35O23	河川3	底面	228.0	128.0	30.5	1270.98	砥面1面
166	台石			安山岩	33O20	河川1	下層	321.5	218.5	76.5	10150.00	表：磨痕・敲打痕
167	砥石			砂岩	33O20		土石流	243.5	169.0	55.0	3455.00	砥面3面、表：磨痕・刃物痕　河川1上
168	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25		Ⅴ	13.7	9.8	9.7	2.30	
169	棗玉	未成品	多角柱	滑石	37N15ウ	河川6	1層	11.6	9.1	8.8	1.78	
170	棗玉	未成品	穿孔中	蛇紋岩	34O25ア		Ⅴ	12.7	8.8	7.9	1.66	孔径1.3mm
171	棗玉	未成品	多角柱	滑石	36O16		Ⅳb	14.6	7.6	7.4	1.56	
172	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	12.4	8.2	8.1	1.47	
173	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	9.0	7.7	6.5	0.80	
174	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O20ゥ		Ⅴ	8.2	6.6	6.1	0.59	
175	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	8.0	6.4	6.3	0.56	
176	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	7.7	7.4	7.3	0.72	
177	棗玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25ア		Ⅴ	6.8	7.8	7.7	0.66	
178	棗玉	未成品	穿孔中	蛇紋岩	34O25ア		Ⅴ	10.8	8.4	7.8	1.21	孔径2.0mm
179	棗玉	未成品	穿孔中	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	14.7	8.3	8.5	2.04	孔径2.0mm
180	棗玉	未成品	穿孔中	蛇紋岩	34O25ア		Ⅴ	14.5	9.8	9.3	2.39	孔径1.6～1.8mm
181	棗玉	未成品	穿孔中	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	9.0	8.2	7.9	1.14	孔径1.8mm
182	臼玉	未成品	穿孔中	蛇紋岩	36N9		Ⅴa	5.9	7.5	7.4	0.58	孔径2.1mm
183	臼玉	未成品	多角柱	蛇紋岩	34O25		Ⅴ	4.7	6.6	6.0	0.38	
184	臼玉	未成品	穿孔後整形	蛇紋岩	36N8		Ⅳb	5.0	7.4	4.7	0.27	孔径2.1mm　約1/2欠損
185	臼玉	未成品	穿孔後整形	蛇紋岩	36N8	河川5	1層	3.5	7.9	7.5	0.35	孔径2.0mm
186	臼玉	未成品	穿孔後整形	滑石	36N8	河川5	1層	8.5	11.9	2.3	0.39	孔径1.4～1.8mm
187	臼玉	未成品	穿孔後整形	滑石	36N8	河川5	1層	7.5	9.9	1.7	0.22	孔径1.5～1.7mm
188	臼玉	未成品	穿孔後整形	滑石	36N8	河川5	1層	8.2	8.0	2.1	0.25	孔径1.3～1.7mm
189	臼玉	完成品		滑石	36N8	河川5	1層	5.4	5.4	2.4	0.12	孔径1.3mm
190	勾玉	未成品	半月形か	蛇紋岩	36N9		Ⅳb	12.0	8.3	3.8	0.76	
191	勾玉	未成品	半月形	蛇紋岩	34O11	河川1	中層	24.7	13.2	5.3	2.77	
192	勾玉	未成品	半月形	蛇紋岩	34O25ィ		Ⅴ	18.0	10.5	3.6	1.30	
193	勾玉	未成品	逆C形	滑石	35N16ア		Ⅴ	13.8	9.3	3.2	0.65	
194	勾玉	未成品	逆C形	ヒスイ	34O25ィ		Ⅴ	21.6	13.4	7.5	3.51	
195	原石			ヒスイ	36O9	P124		37.6	36.7	25.2	57.63	

木製品観察表（1）

凡例：

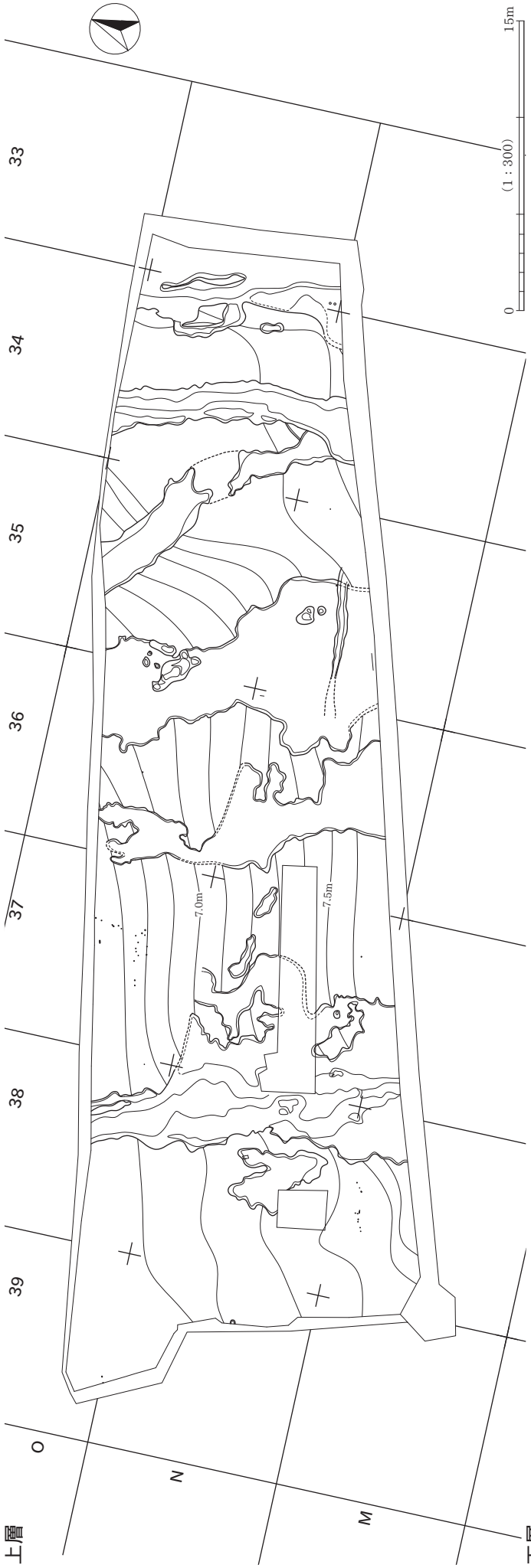
樹種：*＝2007年分析、その他＝2014年分析　法量：（　　）＝残存径

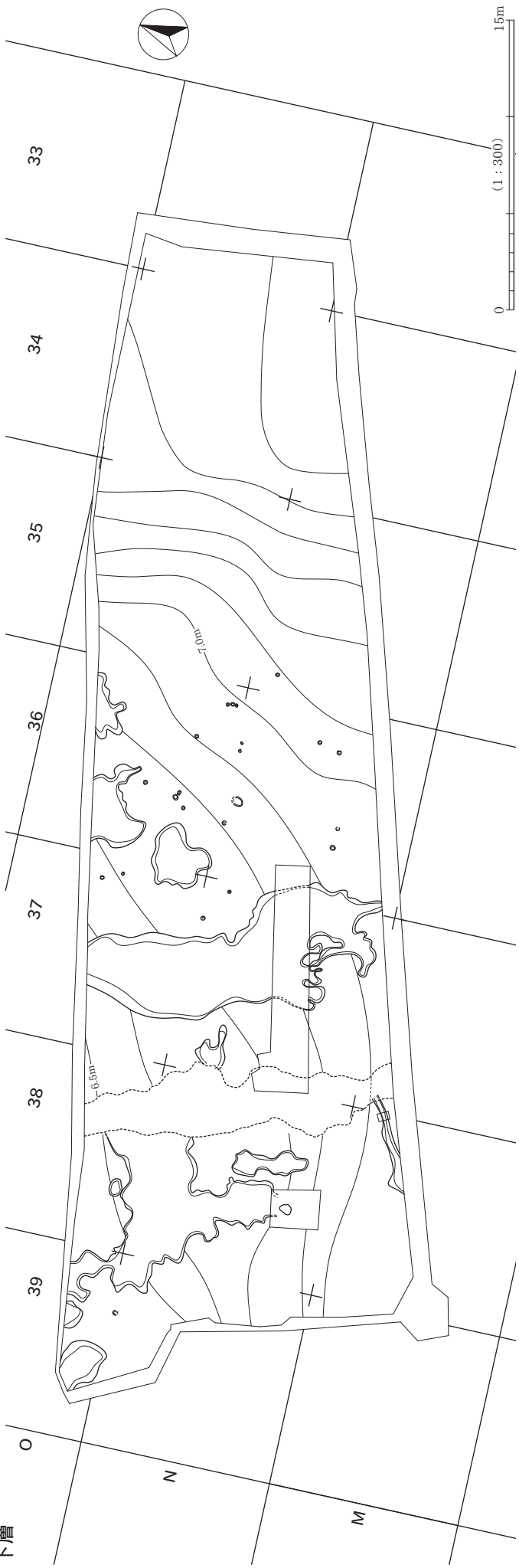
報告番号	分類群	種　類	形状・断面	木取り	樹　種	出土位置			法　量（cm）			備考
						グリッド	遺構番号	層位	長さ 口径	幅 器高	厚・径 底径	
196	容器	曲物側板（底）		柾目	スギ	34O21	河川1	中層	長 13.5	高 4.0	0.6	樺皮綴、木釘孔1
197	容器	曲物側板（底）		柾目	スギ	34O6	河川1	中層	長 7.0	高 2.5	0.6	木釘孔1
198	祭祀具	斎串		板目	スギ	34O16	河川1	中層	14.1	2.0	0.5	
199a		不明	棒状（角）	板目	スギ	34O7	河川1	中層	14.0	1.2	0.7	
199b		不明	棒状（角）	板目	スギ	34O7	河川1	中層	15.7	1.2	0.8	
200		不明	棒状（円）	削出	スギ	34O16	河川1	中層	20.8	1.6	1.1	
201	容器	挽物無台盤		横木・柾目	ケヤキ	34O21	河川1	下層			11.8	
202	容器	挽物無台盤		横木・柾目	ケヤキ	34O21	河川1	下層			11.0	外：一部炭化
203	容器	曲物側板		柾目	スギ	33O15	河川1	下層	長 31.8	高 2.5	0.6	
204	祭祀具	斎串		板目	スギ	33O15	河川1	下層	16.7	1.7	0.4	
205		円形板か	板状	追柾目	スギ	34O21	河川1	下層	12.8	4.5	0.7	
206		部材	板状	柾目	スギ	34O6	河川1	下層	17.5	4.4	0.7	
207		不明	棒状（角）	削出	スギ	33O20ィ	河川1	下層	32.8	1.1	0.6	
208	食事具	箸状木製品		削出	スギ	33O5	河川1		9.7	0.5	0.5	
209	土木材	板杭		柾目	スギ*	34O19	河川2		52.6	21.3	2.9	^{14}C分析⑦：AD380～440
210	土木材	板杭		柾目	スギ	34O19	河川2		21.3	13.6	1.2	

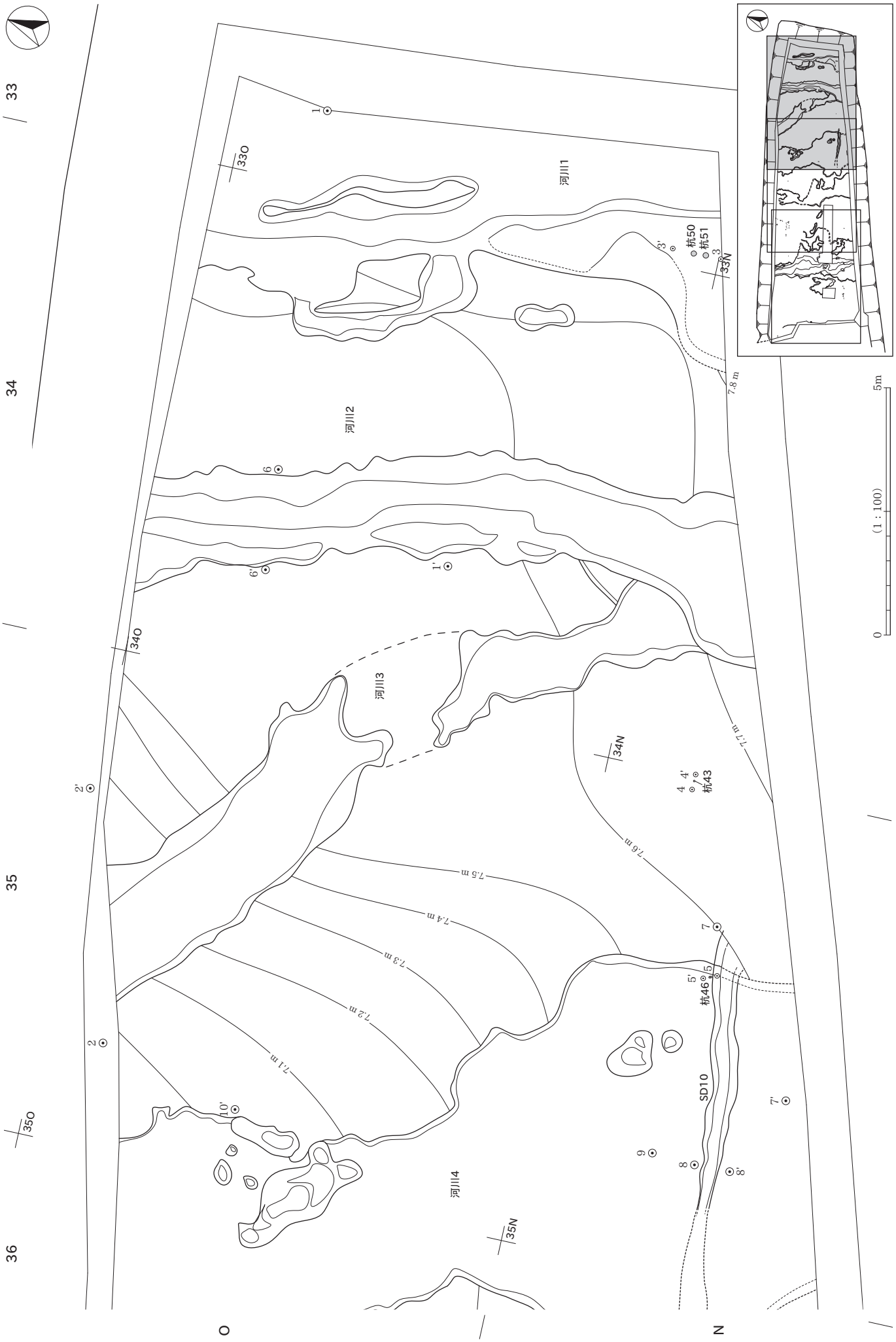
木製品観察表（2）

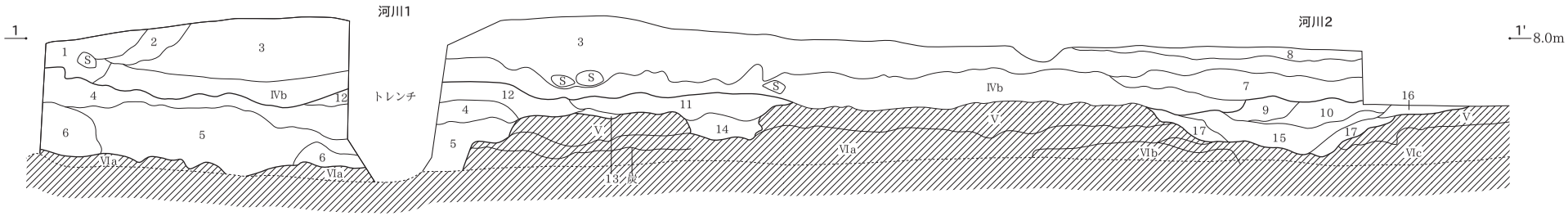
報告番号	分類群	種　類	形状・断面	木取り	樹　種	出土位置			法　量（cm）			備考
						グリッド	遺構番号	層位	長さ 口径	幅 器高	厚・径 底径	
211	紡織具	糸巻の枠木	棒状	削出	スギ*	36N23	河川5	1	23.8	1.9	2.3	^{14}C分析⑧：AD680～780
212		杭か	棒状（角）	削出	スギ	38N1	河川6	3	41.1	3.4	2.1	
213		杭か	棒状（角）	削出	スギ	37N5	河川6	1	62.9	4.6	1.8	
214		不明	板状	板目	スギ	38N22	河川6	1	17.5	5.9	1.2	
215	土木材	杭か	棒状（角）	分割（心去）	スギ*	36N9	P145		19.4	6.1	5.1	
216		不明	棒状（平）	削出	スギ	38N12	杭22		26.4	2.3	1.3	
217		不明	棒状（角）	削出	スギ*	37N5	杭23		45.6	3.7	3.5	
218		杭か	棒状（円）	丸木	トネリコ属 トネリコ節	38M23	杭12		8.0	1.8	1.4	
219	土木材	杭	棒状（円）	丸木	ツブラジイ	38M23	杭18		14.1	2.5	2.2	
220	土木材	杭	棒状（円）	丸木	タラノキ	37O8	杭30		15.1	3.6	2.9	樹皮一部残存
221	土木材	杭	棒状（円）	丸木	タラノキ	37O8	杭34		12.2	3.4	2.2	
222	土木材	杭	棒状（角）	削出?	クリ	34N21	杭51		62.4	7.4	6.2	
223	土木材	杭	棒状（円）	丸木	クリ	37O9	杭36		13.6	2.9	2.9	
224a	土木材	杭	棒状（円）	丸木	スダジイか	37O12	杭39		10.5	3.1	2.6	
224b	土木材	杭	棒状（円）	丸木	スダジイ*	37O12	杭39		22.9	3.2	2.5	^{14}C分析⑨：AD1290～1390
225	土木材	杭	棒状（円）	丸木	マツ属複維管束亜属	35N21	杭43		20.2	4.4	4.1	樹皮残存
226	工具	篦杓子		柾目	スギ*	35O1		Ⅳb	21.3	5.6	0.8	
227		円形板か	短冊状	追柾目	スギ	34O24		Ⅳb	12.5	2.6	0.6	
228		不明	短冊状	柾目	スギ	34O17		Ⅳb	5.4	4.2	0.7	裏面炭化
229	食事具	箸状木製品		削出	スギ	34O5		Ⅳb	15.0	0.7	0.6	
230		不明	棒状（平）	削出	スギ	34N24		Ⅳb	18.0	2.5	1.2	
231a	容器	曲物側板		柾目	スギ	35O16		Ⅳb	長 9.3	高 1.4	0.5	綴じ孔1
231b	容器	曲物側板		柾目	スギ	35O16		Ⅳb	長 7.4	高 1.5	0.4	綴じ孔2
232		部材	板状	柾目	スギ	34O13		Ⅳb	14.1	14.5	0.8	中心刳り抜きか。孔2孔1対か、樺皮綴、裏面一部炭化
233	容器	曲物底板（底）		柾目	スギ	33N24, 25、 34N21～23		Ⅳb	12.9	13.5	0.8	木釘孔4（残2）
234		半円形板か		板目	スギ	35O16		Ⅳb	15.6	0.6	1.7	上端わずかに炭化
235	土木材	杭	棒状（角）	削出	クリ	35O4		Ⅳb	12.4	3.9	2.9	
236		不明	棒状（円）	削出	スギ	34O23		Ⅳb	8.9	1.3	1.3	
237		不明	棒状（円）	削出	スギ	35O6		Ⅳb	15.6	1.6	1.4	
238		不明	棒状（円）	削出	スギ	33N24, 25、 34N21～23		Ⅳb	30.7	2.6	2.3	
239		部材	板状	板目	スギ	34O11		Ⅳb	39.4	7.1	1.4	
240		不明	棒状（角）	削出	スギ	34N25		Ⅳb	44.5	3.9	2.4	表面炭化
241	服飾具	連歯下駄		追柾目	モクレン属	35O4		Ⅳ	15.1	6.9	台 1.2 全体3.5	緒孔径1.3～1.5cm
242	服飾具	無歯下駄		追柾目	スギ*	35O21ィ		Ⅳ	14.9	7.3	1.1	
243	服飾具	差歯下駄　歯		板目	モクレン属	34O9		Ⅳ	8.6	12.6	1.9	
244	容器	漆器椀		横木・柾目	ケヤキ	34N25		Ⅳ			（8.1）	
245	容器	蓋板か	板状	板目	スギ	35N19		Ⅳ	13.1		1.3	中央に円孔か、直径1.5cm
246	容器	曲物底板		板目	スギ	34O16		Ⅳ	20.6	12.7	1.3	木釘孔2、表面一部炭化
247	食事具	箸状木製品		削出	スギ	37M24		Ⅳ	12.8	6.5	0.5	
248	調理加工具	杓子か		横木・柾目	フサザクラ	37N6		Ⅳ	長 11.6		（丸底）	短辺7.15cm、器厚1.5～1.9cm
249	紡織具	錘か	棒状（円）	丸木	ヤナギ属	34N18		Ⅳ	12.0	3.6	3.1	
250	紡織具	錘か	棒状（円）	丸木	ノリウツギ	38N12		Ⅳ	14.9	3.6	3.3	
251		不明	加工材	分割（心去）	スギ	37O1		Ⅳ	13.0	4.7	4.0	把手または紡織機の一部か
252		不明	棒状（平）	板目	スギ	35P1		Ⅳ	19.0	3.1	0.7	
253		不明	板状	板目	スギ	35O11		Ⅳ	22.1	6.2	1.4	
254		不明	棒状（角）	削出	スギ	39N21		Ⅳ	5.7	2.6	2.0	
255		不明	加工材	板目	スギ	38O7		Ⅳ	11.0	6.3	2.0	
256		部材	短冊状	柾目	ヒノキ	35N19		Ⅳ	11.6	4.1	0.3	
257		部材	板状	板目	スギ*	36N21		Ⅳ	11.9	5.2	2.1	本体・組合材ともスギ
258		部材か	棒状（円）	削出	スギ	36N16		Ⅳ	35.3	2.7	2.8	
259		不明	棒状（平）	板目	アスナロ	35N19		Ⅳ	5.0	1.6	0.6	
260		不明	棒状（円）	削出	スギ	35N19		Ⅳ	11.7	1.3	1.0	
261		不明	棒状（角）	削出	スギ	35N13		Ⅳ	16.7	1.7	1.4	
262		不明	棒状（円）	削出	スギ	35N16		Ⅳ	13.4	1.9	1.5	
263		不明	棒状（円）	削出	スギ	37M23		Ⅳ	16.8	2.6	2.1	
264		部材	棒状（平）	削出	スギ	34O21		Ⅳa	39.9	3.3	1.9	
265		部材	棒状（角）	削出	スギ	34O21		Ⅳa	23.8	3.4	2.5	
266	容器	漆器椀		横木・柾目	ブナ属	37M25		Ⅲ			（5.8）	内外：黒漆塗　赤漆文様
267	容器	漆器椀か		横木・柾目	ブナ属	37O1		Ⅲ				外：黒漆　内：赤漆
268		不明	板状	板目	スギ	37N25		Ⅲ	8.5	1.9	0.6	
269	食事具	箸状木製品		削出	スギ	36N14		Ⅲ	12.6	0.7	0.4	
270		不明	板状	柾目	スギ	36O9		Ⅲ	13.9	（14.0）	0.7	幅は推定値
271		部材	短冊状	柾目	ヒノキ	35N24		Ⅲ	8.1	2.9	0.6	
272		部材	棒状（角）	削出	スギ	36N5		Ⅲ	21.4	1.9	1.1	
273		部材	板状	板目	スギ	36O15		Ⅲ	28.1	6.9	1.2	
274		自然木	丸木		クマノミズキ類	35O15	河川4	1'				^{14}C分析⑩：AD775～875
275		自然木	丸木		スギ	38N3	SX102c	1				^{14}C分析⑪：BC5～AD55

図　　版

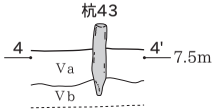

上層
O
N
M
33
34
35
36
37
38
39
7.0m
7.5m
0
(1：300)
15m

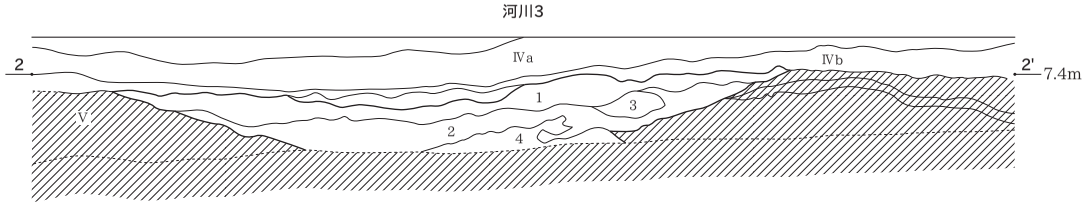

下層
O
N
M
33
34
35
36
37
38
39
7.0m
6.5m
0
(1：300)
15m

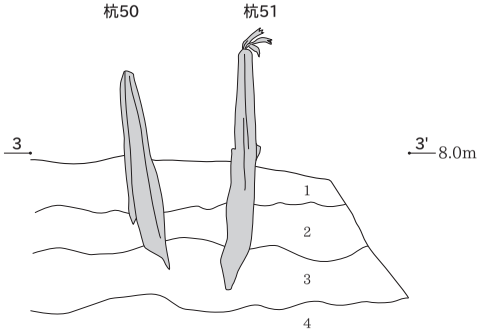

33
34
35
36
O
N
330
340
350
33N
34N
35N
河川1
河川2
河川3
河川4
杭50
杭51
杭43
杭46
SD10
7.8 m
7.7 m
7.6 m
7.5 m
7.4 m
7.3 m
7.2 m
7.1 m
0
(1：100)
5m

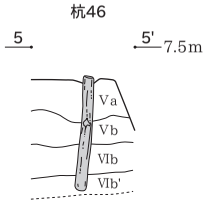


河川1，河川2
1　明黄褐色中～細砂主体土＋灰色細砂（N5/0）　粘性なし、しまり中　拳大の礫、炭化物含む。
2　暗灰色粘質土（N3/0）　粘性弱、しまり弱　炭化物粒を少量含む。
3　黄褐色中砂主体の砂礫層（2.5Y5/4）　径2cm～人頭大の礫を含む。部分的に1層が互層に入る。2層土ブロックを含む。
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）＋緑灰色細砂（7.5GY6/1）　粘性弱、しまり弱　東側に粘質土が多く、西側に行くにつれ砂が多くなる。互層になる部分もある。
5　浅黄色（2.5Y7/3）＋明緑灰色（7.5GY7/1）砂礫　粘性なし～中、しまり中　拳大までの礫を含む。木根状の有機物多量。オリーブ灰色粘質土＋灰色粘質土の互層ブロックを含む。
6　灰色粘質土（7.5Y5/1）　砂質を少量・爪先程の炭化物を多く含む。
7　褐灰色シルト質土（10YR4/1）　粘性なし、しまり強　細～中砂・炭化物粒を少量含む。
8　黒褐色土（10YR3/2）　粘性弱、しまり強　砂を少量含む。
9　明黄褐色砂（2.5Y6/6）
10　黄灰色シルト質土（2.5Y5/1）　粘性弱、しまり中　細砂と炭化物粒を含む。
11　灰色砂質シルト（5Y4/1）　粘性弱、しまり中　有機物と炭化物粒を含む。
12　オリーブ黒色砂質シルト（5Y3/1）　粘性弱、しまり中　有機物と炭化物粒を含む。
13　灰色砂質土（5Y6/1）　粘性弱、しまり強
14　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）　粘性弱、しまり中　細砂を層状に含む。底面で黄褐色砂礫を検出。
15　灰色砂質土（5Y4/1）　明褐灰色細砂等が互層に入る。有機物・炭化物粒・砂礫が多く互層状となる。
16　灰黄褐色シルト質土（10YR4/1）　粘性弱、しまり強
17　灰色粘質シルト（7.5Y4/1）　砂・有機物少量含む。



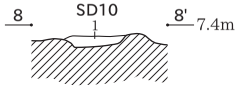




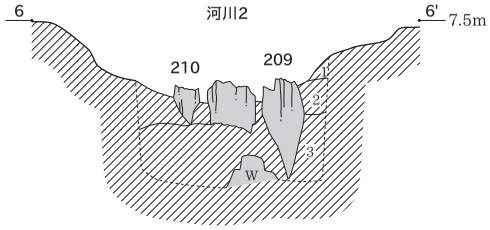


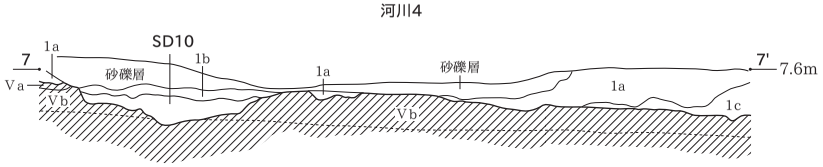
河川3
1　暗緑灰色（10G4/1）粘質シルト　粘性弱、しまり中　有機物多く、炭化物少量含む。
2　黒褐色（7.5YR3/2）粘質土　1層が混じり、砂礫を多く含む。有機物を多く含み、木片や枝類が多量に見られる。
3
4　Ⅵc層に近似

杭50・51
1　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
2　青灰色細砂（5BG6/1）
3　緑灰色シルト（7.5GY5/1）砂を少量・腐植物多く含む。
4　灰色粘質シルト（7.5Y4/1）砂をブロック状に含む。
（1～4：河川1覆土）



SD10
1　オリーブ褐色（2.5Y4/4）を基調とする粗砂
粘性なし、しまり強。地山（Vb層）をマーブル状に多く、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。

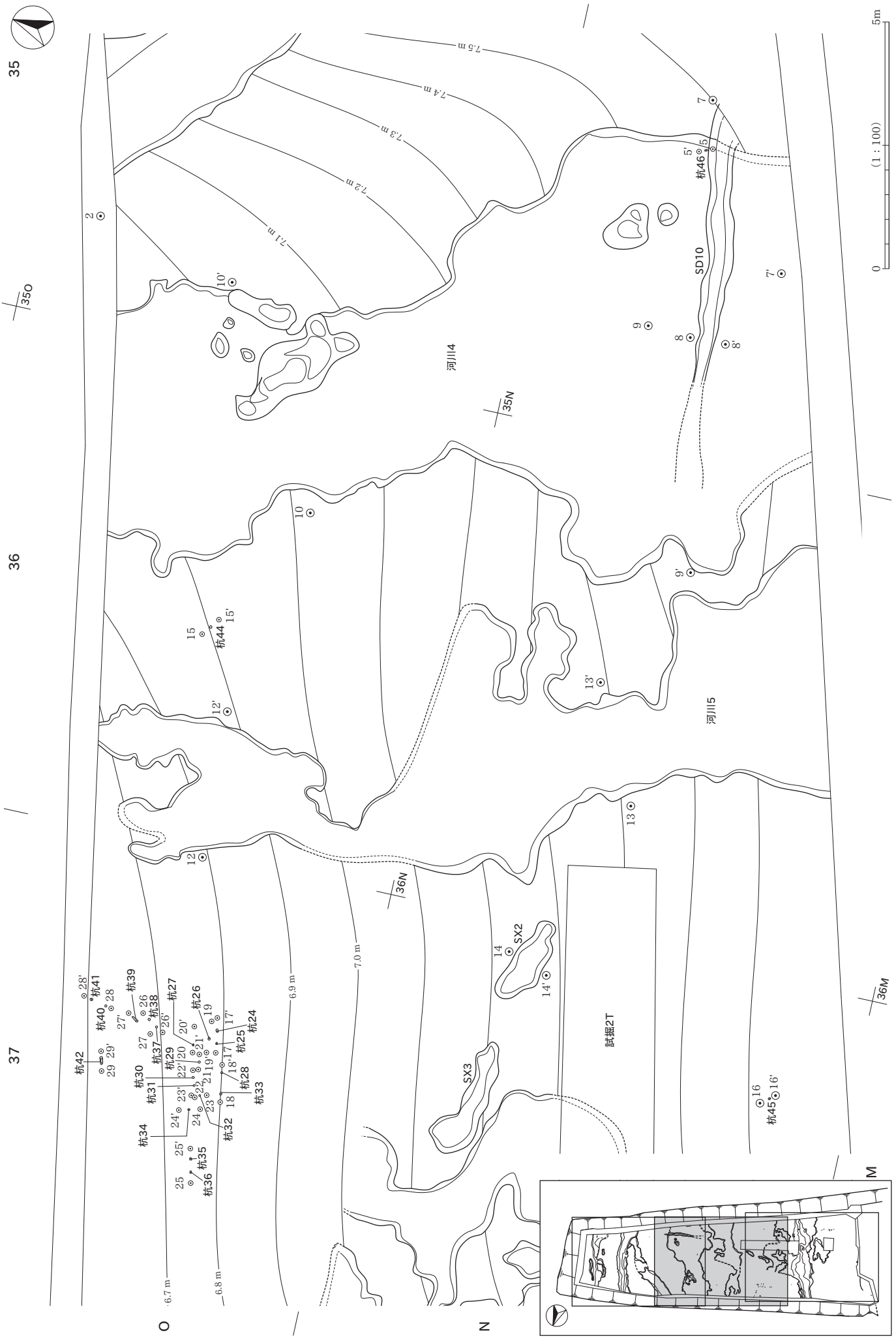




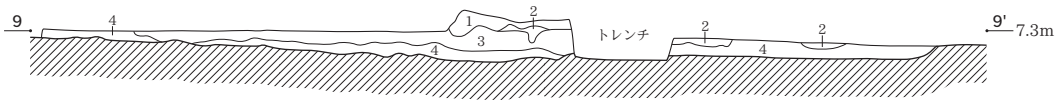
河川2
1　緑灰色に近い灰色粘質シルト（7.5Y4/1）　粘性強、しまり強。
2　灰色砂質土（7.5Y5/1）　粘性強、しまり強。1層との境に砂利層を挟む場合特にしまる。粘質土含む。
3　暗灰色粘質土（N3/0）　腐植土・砂質土・細砂が互層になる。根等を多量に含む。古い時代の河川堆積か。

河川4・SD10
砂礫層　にぶい黄褐色（10YR5/4）を基調とする砂礫層（礫は最大5cm超）。粘性なし、しまり弱。
1a　褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）シルト　粘性弱　しまり強。径1～2mmの炭化物をわずか、粗砂をわずか、地山（Vb層）をマーブル状にわずか含む。
1b　褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）シルト　粘性弱、しまり強。径1mmの炭化物・粗砂わずか、地山（Vb層）をマーブル状に多く含む。
1c　黄灰色シルト（2.5Y4/1）　粘性強、しまり強。粗砂多量、径1～2mmの炭化物わずか、地山（Vb層）をマーブル状に多く含む。
SD10　オリーブ褐色（2.5Y4/4）を基調とする粗砂　粘性なし、しまり強。径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。

0　1・2・6～8（1：40）　2m
0　3～5（1：20）　1m

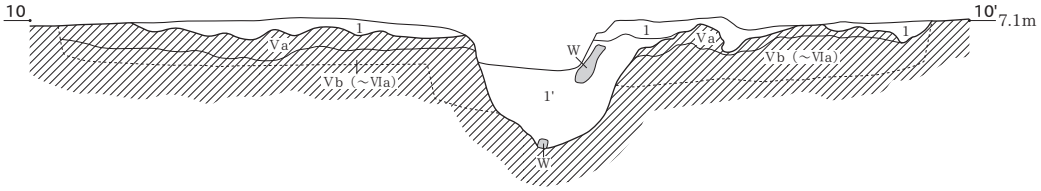

35
36
37
35O
35N
36N
36M
O
N
M
河川4
河川5
SD10
試掘2T
SX2
SX3
7.5 m
7.4 m
7.3 m
7.2 m
7.1 m
7.0 m
6.9 m
6.8 m
6.7 m
杭42
杭41
杭40
杭39
杭38
杭37
杭36
杭35
杭34
杭33
杭32
杭31
杭30
杭29
杭28
杭27
杭26
杭25
杭24
杭46
杭45
杭44
0
(1：100)
5m

河川4



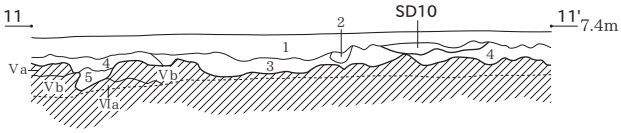
河川4
1　褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性弱、しまり強。粗砂をわずか、地山（V層）をマーブル状にわずか、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。
2　黄灰色シルト（2.5Y4/1）　粘性強、しまり強。細砂をわずか、径1mmの炭化物をごくわずか含む。
3　黒色（5Y2/1）～黒褐色（2.5Y3/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。炭化物を多く、灰色シルトをマーブル状にわずか含む。
4　灰色（5Y5/1）～青灰色（5BG5/1）～オリーブ灰色（5GY5/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。径5～10mmの炭化物を多く、黒褐色粘質シルトをマーブル状に多く含む。

河川4



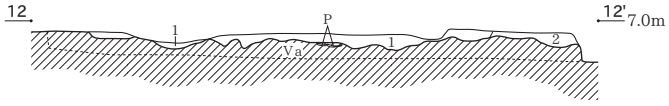
河川4
1　褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性弱、しまり強。粗砂わずか、地山をマーブル状にわずか、径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。
1'　褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性弱、しまり強。粗砂を多く、地山をブロック状に多く、径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。

河川4



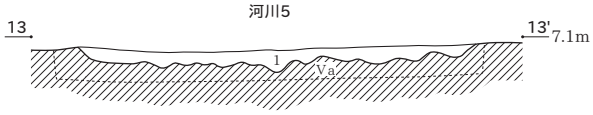
河川4
1　褐灰色粗砂混じりシルト（10YR4/1）　粘性弱、しまり強。粗砂をわずか、V層土をマーブル状にわずか、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。
2　黄灰色細砂混じりシルト（2.5Y4/1）　粘性中、しまり強。細砂わずか、径1mmの炭化物をごくわずか含む。
3　黒色（5Y2/1）～黒褐色（2.5Y3/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。炭化物を多く、V層土をマーブル状にわずか含む。
4　褐灰色粗砂混じりシルト（10YR4/1）　粘性中、しまり強。粗砂をわずか、径1～10mmの炭化物をわずか、V層土をマーブル状にわずか含む。
5　褐灰色粘質シルト（10YR4/1）　粘性強、しまり強。径2～15mmの炭化物をわずか、V層土をマーブル状にわずか含む。
SD10　オリーブ褐色（2.5Y4/4）を基調とする粗砂　粘性なし、しまり強。黄灰色シルトをマーブル状に極めて多く、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。

河川5

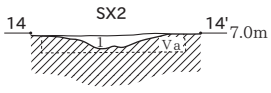


河川5
1　灰色（5Y5/1）～黄灰色（2.5Y5/1）シルト　粘性強、しまり強。粗砂・炭化物を多く含む。
2　黄灰色シルト（2.5Y4/1）　粘性強、しまり強。粗砂をごくわずか含む。

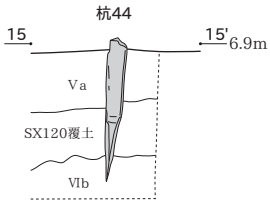
河川5

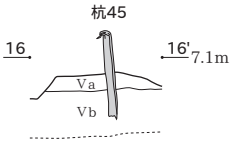


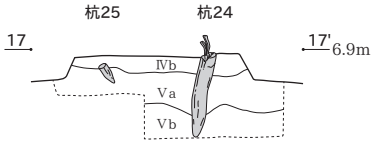
河川5
1　黒褐色（10YR3/1）～黄灰色（2.5Y4/1）シルト　粘性強、しまり強。
径1mmの炭化物をわずか、粗砂をわずか、地山（Va層）をマーブル状に多く含む。

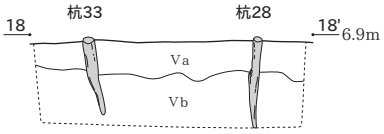


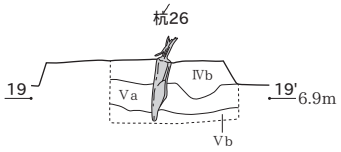
SX2
1　褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性強、しまり強。
径1～5mmの炭化物ごくわずか、地山（Va層）をマーブル状に多く含む。

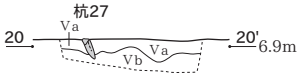


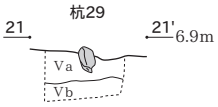


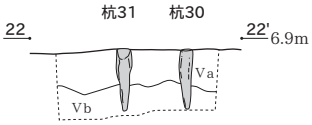


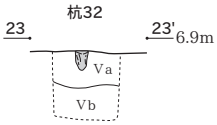


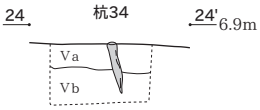


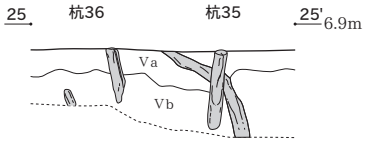


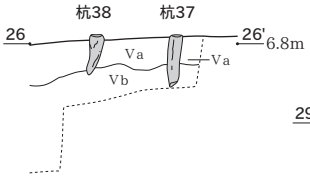


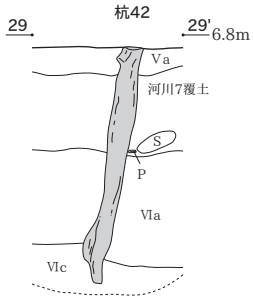


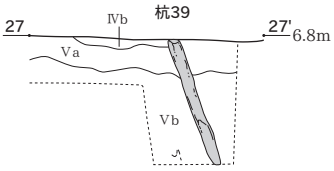


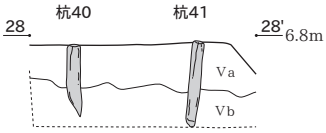










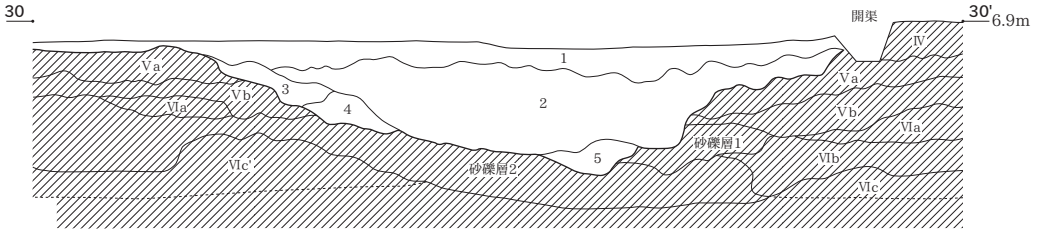


0　9～14（1：40）　2m

0　15～29（1：20）　1m

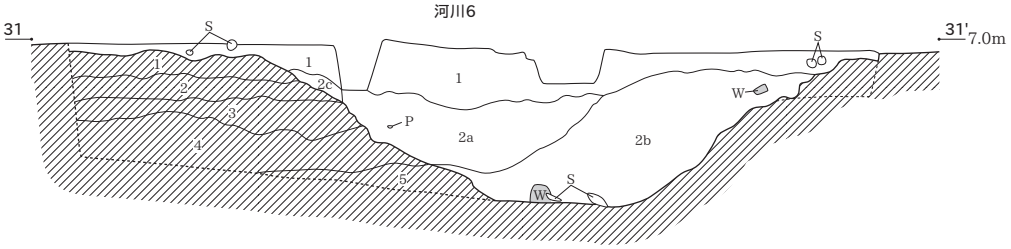
37
38
39
O
N
M
SX2
SX3
SX4
試掘1T
試掘2T
P9
37N
37M
38N
38M
6.7 m
6.8 m
6.9 m
7.0 m
7.5 m
0
5m
(1 : 100)

河川6

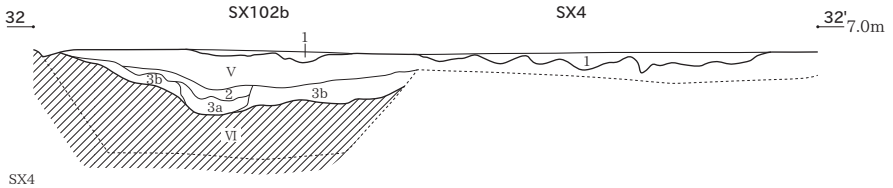


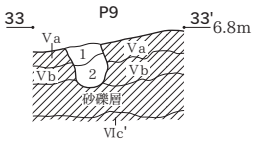
河川6
1　黒褐色（10YR3/1）～褐灰色（10YR4/1）シルト　粘性弱、しまり強。粗砂をわずか、径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。平安包含層（Ⅳ層）が落ち込んだもの。
2　黒褐色（10YR3/1）～褐灰色（10YR4/1）シルト　粘性弱～中、しまり強。粗砂を多く、地山（Va層）をマーブル状に多く、径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。
3　褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性なし～弱、しまり強。粗砂を多く、地山をマーブル状に極めて多く、径2mmの炭化物をごくわずか含む。
4　黒褐色シルト（10YR3/1）　粘性強、しまり強。地山をブロック状に多く、細砂をわずか、径3mmの炭化物をごくわずか含む。
5　緑灰色砂質シルト（5G5/1）粘性弱～中、しまり強。径1～3mmの炭化物をごくわずか、褐灰色シルトをマーブル状にわずか含む。地山（Vb層）に近似。

河川6



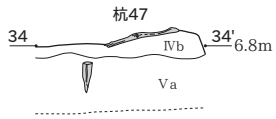
河川6
1　暗オリーブ灰色砂質シルト（5GY4/1）　粘性なし、しまり強　上部は明緑灰色（7.5GY7/1）になる。西側に集中して拳大～人頭大の礫を含む。
明黄褐色（2.5Y6/6）細砂をブロック状に含む。
2a　にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）粘質土＋黄灰色粘質土（2.5Y4/1）マーブル状　粘性中、しまり中　下半に層状の2c層が互層で混じる。
2b　灰色粘質土（7.5Y4/1）・にぶい黄色粘質土（2.5Y6/4）・緑灰色細砂（7.5GY6/1）の互層　有機物を含む。炭化物を少量、西側に集中して拳大～人頭大の礫を含む。
2c　黄褐色（2.5Y5/6）・緑灰色（7.5GY5/1）中砂～小礫　粘性なし、しまり強

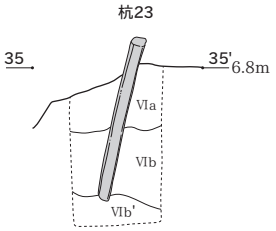


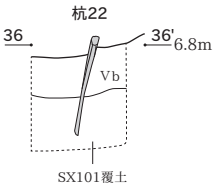


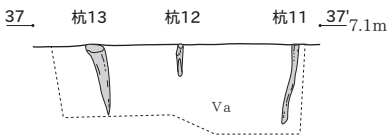
SX4
1　黒褐色シルト（10YR3/1）粘性弱、しまり強。粗砂をわずか、地山（V層）をマーブル状に多く、拳大前後の礫わずか、
径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。
SX102b
1　青灰色粘質シルト（5BG5/1）　粘性強、しまり強。径1mmの炭化物をごくわずか含む。
2　緑灰色シルト（5G5/1）　粘性中、しまり強。粗砂を極めて多く含む。
3a　灰色粘質シルト（7.5Y5/1）　粘性強、しまり強。径1～10mmの炭化物を多く、粗砂をわずか含む。
3b　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。

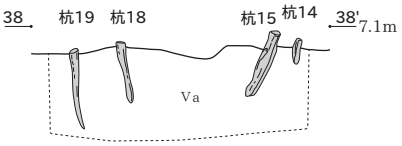
P9
1　黄灰色粘質シルト（2.5Y4/1）
粘性強、しまり強。粗砂わずか、
径1～3mmの炭化物を多く含む。
2　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）
粘性強、しまり強。径1～5mmの炭化物
わずか、粗砂をごくわずか含む。

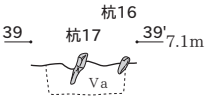


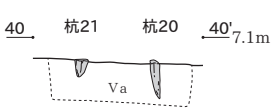


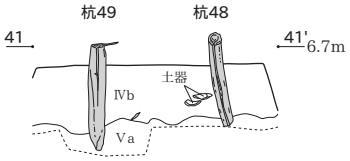






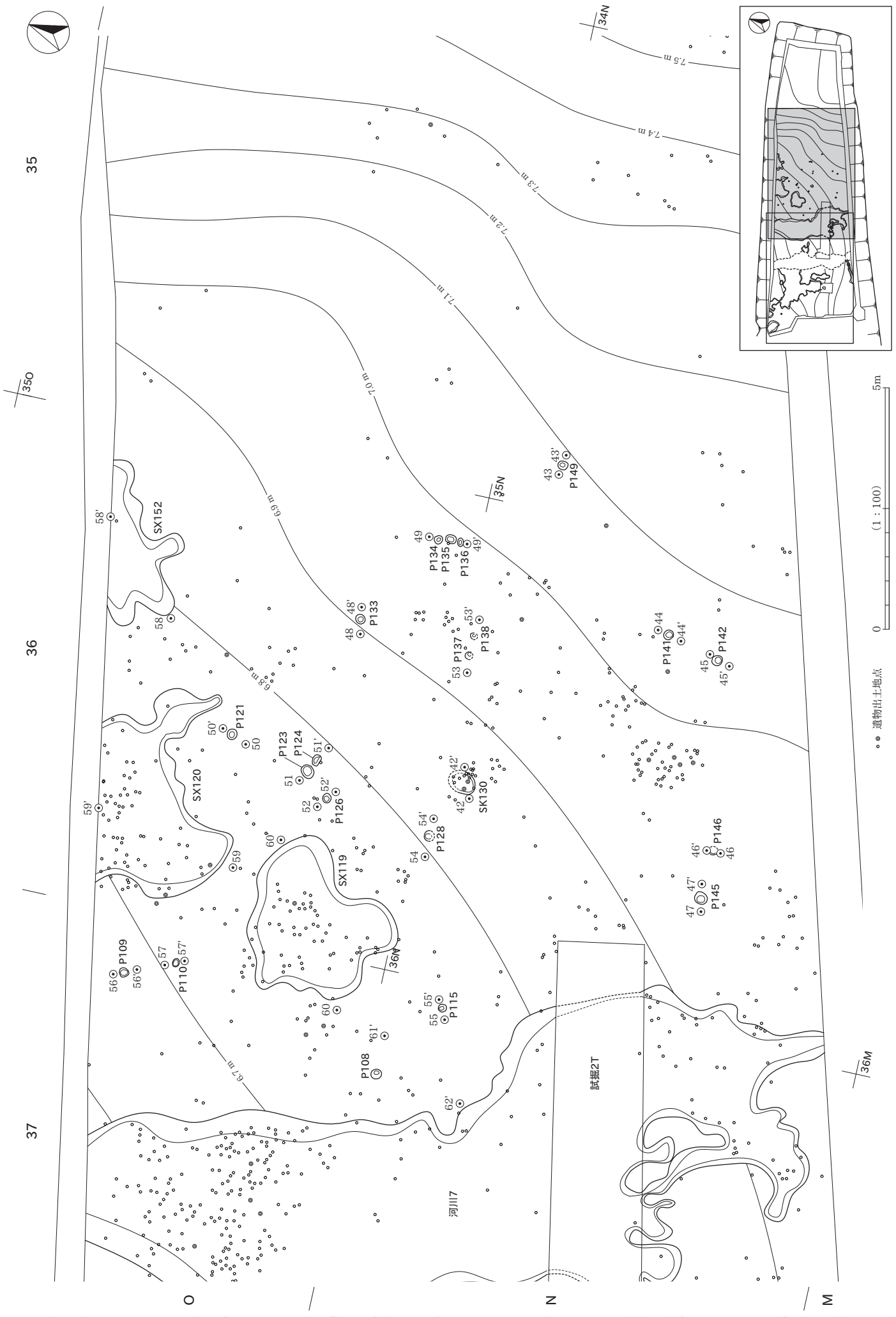


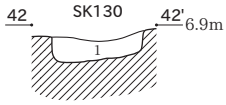




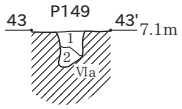
0　30～33（1：40）　2m

0　34～41（1：20）　1m

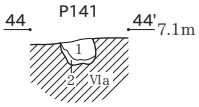

35
36
37
O
N
M
34N
35N
35O
36N
36M
7.5 m
7.4 m
7.3 m
7.2 m
7.1 m
7.0 m
6.9 m
6.8 m
6.7 m
SX152
SX120
SX119
SK130
P108
P109
P110
P115
P121
P123
P124
P126
P128
P133
P134
P135
P136
P137
P138
P141
P142
P145
P146
P149
試掘2T
河川7
0
(1 : 100)
5m
遺物出土地点



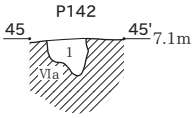
SK130
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）粘性強、しまり強。
地山をマーブル状に極めて多く、径1～2mmの
炭化物をごくわずか含む。



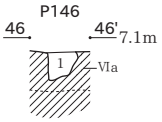
P149
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～2mmの炭化物をわずか、地山をマーブル状
にわずか含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1mmの炭化物をごくわずか、地山をマーブル
状に多く含む。



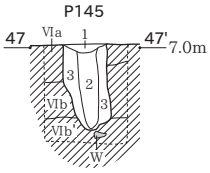
P141
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～2mmの炭化物をわずか、地山をブロック状にわずか含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1mmの炭化物をごくわずか、地山をマーブル状に多く含む。



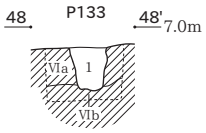
P142
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1mmの炭化物をごくわずか、地山をマーブル状に
極めて多く含む。



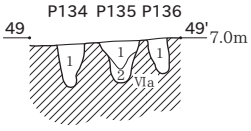
P146
1　灰色（5Y5/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。
径1～2mmの炭化物を多く、地山をマーブル状に
わずか含む。



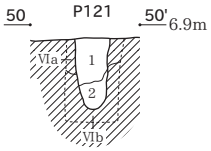
P145
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。径1～2mmの
炭化物をごくわずか、地山をマーブル状にわずか含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。径1～5mmの
炭化物ごくわずか、地山をマーブル状にごくわずか含む。
3　オリーブ灰色粘質シルト（5GY5/1）　粘性強、しまり強。
灰色（5Y4/1）粘質シルトをマーブル状にわずか、
粗砂をごくわずか含む。



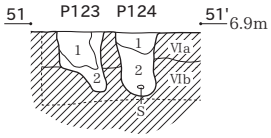
P133
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
地山（VIa層）をマーブル状にわずか、径2mmの
炭化物をごくわずか含む。



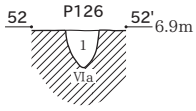
P134，P135，P136
P134-1 灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～10mmの炭化物をごくわずか、
地山をマーブル状にわずか含む。
P135-1 灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～3mmの炭化物をごくわずか、
地山をマーブル状にわずか含む。
P135-2 灰色粘質シルト（5GY5/1）粘性強、しまり強。
灰色粘質シルトをマーブル状に多く含む。
P136-1 灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～3mmの炭化物をごくわずか、
地山をマーブル状に多く含む。



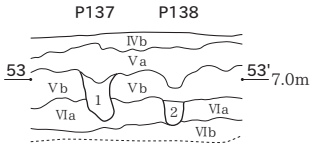
P121
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
地山をマーブル状にわずか、径1～5mmの炭化物を
わずかに含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
地山をマーブル状に多く含む。



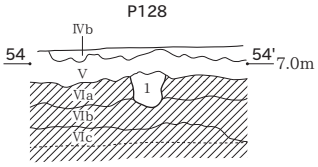
P123
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～3mmの炭化物をごくわずか、地山（VIa層）を
マーブル状にわずか含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
地山（VIa層）をマーブル状に極めて多く含む。
P124
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1mmの炭化物をごくわずか、地山（VIa層）を
マーブル状にわずか含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～5mmの炭化物をわずか、地山（VIa層）を
マーブル状にわずか含む。



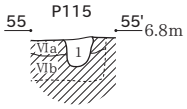
P126
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～5mmの炭化物をわずか、粗砂をごくわずか、
地山をマーブル状にわずか含む。



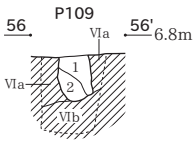
P137，P138
P137-1　緑灰色粘質シルト（5G5/1）　粘性強、しまり強。
径1mmの炭化物をごくわずか含む。Va層に近似。
P138-1　Vb層が落ち込んだものであるが、若干暗みを帯びた色調。



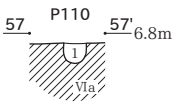
P128
1　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）
粘性強、しまり強。径1～2mmの炭化物を
ごくわずか含む。



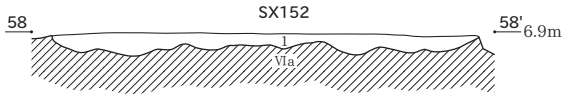
P115
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、
しまり強。
地山をマーブル状に多く、径1～2mmの
炭化物をごくわずか含む。



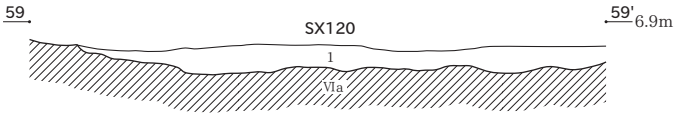
P109
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
地山をマーブル状にわずか、径1～2mmの炭化物を
ごくわずか含む。
2　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
地山をマーブル状に極めて多く、径2mmの炭化物を
ごくわずか含む。



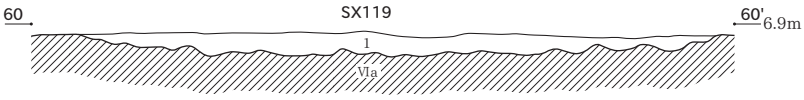
P110
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）
粘性強、しまり強。
地山をマーブル状に多く含む。



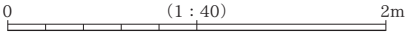
SX152
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。径1～2mmの炭化物をごくわずか、
地山をマーブル状に多く含む。

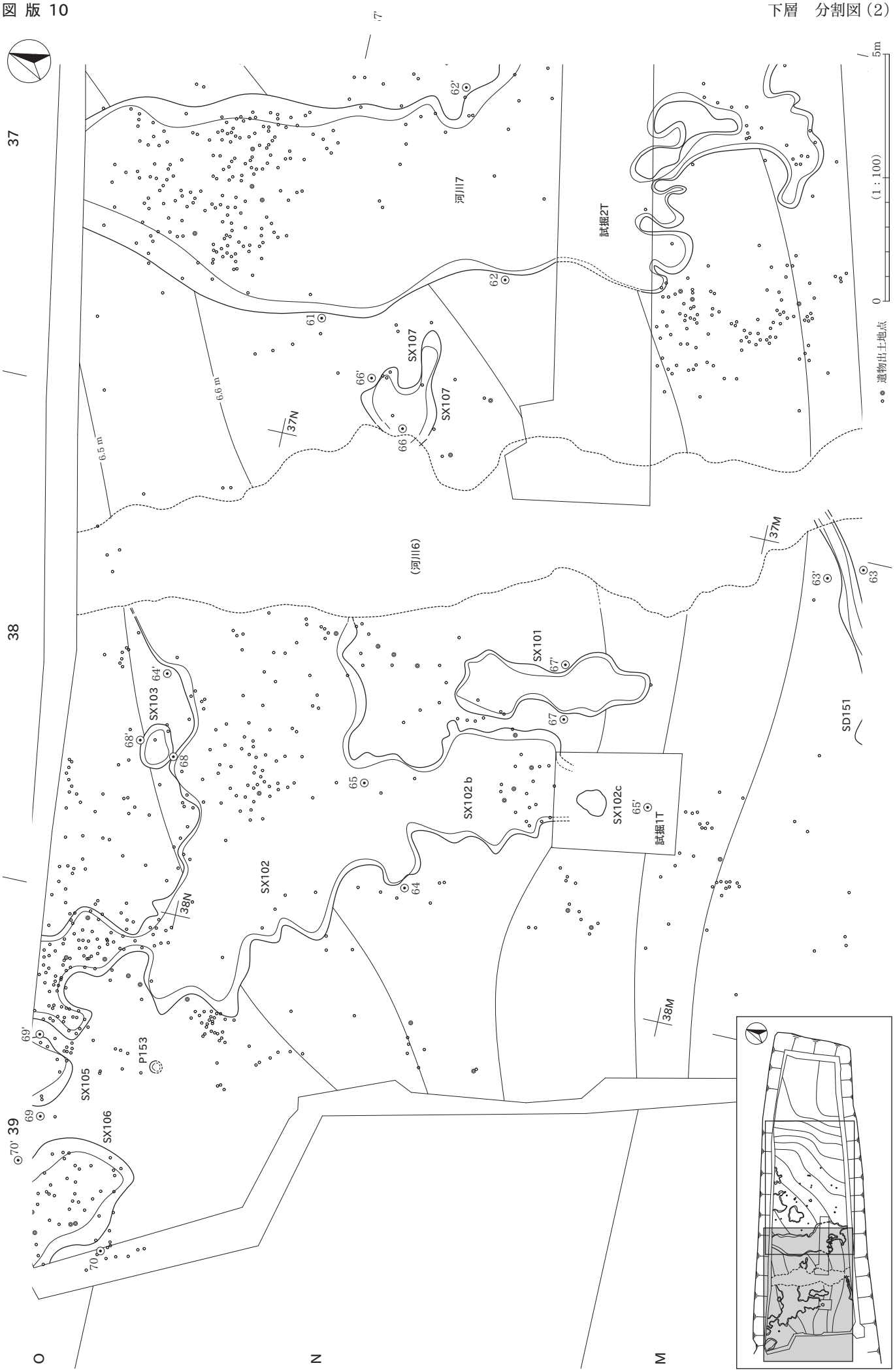


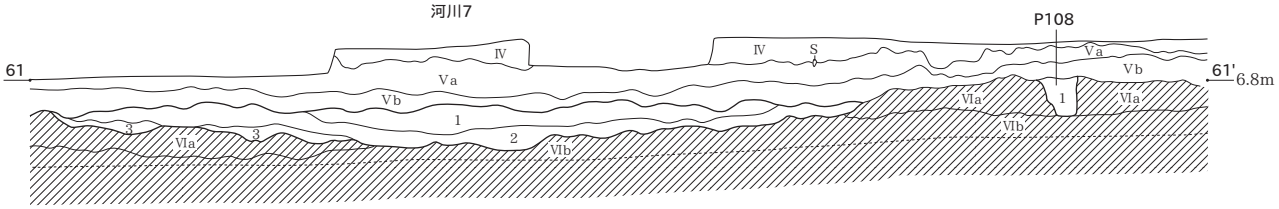
SX120
1　灰色（5Y4/1）～オリーブ灰色（5GY5/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。
径1～3mmの炭化物を多く、地山をマーブル状に多く含む。



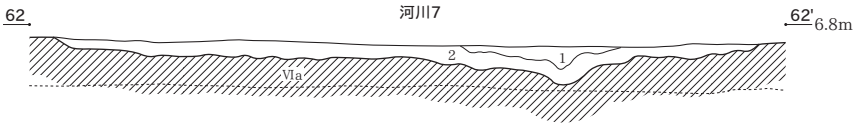
SX119
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。径1～10mmの炭化物をごくわずか、地山をマーブル状に多く含む。



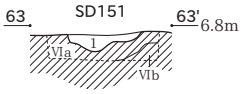

37
38
39
O
N
M
7'
62'
62
61
河川7
試掘2T
SX107
66'
66
6.6 m
6.5 m
37N
(河川6)
37M
63'
63
SX101
67'
67
SX103
64'
68'
68
65
SX102 b
SX102c
65'
試掘1T
SD151
SX102
64
38N
38M
69'
69
SX105
P153
SX106
70'
70
遺物出土地点
0
(1：100)
5m



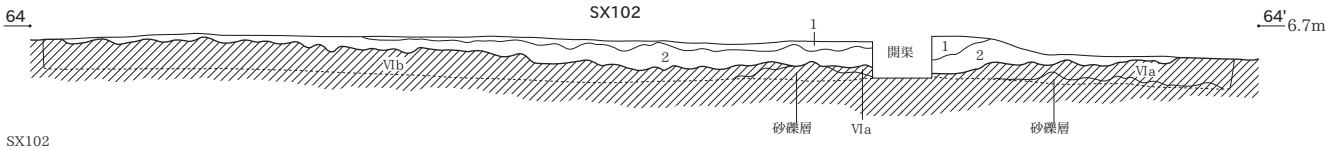
河川7
1　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～5mmの炭化物をわずかに含む。特に下位に多い。Va層に近似するが色調がやや暗め。
2　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。Vb層に近似するが色調がやや暗め。
3　黄褐色（2.5Y5/4）を基調とする粗砂　粘性なし、しまり強。地山をマーブル状にわずかに含む。
P108
1　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。



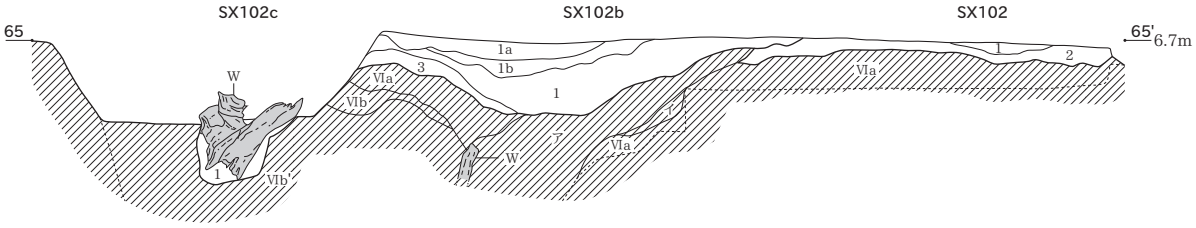
河川7
1　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～10mmの炭化物をわずかに含む。
2　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。



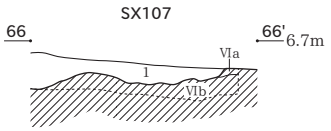
SD151
1　オリーブ灰色粘質シルト（5GY5/1）
粘性強、しまり強。粗砂・径1mmの
炭化物をごくわずか含む。



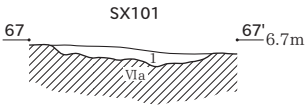
SX102
1　灰色シルト（5Y4/1～5Y5/1）　粘性弱、しまり強。粗砂を極めて多量に、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。
2　灰色（5Y4/1）～オリーブ灰色（5GY5/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。細・粗砂、径1～10mmの炭化物をわずか、地山をマーブル状に多く含む。



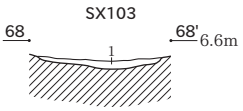
SX102
1　灰色シルト（5Y4/1～5Y5/1）　粘性弱、しまり強。粗砂を極めて多く、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。
2　灰色（5Y4/1）～オリーブ灰色（5GY5/1）　粘質シルト粘性強、しまり強。細・粗砂わずか、径1～3mmの炭化物をわずかに含む。
SX102b
1a　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。径1～3mmの炭化物をごくわずか含む。
1b　オリーブ灰色（2.5GY5/1）～灰色（5Y5/1）シルト　粘性弱～中、しまり強。粗砂をわずかに含む。
2　緑灰色粗砂～シルト（5G5/1）　粘性なし～弱、しまり強
3　灰色（5Y5/1）～オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘質シルト　粘性強、しまり強。1～5mmの炭化物をわずかに含む。
SX102c
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘質強、しまり弱。径1～20mmの炭化物をわずかに含む。
ア　撹乱黒褐色（2.5Y3/1）～灰色（5Y4/1）　粘質シルト粘性強、しまり強。炭化物を多く、腐植物をわずか含む。
イ　撹乱灰色粘質シルト（7.5Y5/1）　粘性強、しまり強。炭化物をわずかに含む。



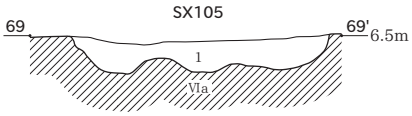
SX107
1　オリーブ灰色粘質シルト（5GY5/1）　粘性強、しまり強。
粗砂を多く、径1～2mmの炭化物をごくわずか含む。



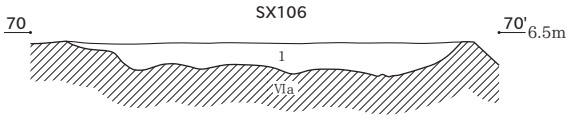
SX101
1　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）　粘性強、しまり強。
炭化物を極めて多く、粗砂をわずか含む。



SX103
1　灰色粘質シルト（7.5Y4/1）　粘性強、
しまり弱。地山をマーブル状に多く、
径1～5mmの炭化物をごくわずか含む。



SX105
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。
径1～5mmの炭化物をごくわずか、地山をマーブル状に多く含む。



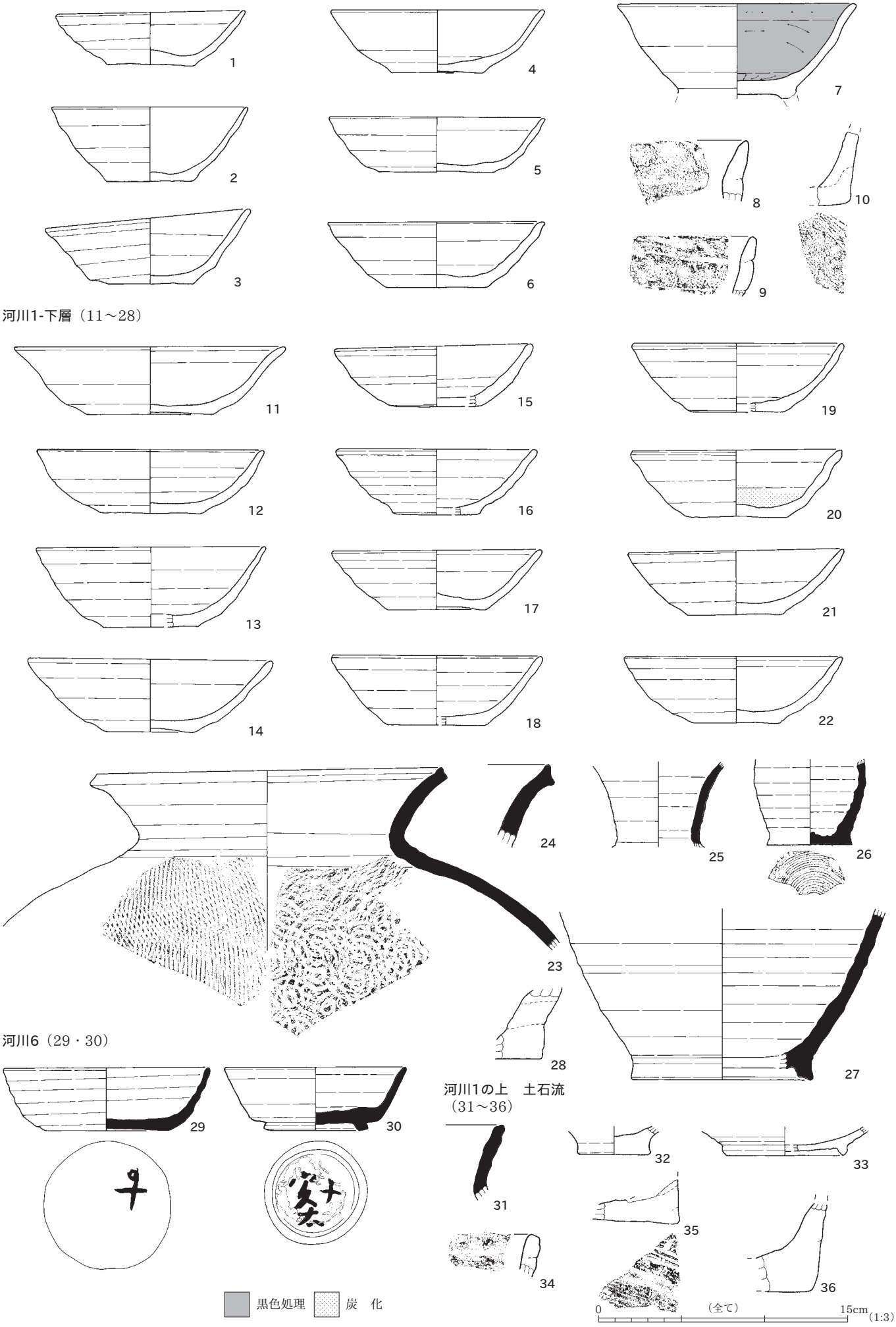
SX106
1　灰色粘質シルト（5Y4/1）　粘性強、しまり強。径2～30mmの炭化物をわずか、
地山をマーブル状に多く含む。

0　（1：40）　2m

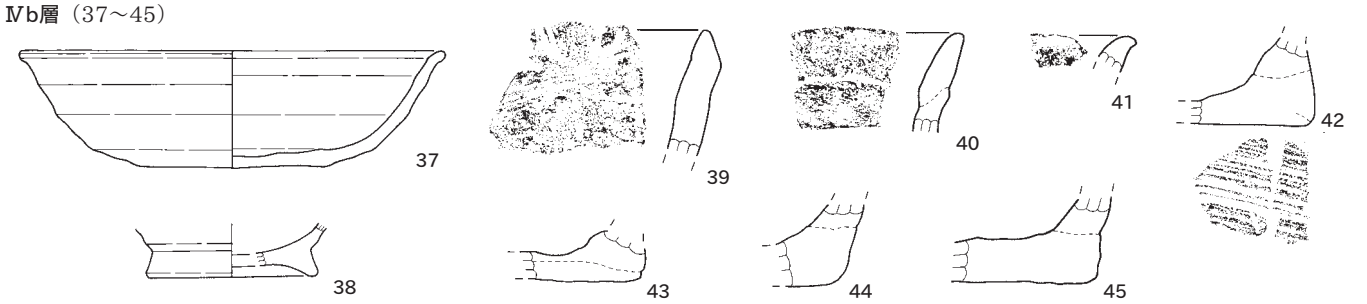
全体図（2）　下層

33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
Q
P
O
N
M
L
0
(1 : 400)
20m
2006年度調査区（報告済）
2007年度調査区　下層

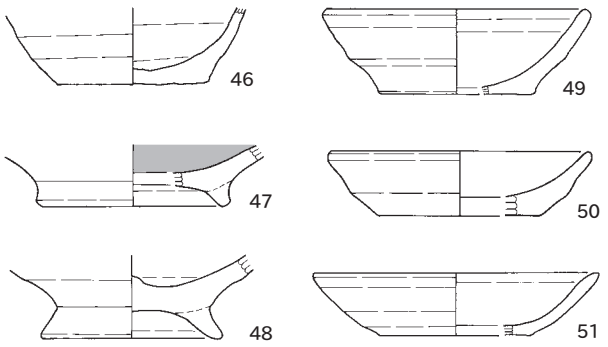
河川1-中層・中〜下層（1〜10）



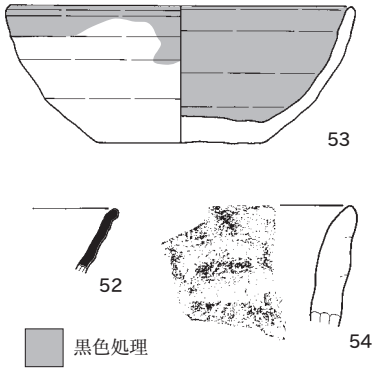
Ⅳb層（37～45）



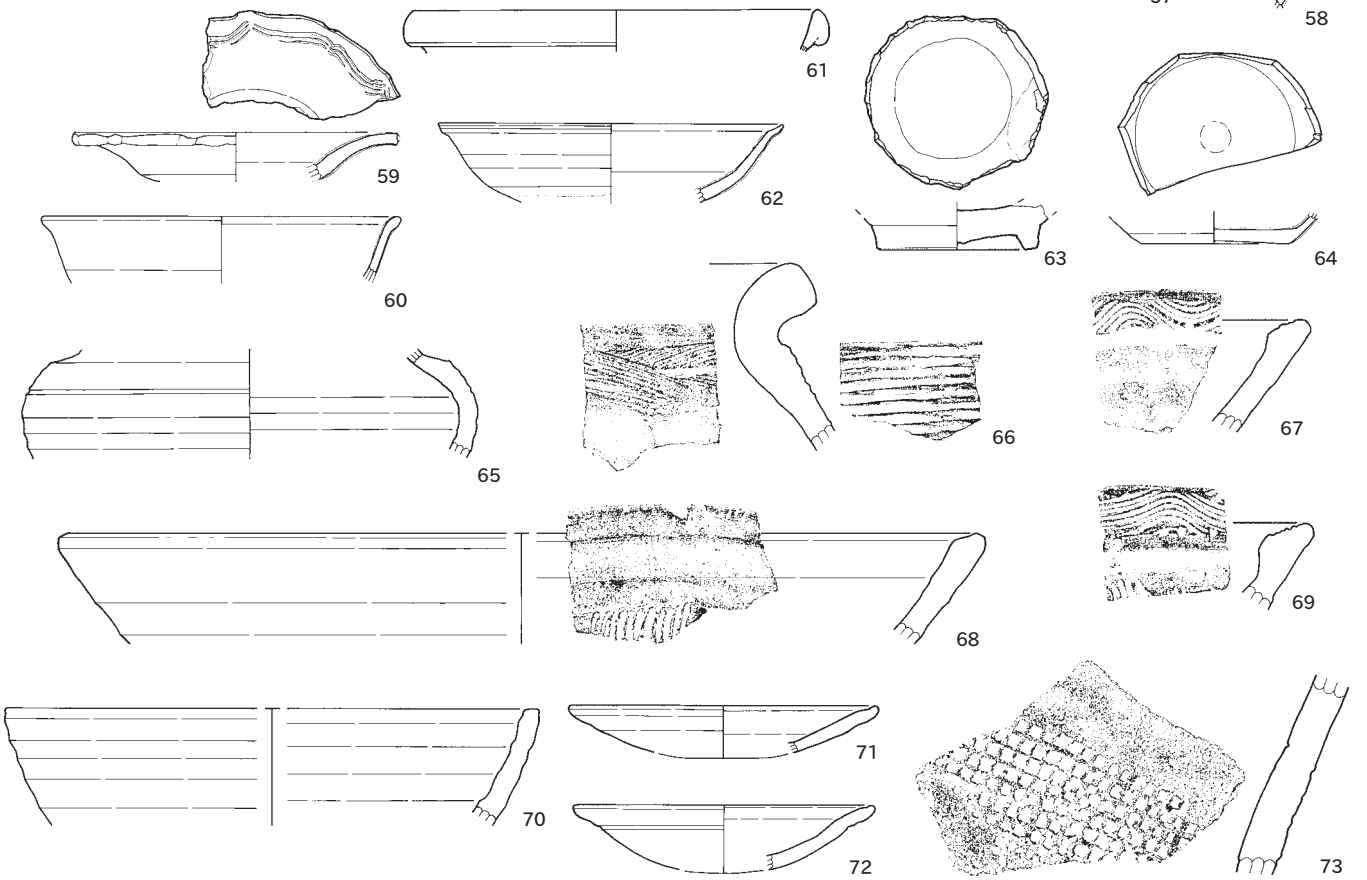
Ⅳ層（46～52）



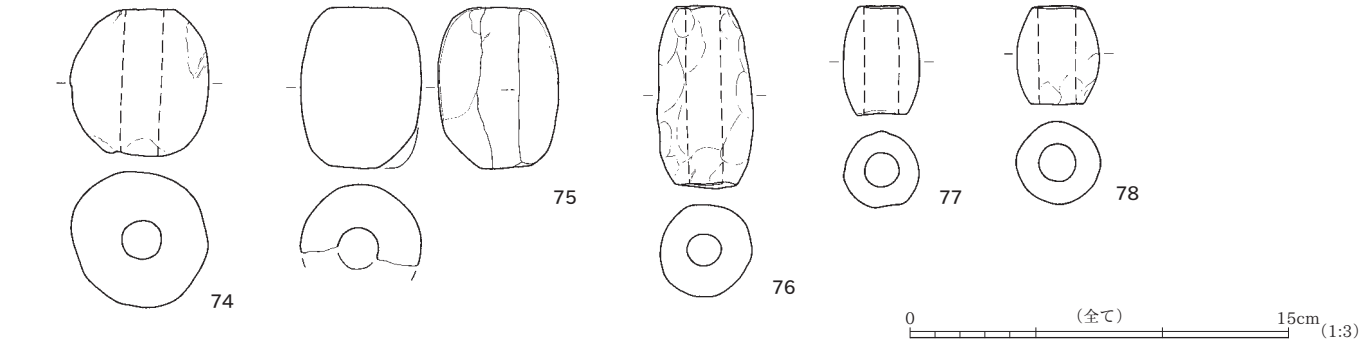
Ⅳa層（53・54）



中世（55～73）

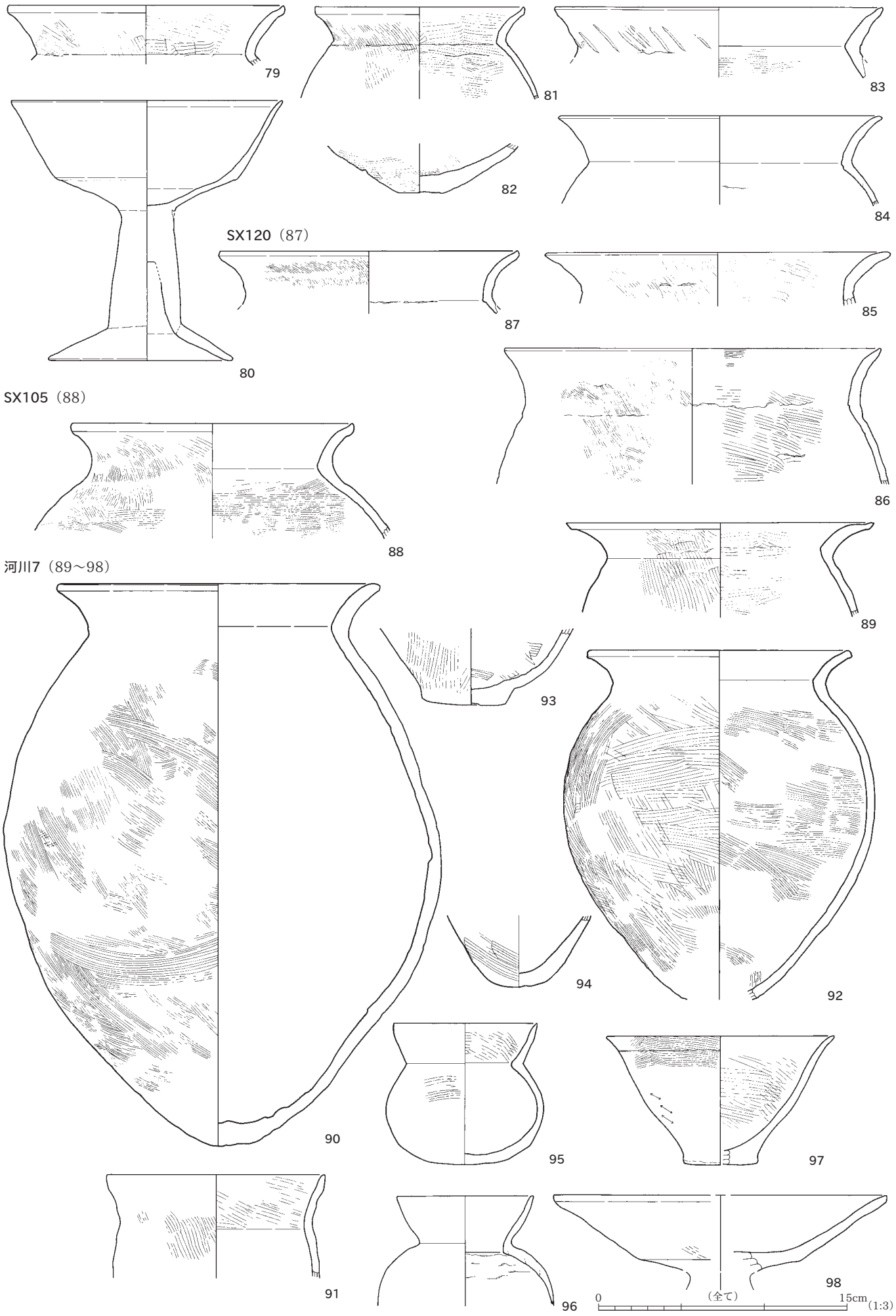


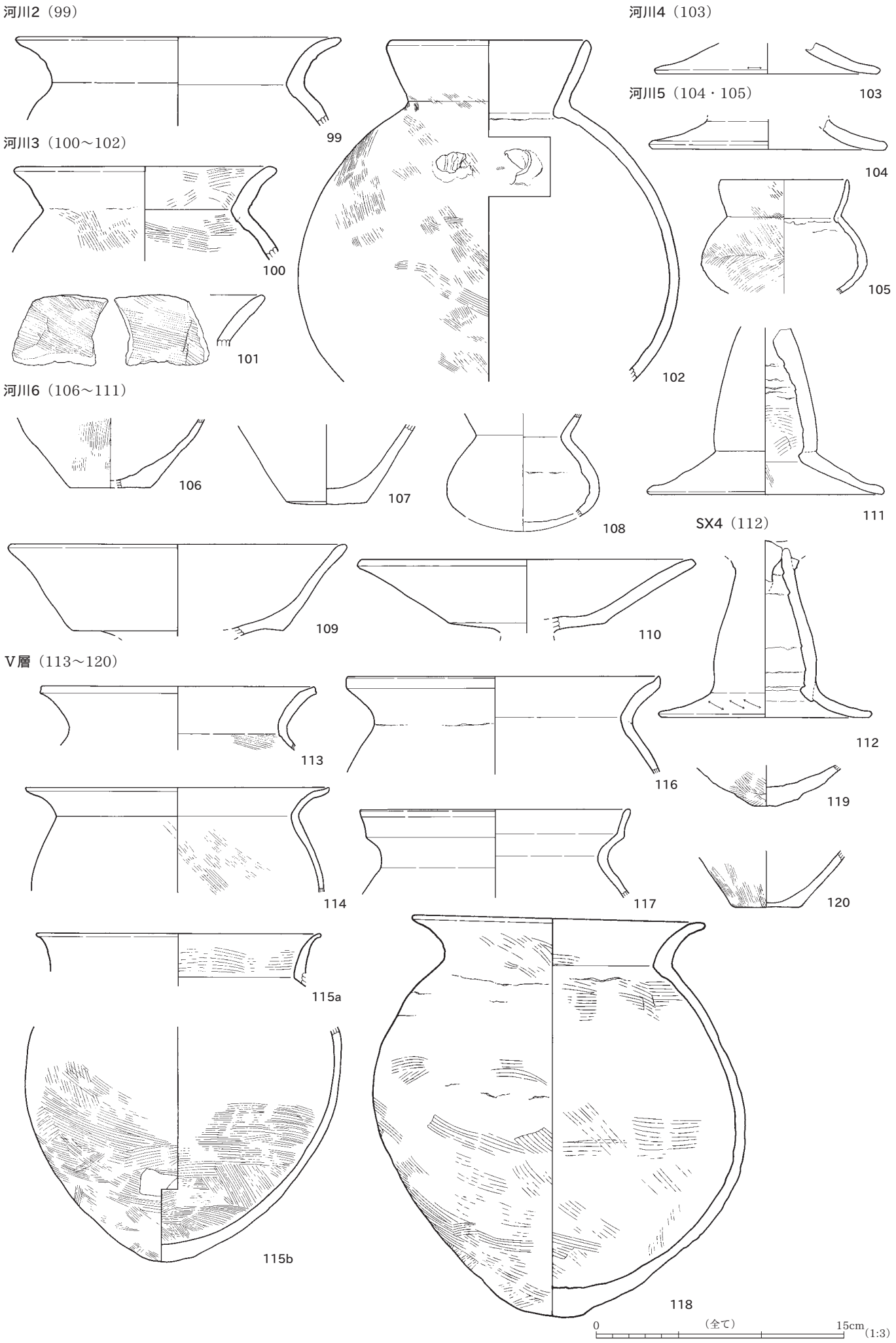
土製品（74～78）



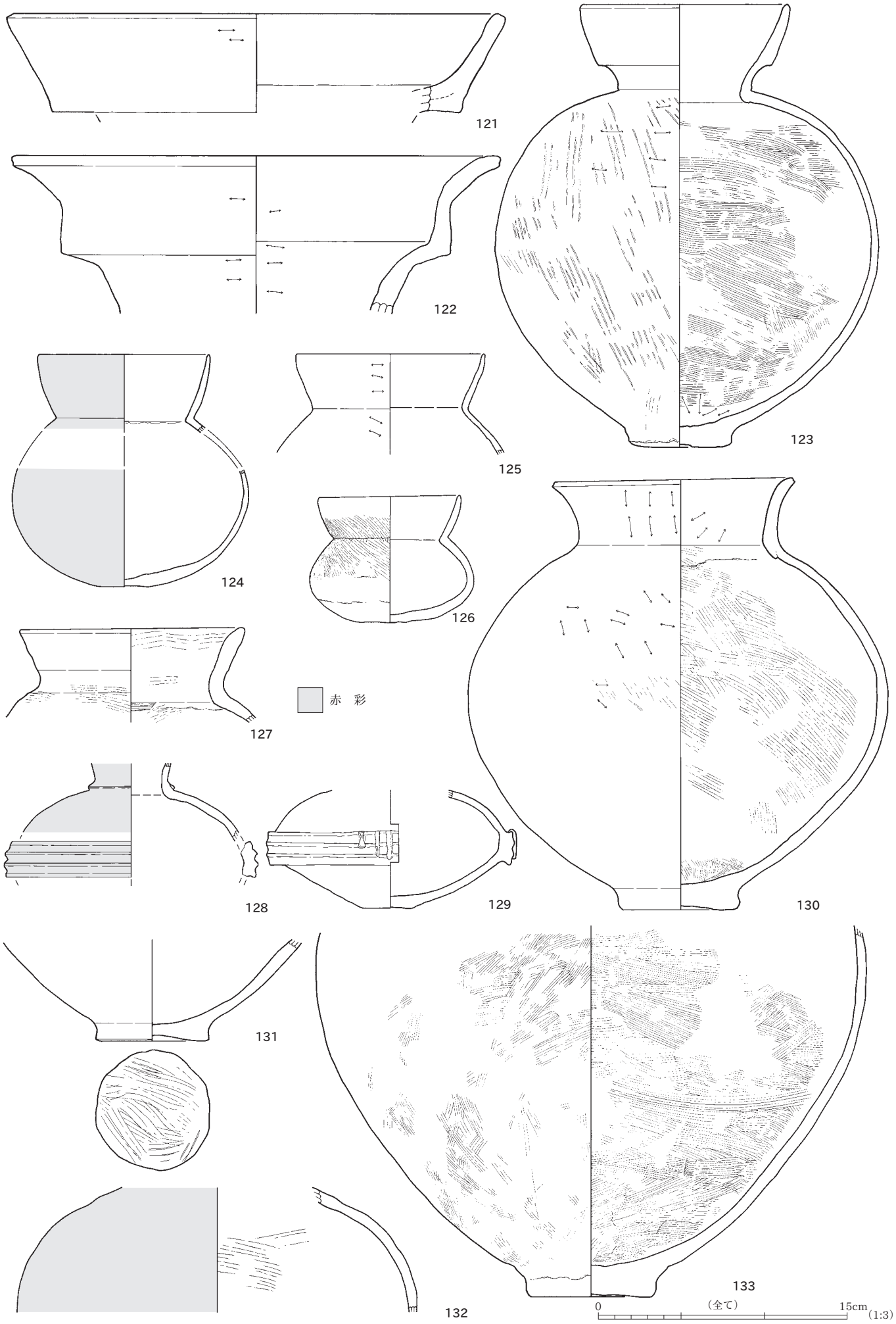
SX102（79・80）

SX106（81～86）

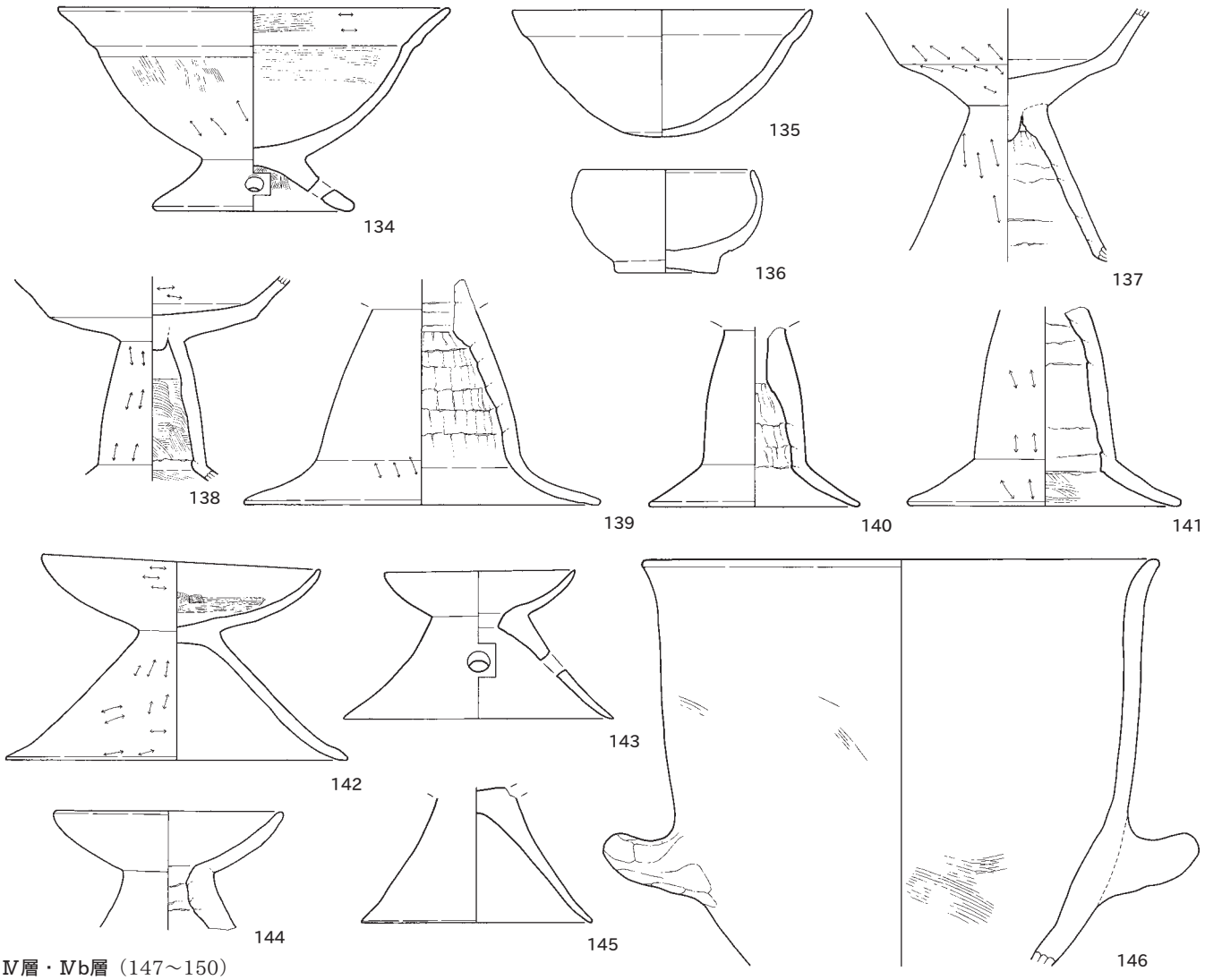



河川2（99）
99
河川3（100～102）
100
101
102
河川4（103）
103
河川5（104・105）
104
105
河川6（106～111）
106
107
108
109
110
111
SX4（112）
112
Ⅴ層（113～120）
113
114
115a
115b
116
117
118
119
120
0
（全て）
15cm
(1:3)

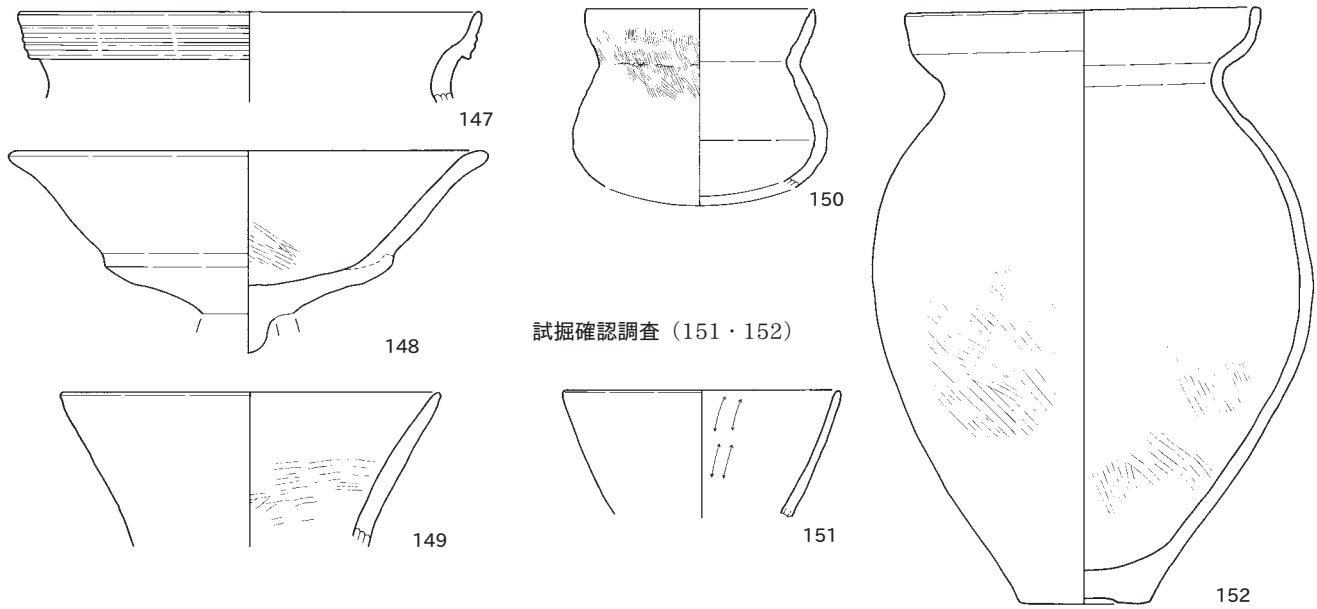
Ⅴ層（121～133）


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
赤 彩
0
15cm
（全て）
（1:3）

Ⅴ層（134～146）

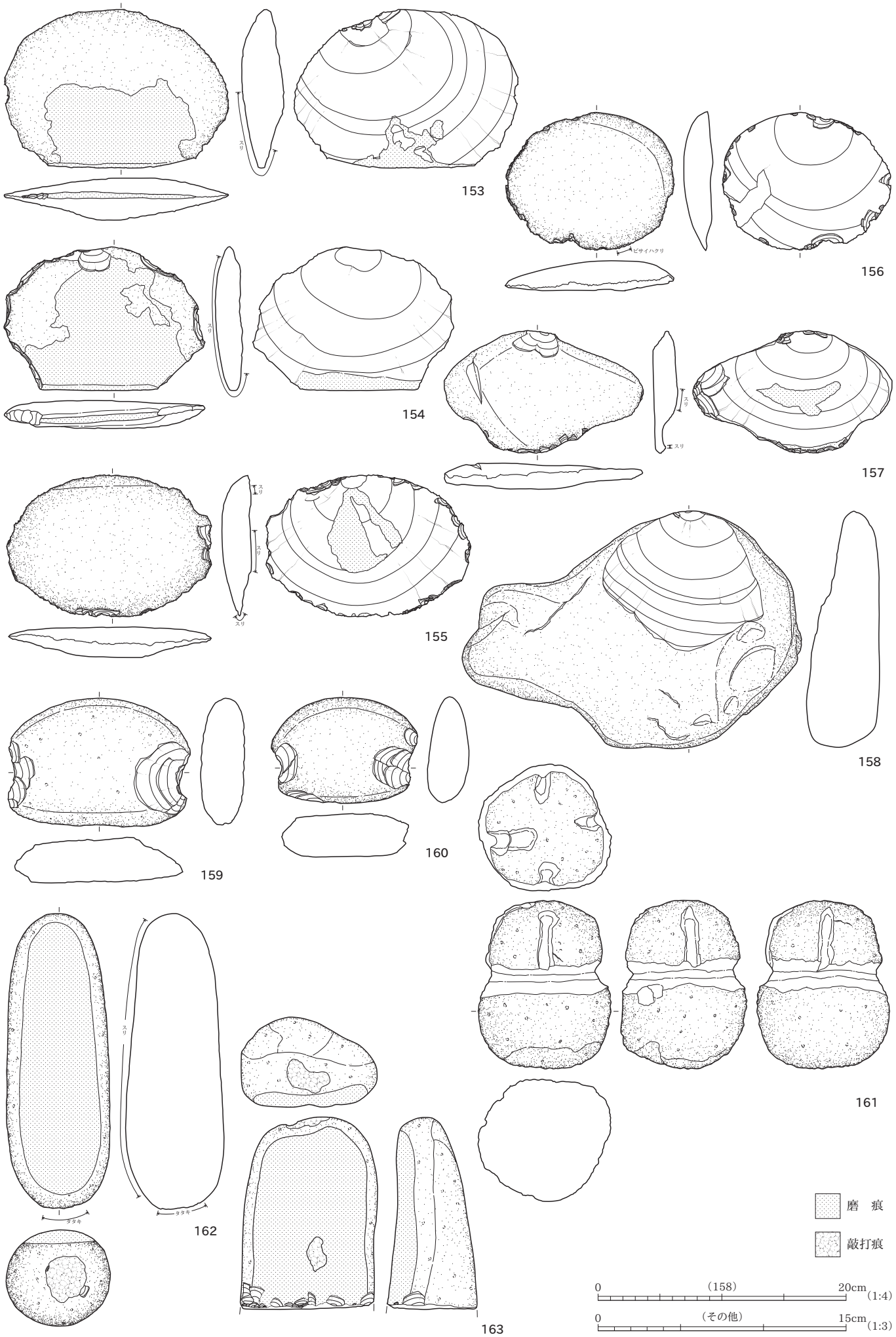


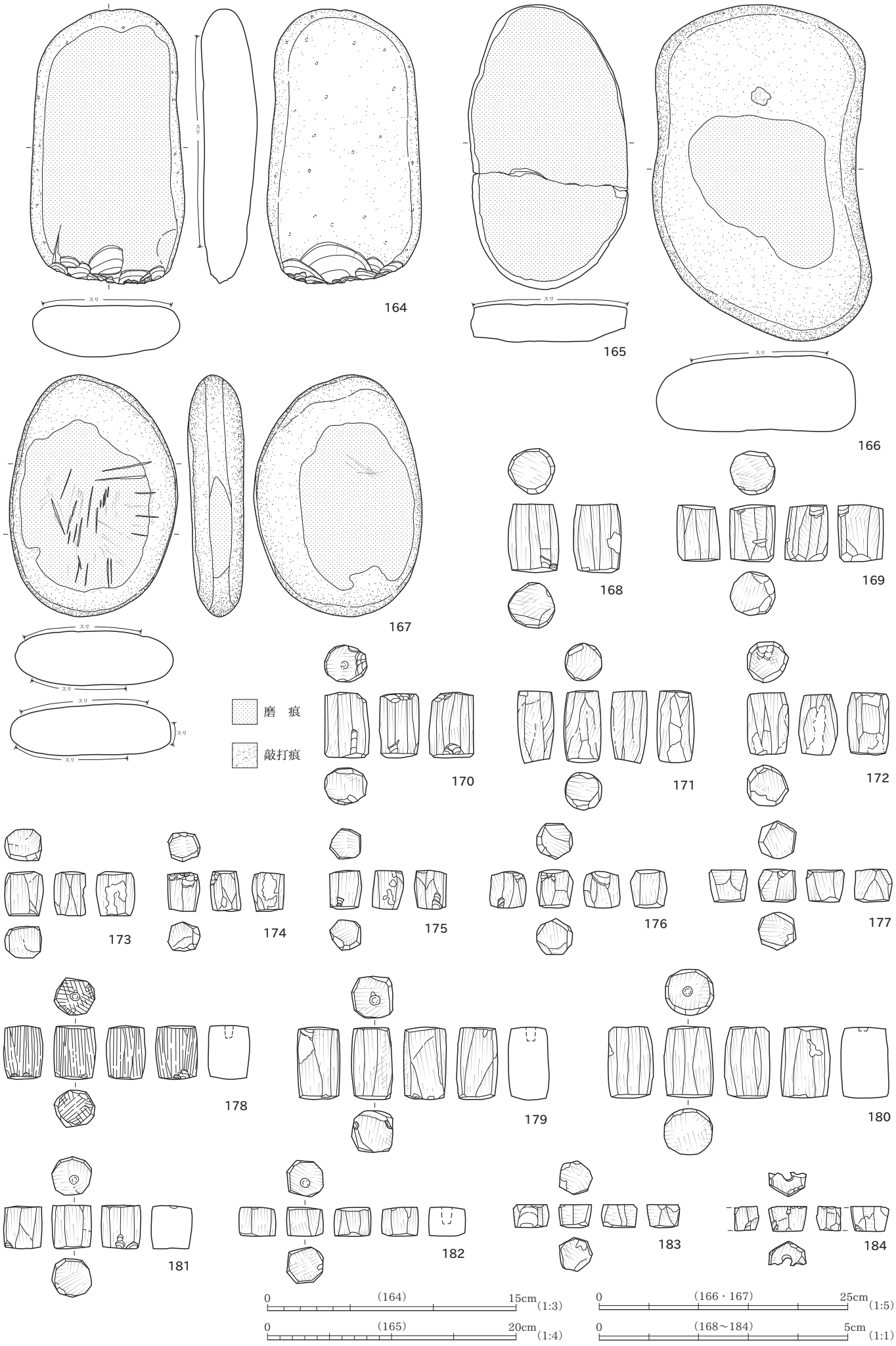
Ⅳ層・Ⅳb層（147～150）

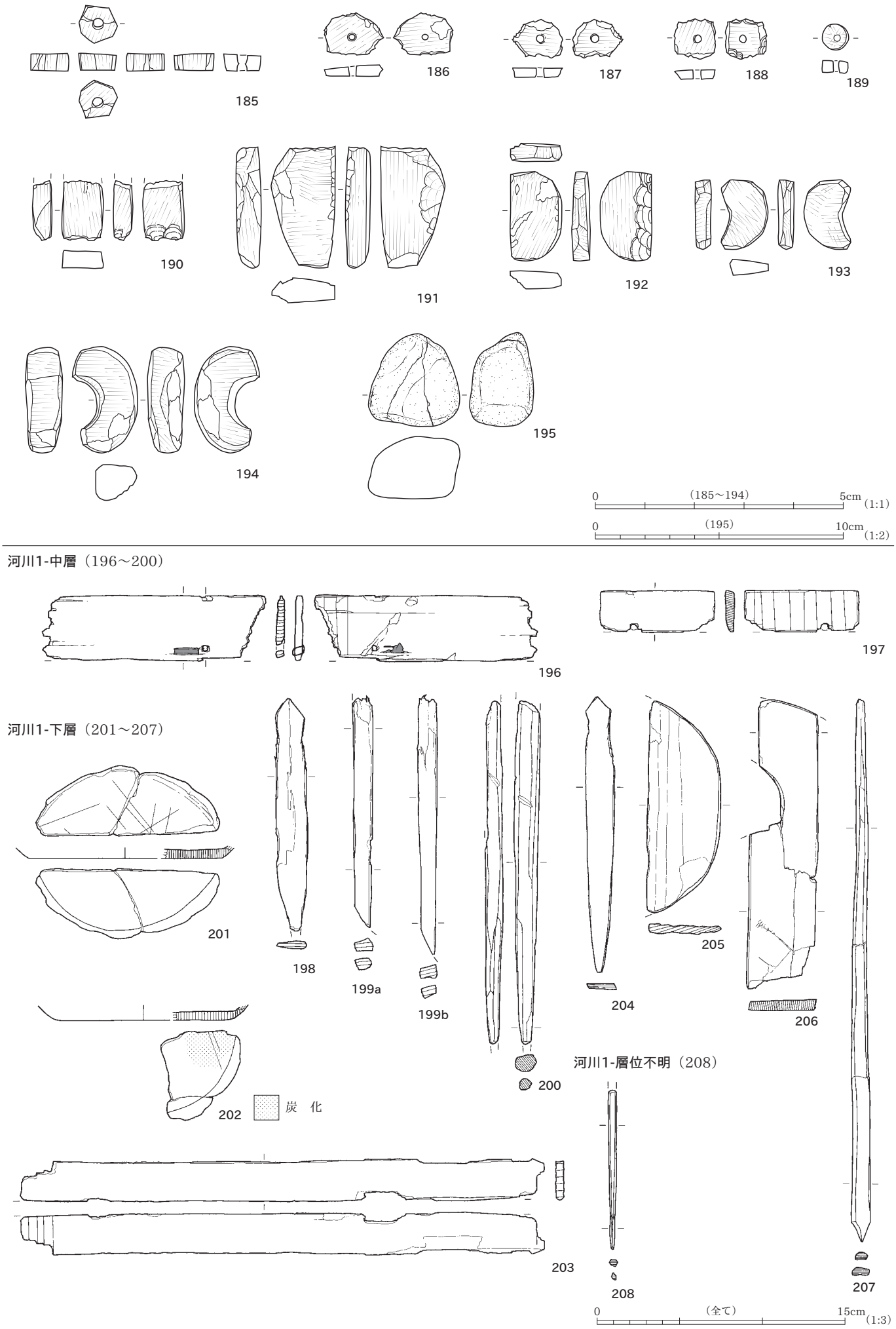


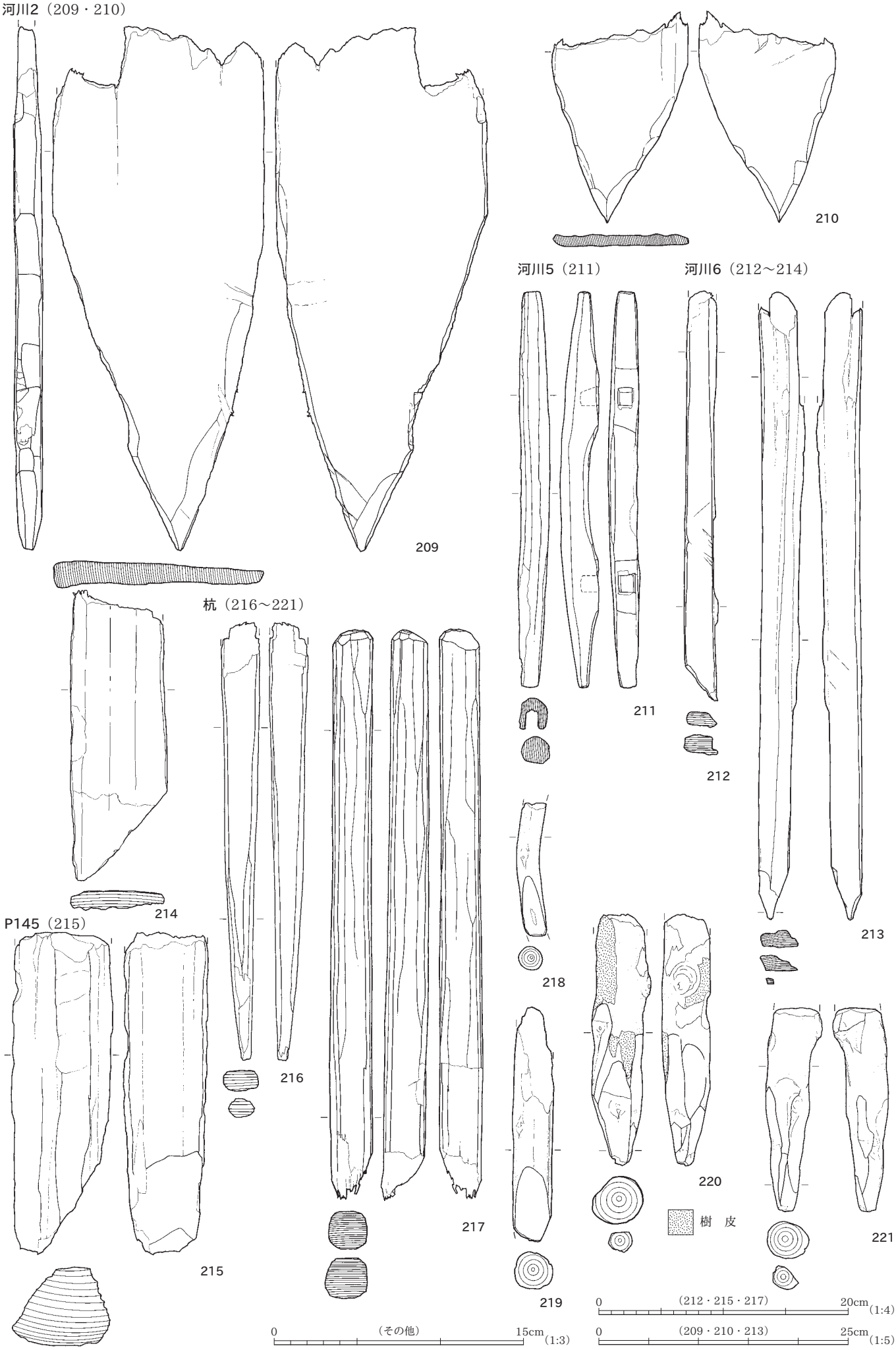
試掘確認調査（151・152）

0　（全て）　15cm（1:3）

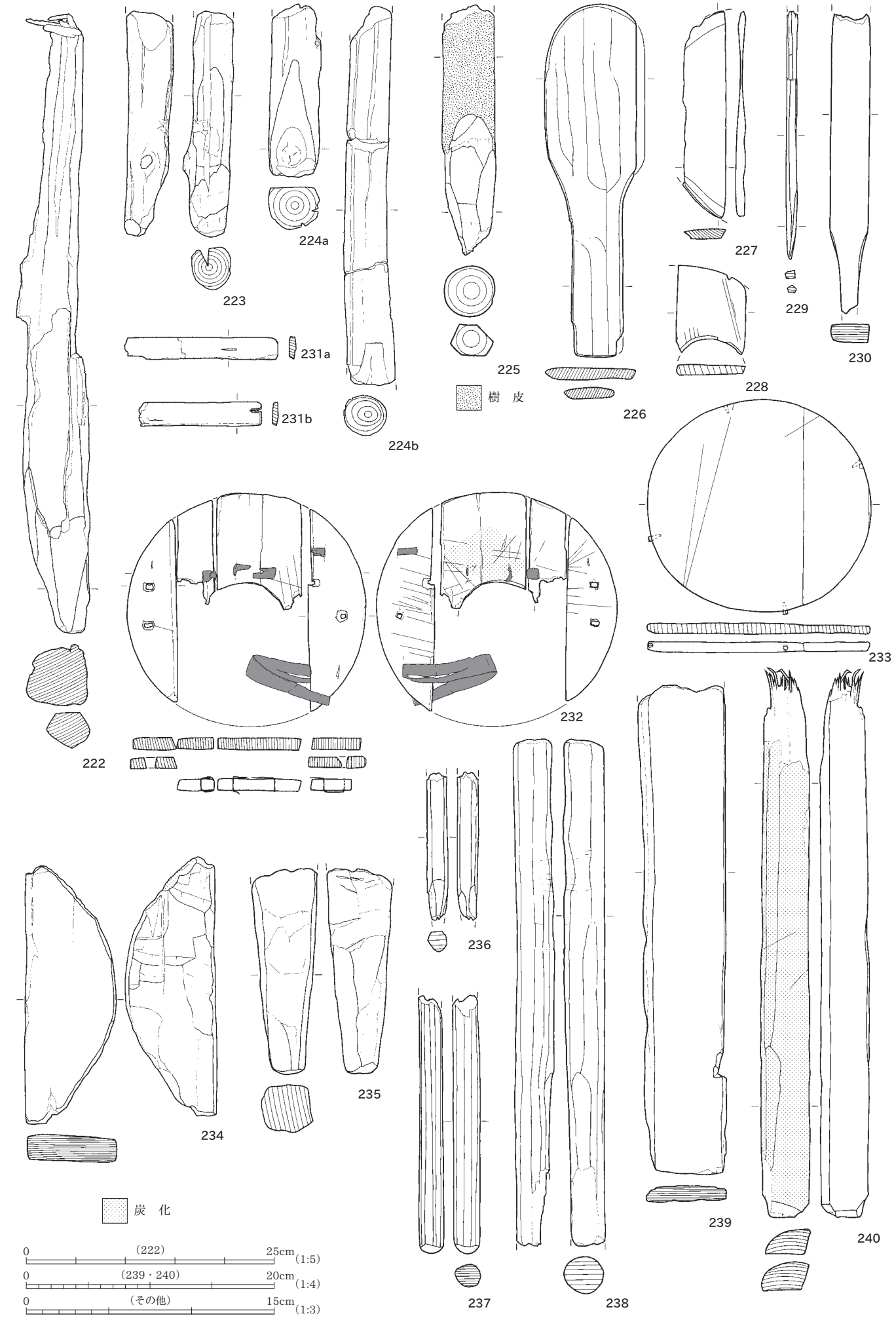

153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
スリ
ビサイハクリ
タタキ
磨　痕
敲打痕
0
(158)
20cm
(1:4)
0
(その他)
15cm
(1:3)


164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
磨　痕
敲打痕
スリ
0 (164) 15cm (1:3)
0 (165) 20cm (1:4)
0 (166・167) 25cm (1:5)
0 (168～184) 5cm (1:1)

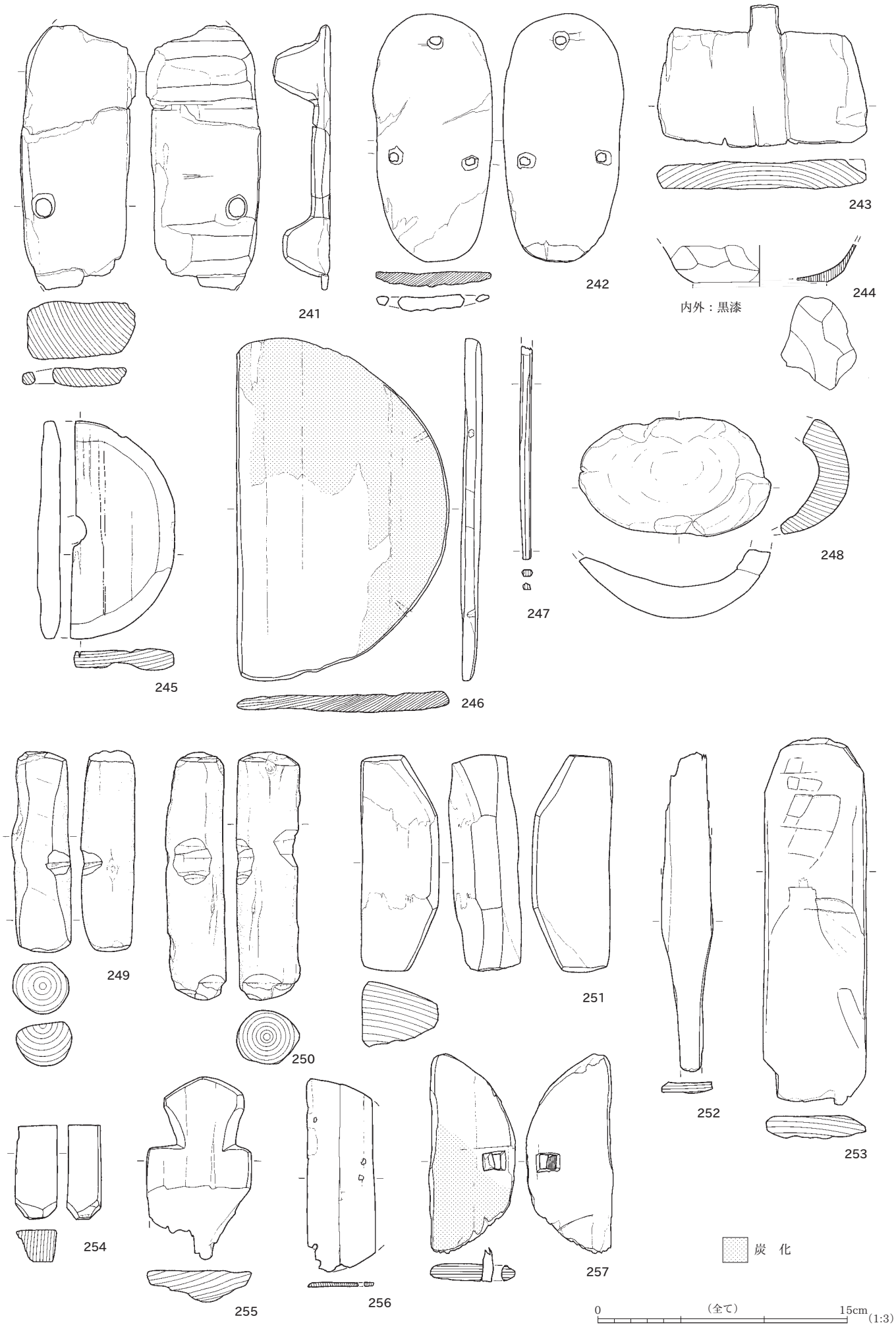

185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
0 (185～194) 5cm (1:1)
0 (195) 10cm (1:2)
河川1-中層（196～200）
196
197
河川1-下層（201～207）
201
198
199a
199b
200
204
205
206
202
炭 化
河川1-層位不明（208）
203
208
207
0 (全て) 15cm (1:3)


河川2（209・210）
209
210
河川5（211）
河川6（212～214）
211
212
213
杭（216～221）
214
P145（215）
215
216
217
218
219
220
221
樹 皮
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
（212・215・217）
20cm
(1:4)
0
（209・210・213）
25cm
(1:5)

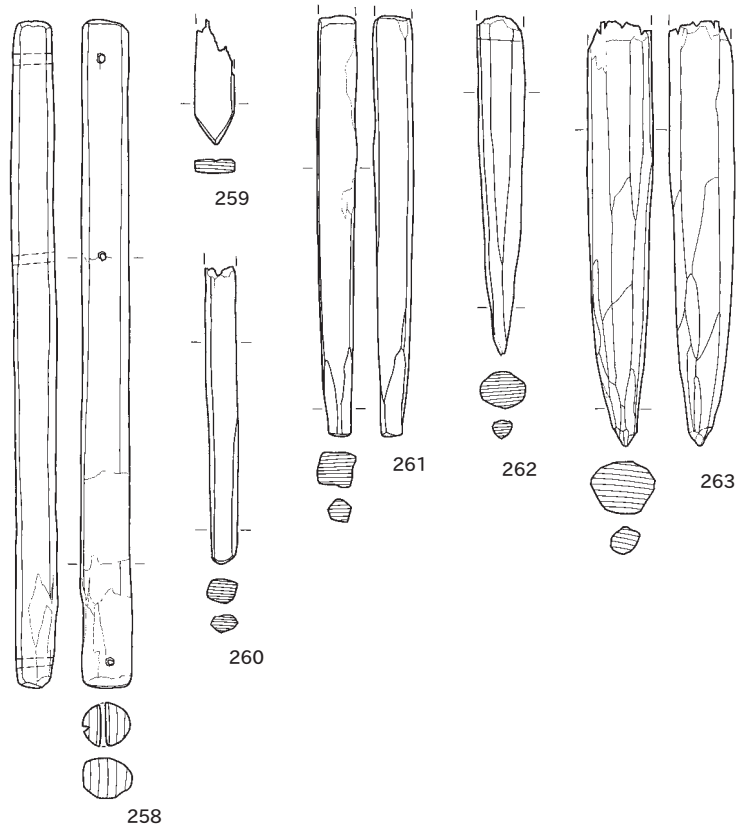
杭（222～225）　　Ⅳb層（226～240）



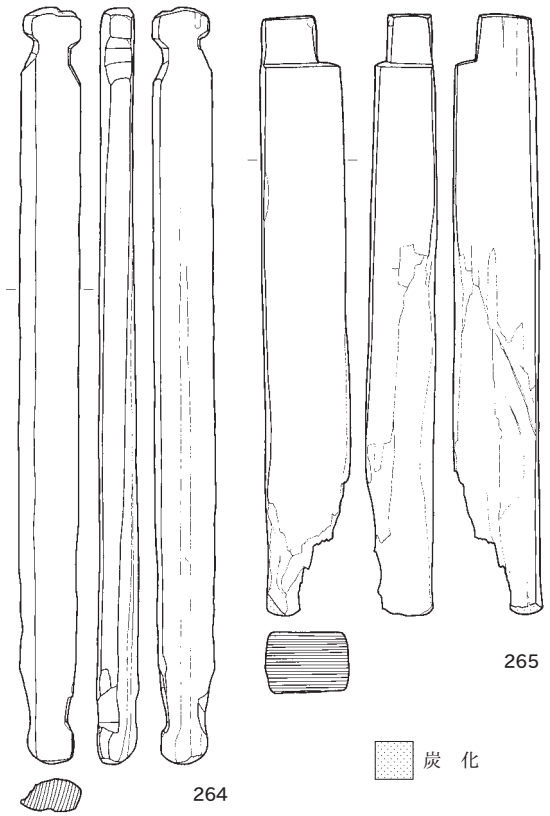
Ⅳ層（241～257）


241
242
243
244
内外：黒漆
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
炭　化
0
（全て）
15cm
(1:3)

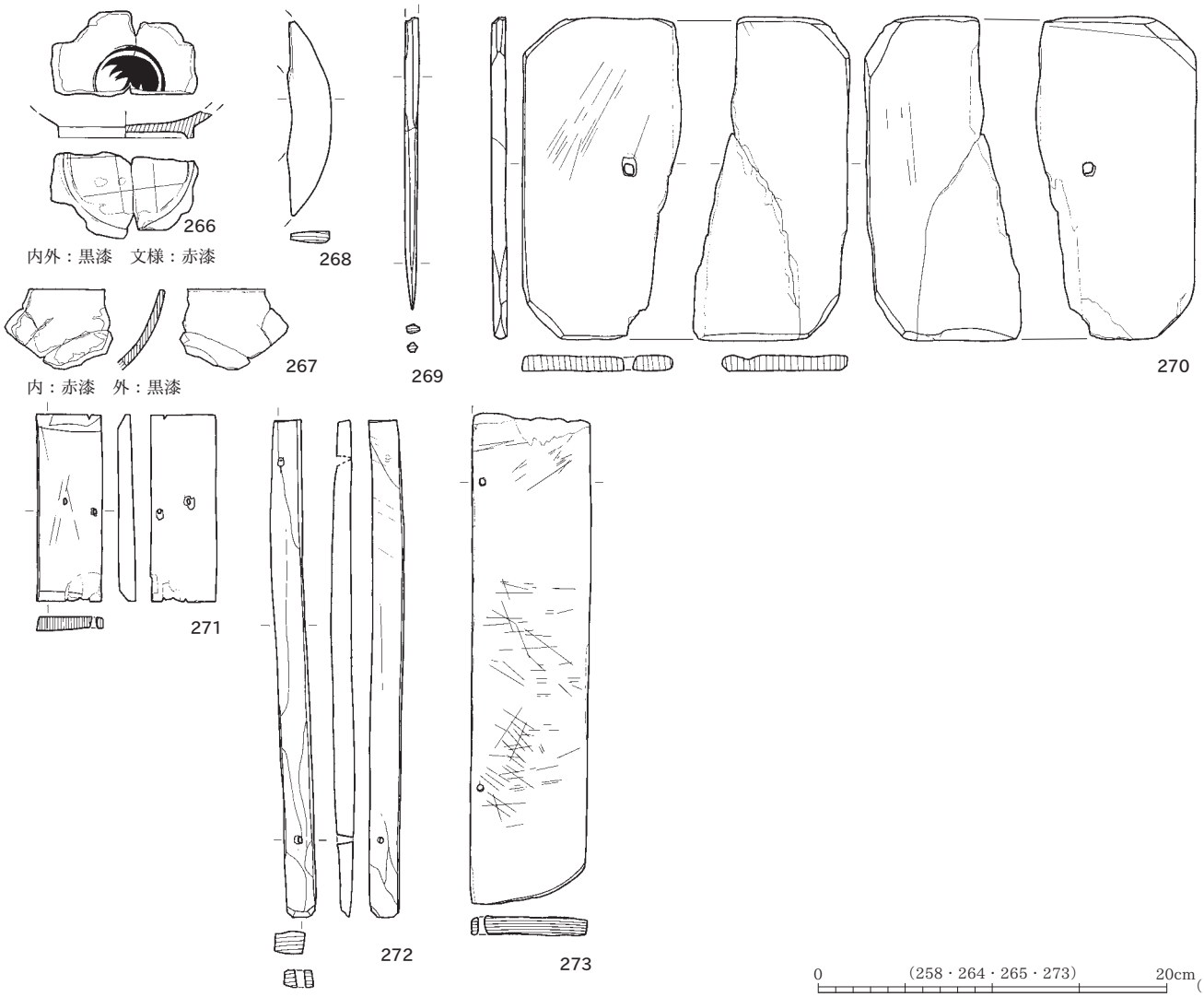
Ⅳ層（258～263）



Ⅳa層（264・265）



Ⅲ層（266～273）



0　（258・264・265・273）　20cm（1:4）

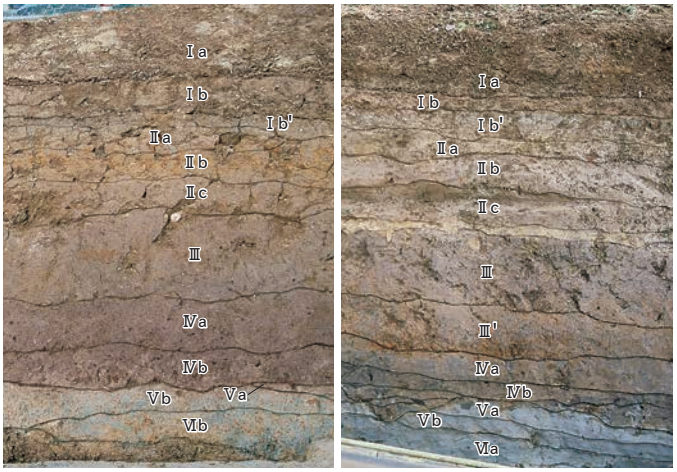
0　（その他）　15cm（1:3）

遺跡遠景（西から）

河川２　断面（北から）

河川６　断面（南西から）

河川２　完堀（北西から）



基本層序（左：35P グリッド , 右：37M グリッド）

下層　完堀（上から）

上層　完堀（南西から）

河川 1（33O）　土器（23）出土状況（北西から）

杭 46　断面（東から）

河川 7　遺物出土状況

34O25 土器・玉類未成品出土状況（南西から）

36N　土器（139）出土状況（東から）

古墳時代の土器

古代の土器

玉類未成品

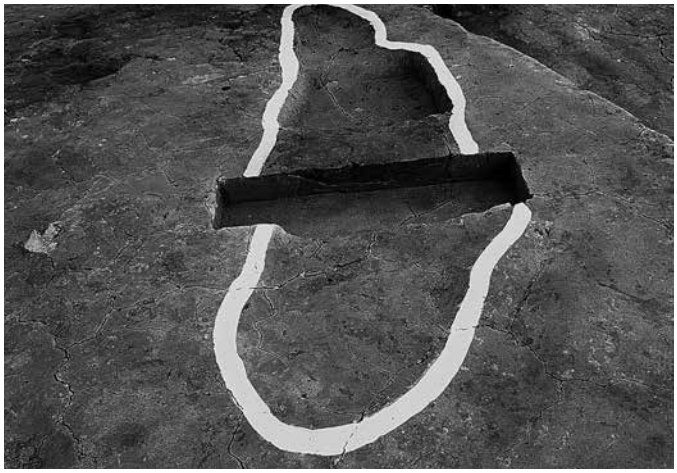
墨書土器

棗玉未成品　穿孔部断面

P9　断面（西から）

P9　完堀（西から）

SD10　断面（西から）



SX2　断面（西から）

SX4・SX102b　断面（南東から）

河川 1　断面（北から）

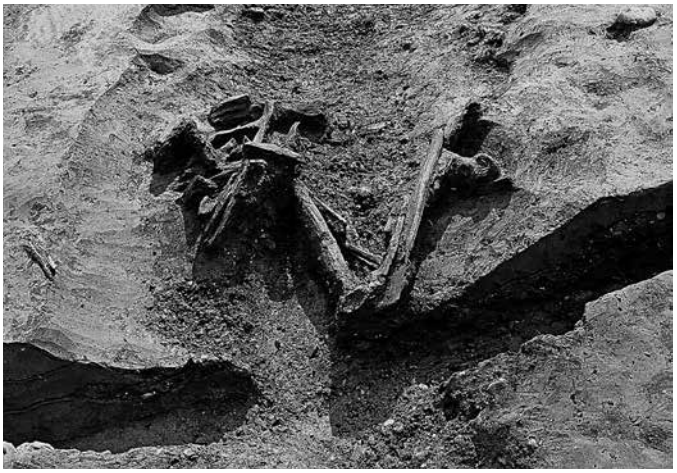
河川 1・2　断面（北西から）

河川 1（34O）　土器（14）出土状況（南西から）

河川１（34O）　土器（20）出土状況

河川１　完堀（北西から）

河川２　板杭（左：210、右：209）断面（北から）



河川２　自然木出土状況（北から）

河川１～３　完堀（南から）

河川３（35O）　遺物出土状況（南から）

河川３（35O）　石製品（165）出土状況（西から）

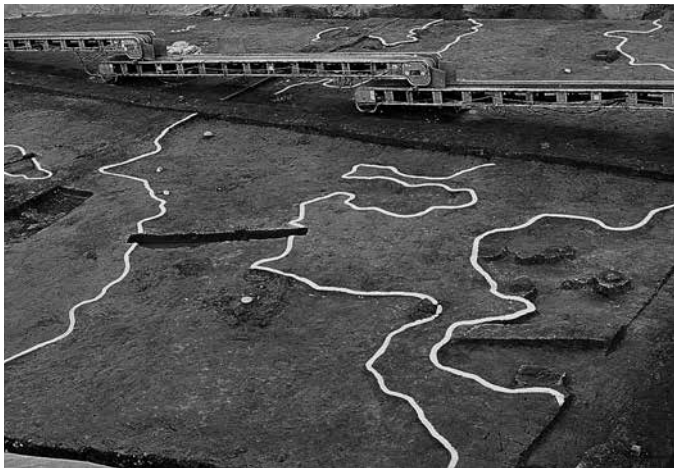
河川３　完堀（北西から）

河川４　断面（西から）

河川４（35・36O）　断面（南東から）

河川４　完堀（南から）

河川５（36O）　遺物出土状況（北西から）



河川５　完堀（南から）

河川６（38M）　断面（北から）

河川６（38N）　土器（29）出土状況（南から）

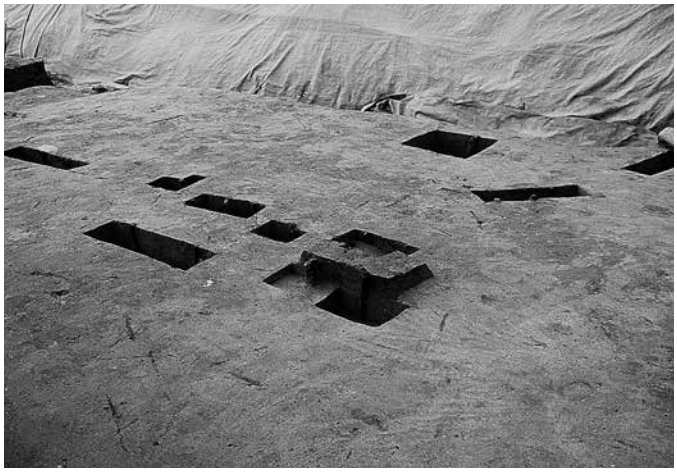
河川６（38N）　土器（30）出土状況（南から）

河川 6・SX3　断面（北西から）

河川 6・SX4　完堀（南から）

杭 11 ～ 21　断面（南から）

杭 23　断面（南西から）



杭 24 ～ 42　断面（南東から）

杭 25・24　断面（南から）

杭 42　断面（南から）

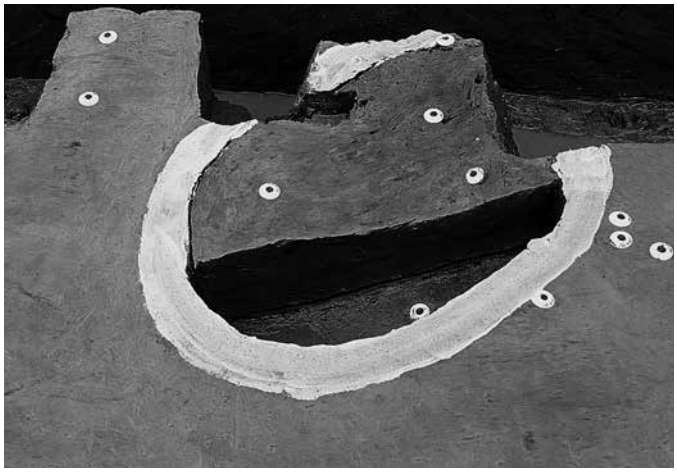
杭 48・49　断面（南東から）

杭 50・51　断面（東から）

35O　Ⅳ層　木製品（242）出土状況

35O　Ⅳb 層　木製品（226）出土状況

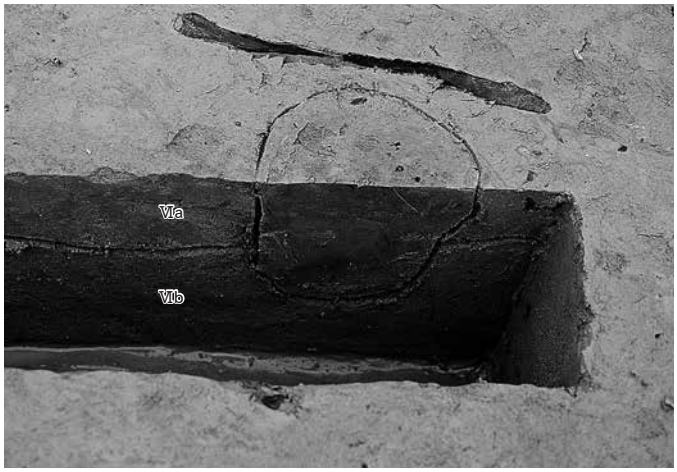
上層　完堀（東から）



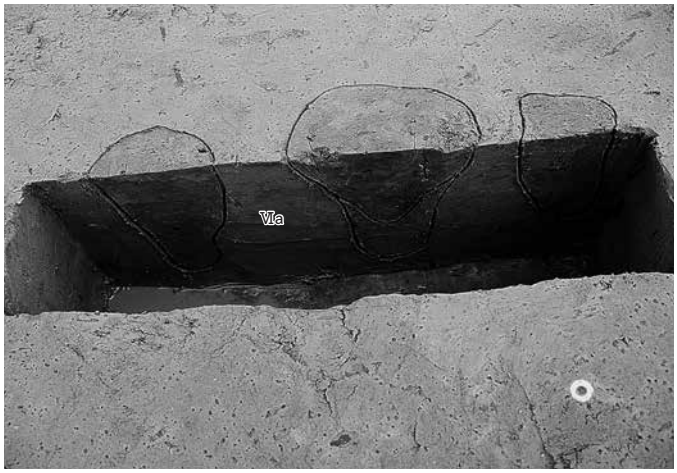
SK130　断面（南から）

SD151　完堀（北東から）

P108　断面（南から）



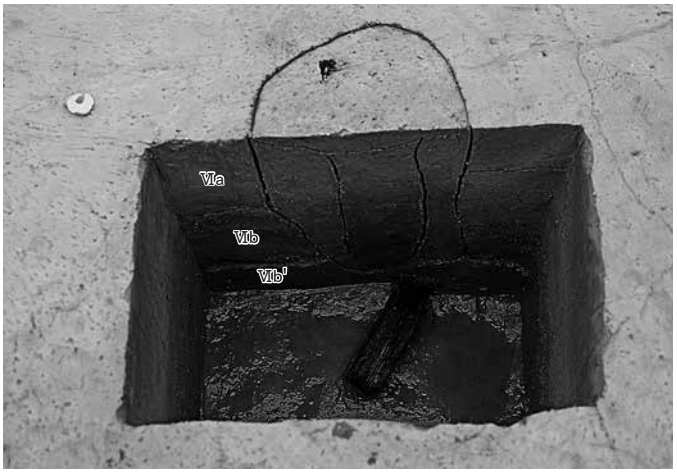
P115　断面（南東から）



P134 ～ 136　断面（西から）

P137・138　断面（南から）

P141　断面（北西から）



P145　断面（南から）

SX102　断面（南東から）

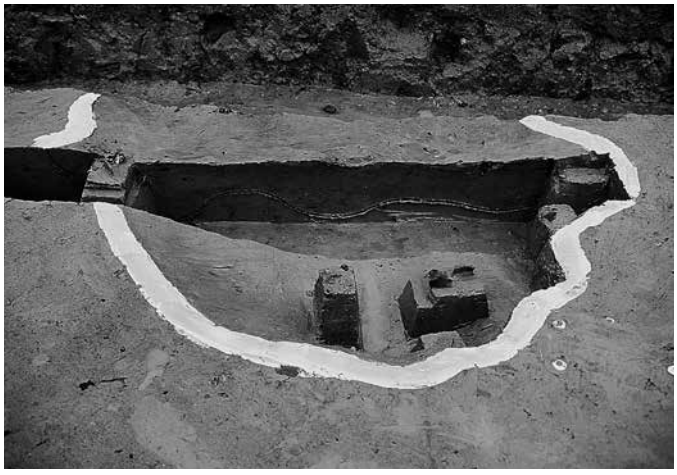
SX102b　断面（東から）

SX102c　断面（南東から）

SX103　断面（東から）

SX106　断面・遺物出土状況（南東から）

SX106　断面・遺物出土状況（北西から）



SX105　断面（南から）

SX119　断面（南東から）

SX120　断面（東から）

SX152　断面（南から）

河川 7　断面（南から）

河川 7　断面（西から）

河川 7（37O）　遺物出土状況（東から）

36O　遺物出土状況（東から）

36・37N　遺物出土状況（西から）

37N　遺物出土状況（南から）

37N　遺物出土状況（東から）

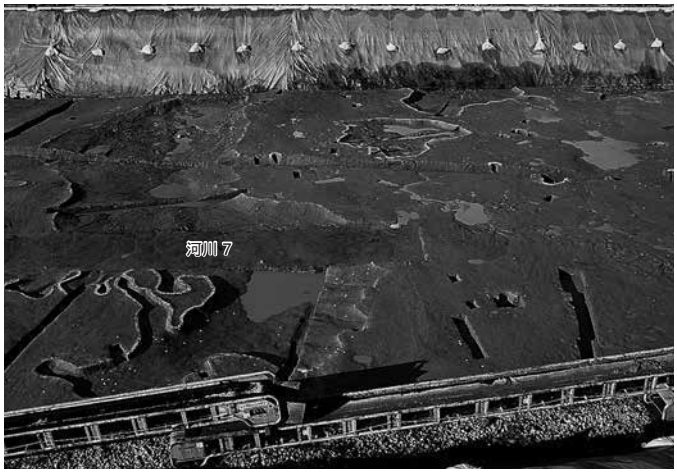
37O　土器出土状況（南から）

38N　土器出土状況（北から）

39N　土器（129）出土状況（北から）

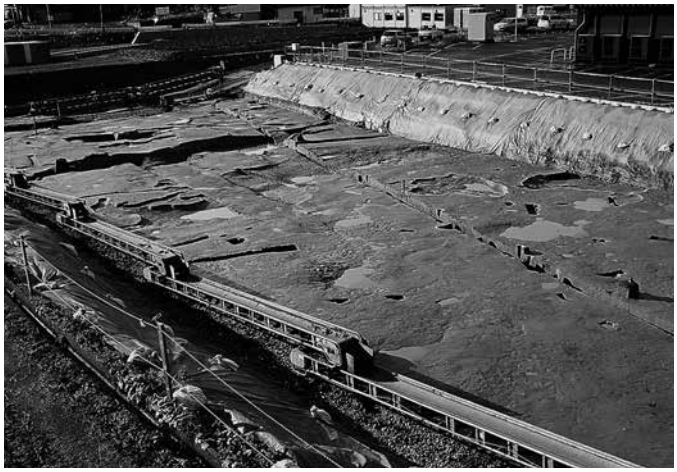
390　土器出土状況（東から）

390　土器出土状況（東から）



下層　36・37 ライン完掘（南から）

下層　完掘（北東から）



下層　完掘（東から）

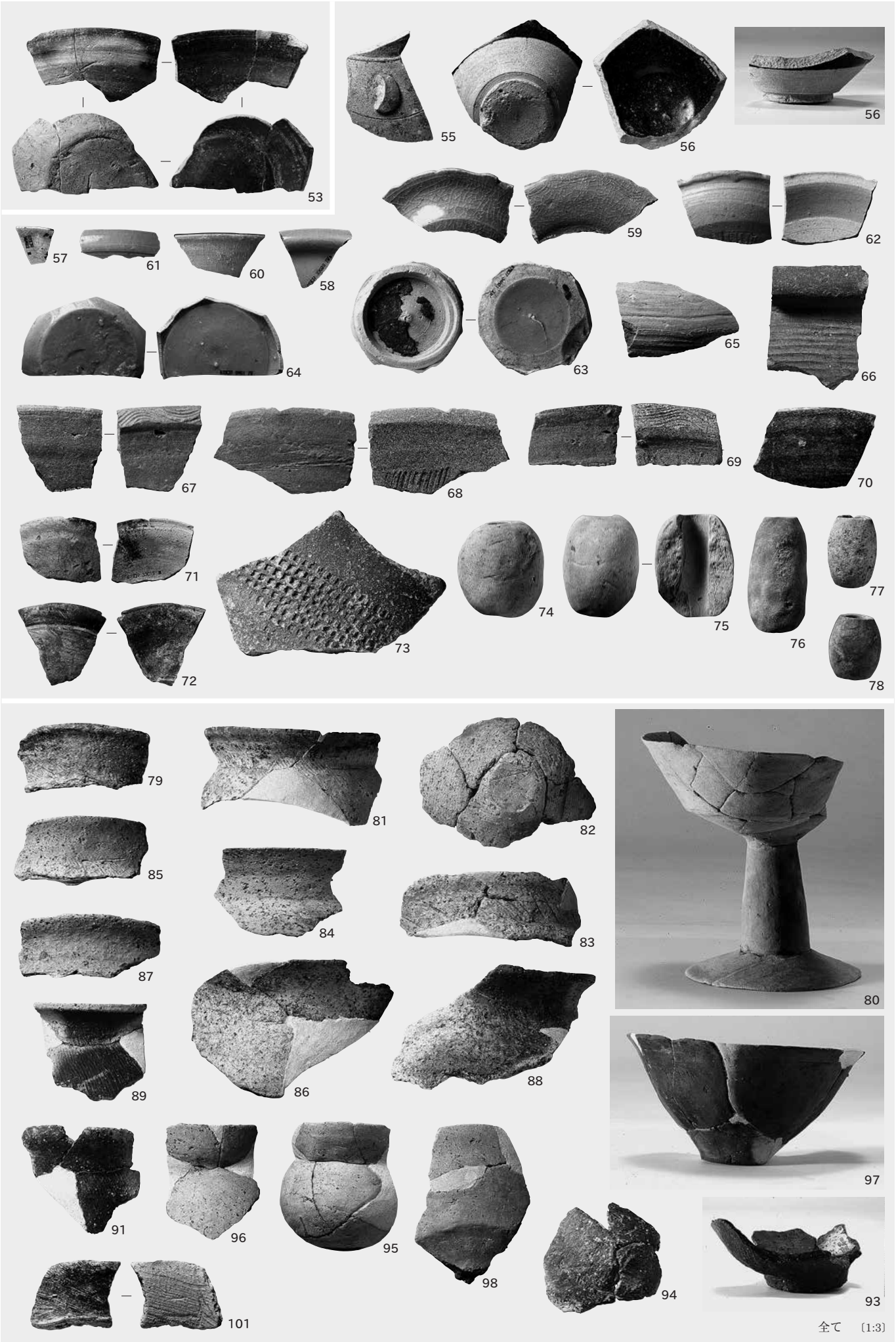
作業風景（西から）

遺跡全景（北東から）

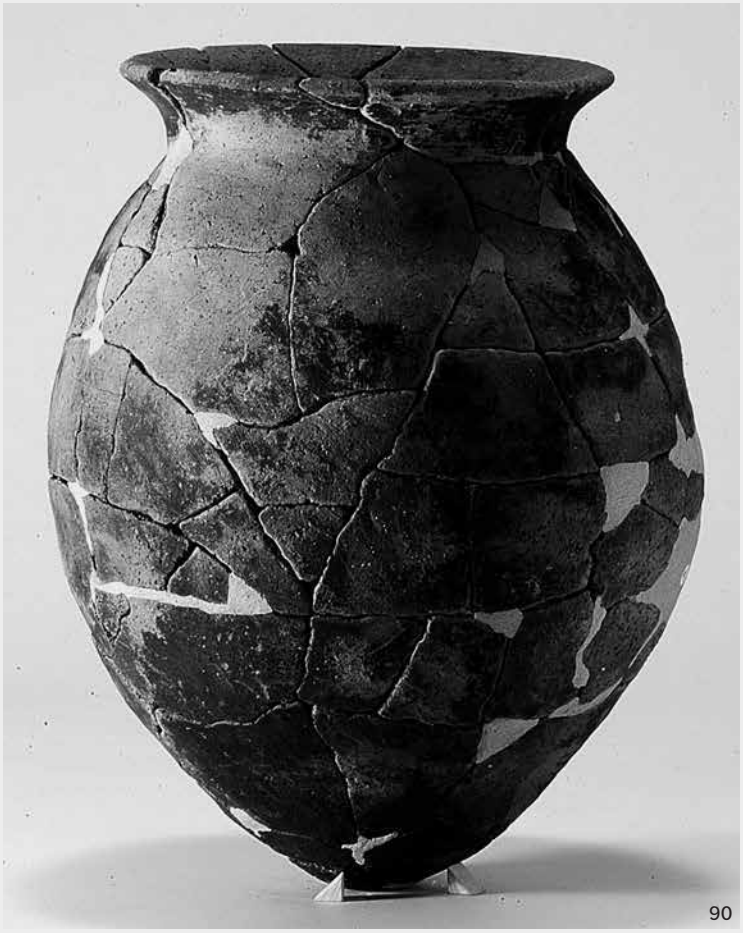
遺跡全景（南から）

1
3
3
4
5
6
7
8
9
10
2
11
12
17
13
15
16
14
19
18
22
20
21
24
25
28
26
32
23
31
33
27
34
35
38
29
30
36
39
40
46
37
41
42
43
44
45
47
48
52
49
50
51
54

全て　〔1:3〕


53
55
56
56
59
62
57
61
60
58
64
63
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
81
82
80
85
84
83
87
86
88
89
97
91
96
95
98
94
93
101

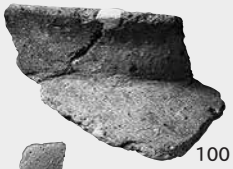
全て　〔1:3〕


90

92

99

104


100

103

102

106

105

108

110

107

109

112

114

113

119

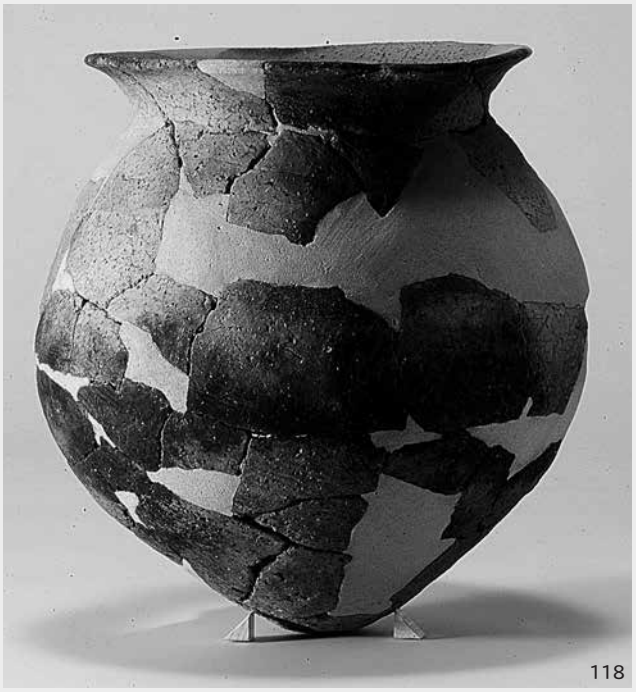
111

120

116

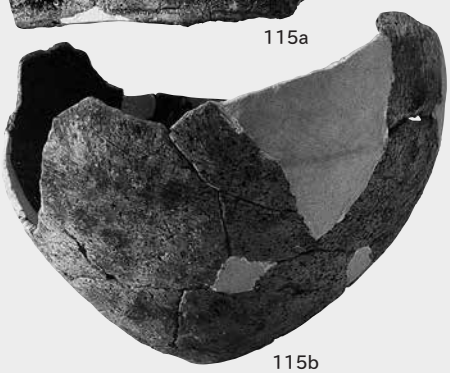
117

全て　〔1:3〕


118

123

115a


115b

122

125

121

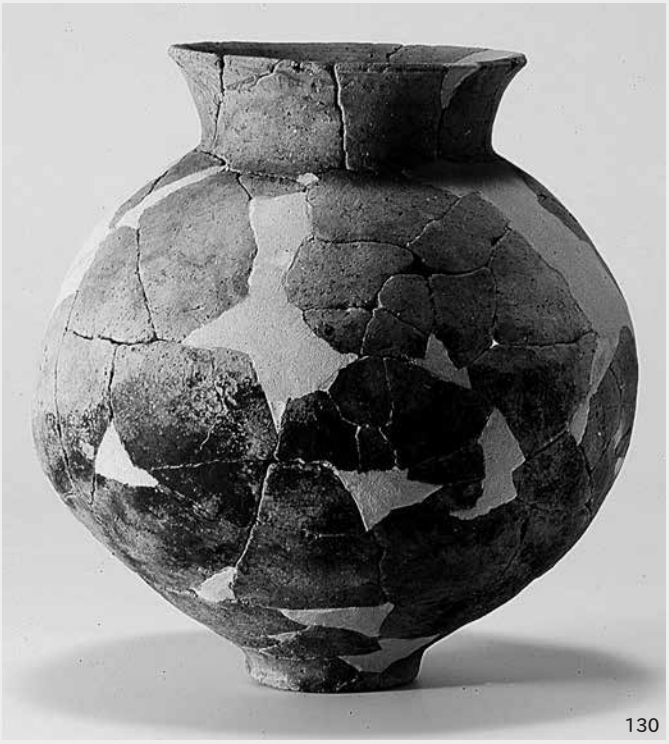
126

124上

128

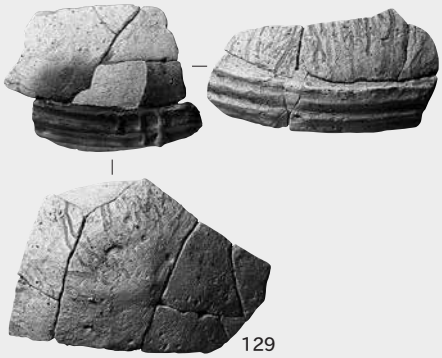
124下

127


130

全て　〔1:3〕

133


129

132

134

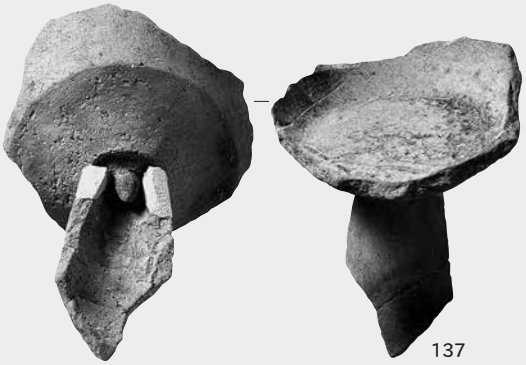
131

135

136

139

138


137

141

140

142

143

144

147

145

146

全て　〔1:3〕

148

150

151

149

152

153

155

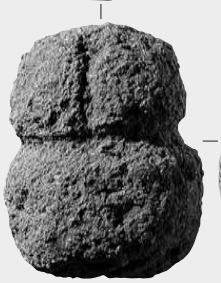
154

156

157

158

159



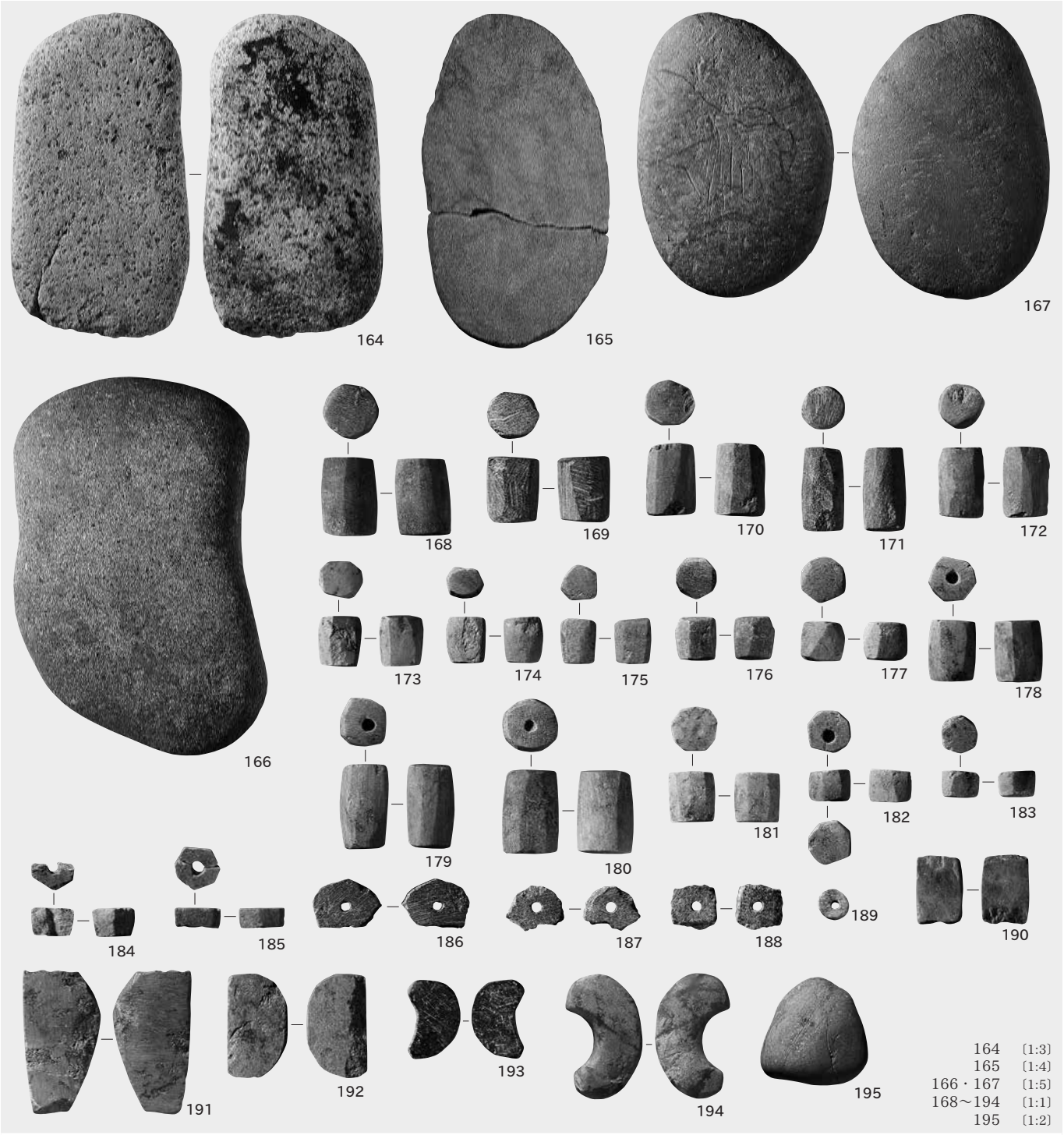
161

160

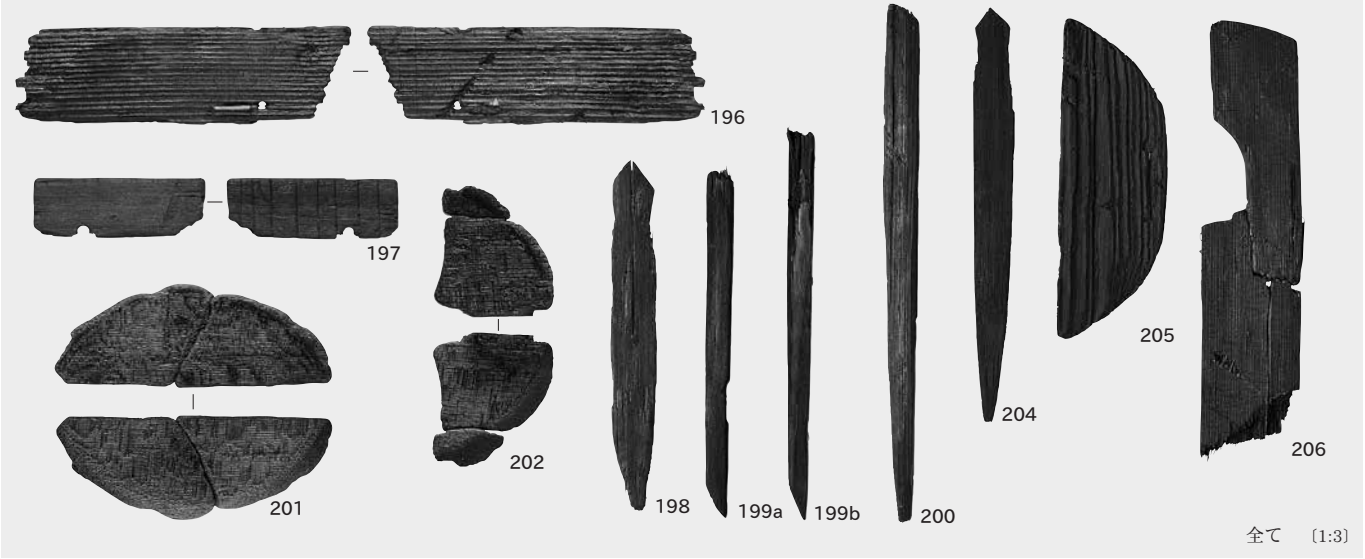
163

162

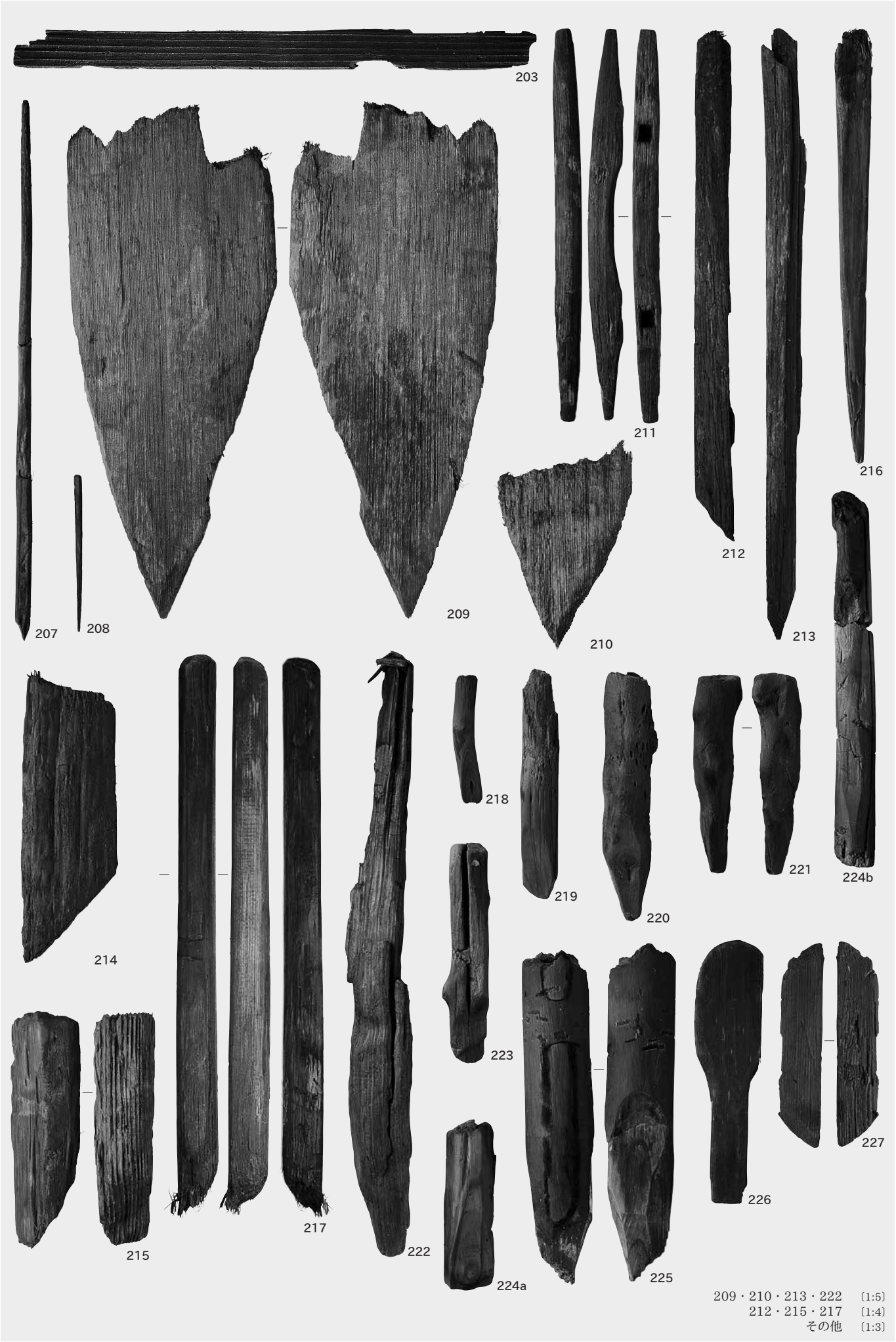
158 〔1:4〕
その他 〔1:3〕



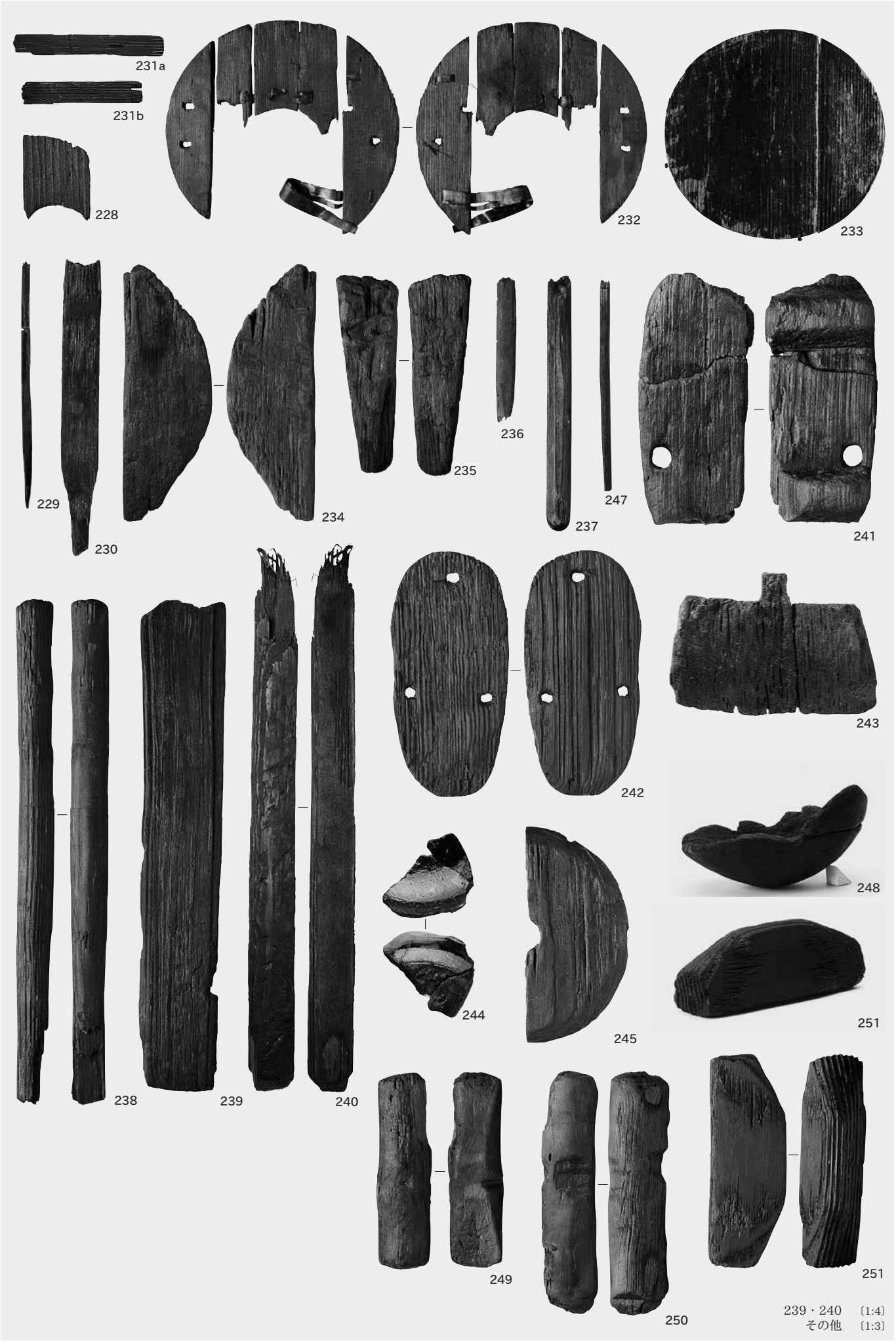
164 〔1:3〕
165 〔1:4〕
166・167 〔1:5〕
168～194 〔1:1〕
195 〔1:2〕



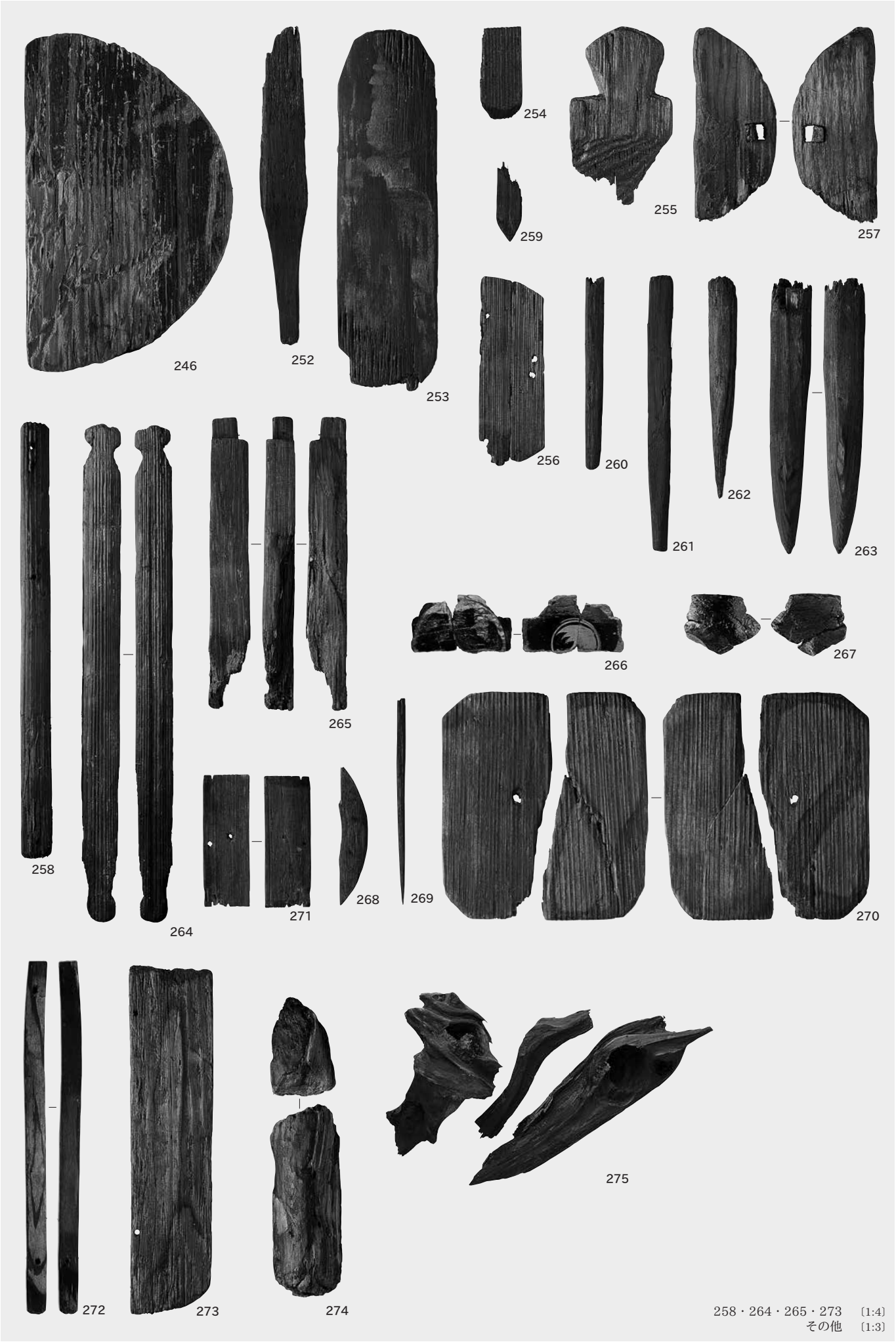
全て 〔1:3〕



209・210・213・222　〔1:5〕
212・215・217　〔1:4〕
その他　〔1:3〕



239・240　〔1:4〕
その他　〔1:3〕



258・264・265・273　〔1:4〕
その他　〔1:3〕

報告書抄録

ふりがな	よこまくりいせき　に
書名	横マクリ遺跡Ⅱ
副書名	一般国道８号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書
巻次	X
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第257集
編著者名	坂上有紀（公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）、高橋　敦（株式会社 パリノ・サーヴェイ）、黒沼保子（株式会社 パレオ・ラボ）、株式会社 加速器分析研究所
編集機関	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地１　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2015（平成27）年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
横マクリ遺跡（よこまくり）	新潟県糸魚川市大字田伏字横マクリ749番地１ほか（にいがたけんいとい がわ し おおあざ たぶせあざよこまくり）	15216	281	37度 03分 10秒	137度 54分 ０秒	20070801～ 20071221	2,040㎡	一般国道８号糸魚川東バイパス建設

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
横マクリ遺跡	遺物包含地	弥生時代後期		土器	
	遺物包含地	古墳時代前期～中期	河川１条・ピット	土器、玉作関連資料（棗玉・勾玉・臼玉未成品、剥片、ヒスイ原石）、石器・石製品（横刃形石器、石錘、磨石類、砥石、台石）	
	遺物包含地	古代～中世	河川６条	土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、青磁・白磁・褐釉・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼・瓷器系陶器・土師質土器、木製品（糸巻枠・下駄・曲物・漆器・挽物・箸状木製品・杓子・部材・杭など）	

要約

古墳時代前期～中期においては、棗玉の製作を主体とする玉作遺跡であるが、住居や工房などの遺構の存在は不明である。古代においては、小河川が平行して流れており、土師器無台椀と製塩土器が多く出土した。遺跡は度重なる土石流によって埋没したことが判明した。本遺跡からは弥生時代後期～中世まで断続的に遺物が見つかっているが、古墳時代前期～中期以外の時期の遺物は、山側に隣接する田伏山崎遺跡に由来する可能性が高い。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第257集

一般国道８号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書X

横マクリ遺跡Ⅱ

2015(平成27)年３月30日印刷
2015(平成27)年３月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟市秋葉区金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社 新潟印刷
〒950－0134　新潟市江南区曙町３丁目５－５
電話　025（383）3900

第257集　横マクリ遺跡Ⅱ　正誤表

ページ	行	誤	正
脚注	1行目	･･･1点<u>両</u>面穿孔とされ･･･	･･･1点<u>片</u>面穿孔とされ･･･